



ラストーン

～失われた都より～

1

segakiyui

1.二つの名の下に

風が渡る。

固い織の飾り一つないチュニックを、愛馬レノの白いたてがみを、草が波立ちそよぐ平原にただ一人立つ、ユーノの額の毛を巻き上げて。

目を閉じて、その冷たさと強さをじっと味わう。

たといようもなく、独りだ。

けれど、それでいい。

大事な人が笑うなら。

平和に憩うこの国を守れるなら。

僅かな間の幻にしか過ぎないとしても、破滅を気づかせないために全力を尽くす、皇女として、人として。

きっと、そのために生まれてきた。

そのためだけに生きているのだ。

「父さま、母さま、レアナ姉さま、セアラ」

つぶやいて、ユーノは目を開く。

「……サ、ルト」

守り切れなかった。

傷みに唇を噛む。

こぶしを握り締めて俯く、ユーノの前髪を風が散らす。

引くな。逃げるな。たじろぐな。

一歩たりとも怯むんじゃない。

この手には命の約束がかかっている。

「……っ」

ふいに一瞬、甘い花の香りがして、はっと顔を上げた。

微かな予感に体が震える。

それを、怖い、と感じた。

初めて胸の奥に疼く気持ちだ。

不安が募る。

(何?)

誰か年経た友人がいれば、微笑みながらこう教えてだろう。

それは誰かを愛したいという声だ。

お前が誰かに愛されたいという願いだ。

これから始まる大きな物語の予兆なのだ、と。

だが、ユーノにはそのような友人はいない。

ユーノはまだ気づかない。

魂を揺さぶる出会いが、もうそこまでやってきている。

震えを振り払うようにユーノが顔を振った、次の瞬間、

「ユーノ！」

苛立った叫び声が背後から響いた。

「ふ」

苦笑まじりに振り返ると、茶色の馬が駆け寄ってくるのが視界に入った。草を蹴散らし、地響きをたてて迫ってくる。その遙か後方から十数騎、同じようにまっしぐらに、平原に立つユーノを目指して皇宮の親衛隊がやってくる。

「遅いぞ、ゼラン！」

ユーノは快活に笑いながら、馬の首を巡らせた。

「あなたが速すぎるのだ！」

色白の顔に黒い口髭を逆立てた親衛隊隊長が顔をしかめる。

「見なさい！ 誰も付いて来れていない！」

「訓練不足じゃないの？」

「訓練は十分です！」

胸を張って言い切ったゼランに、一瞬ユーノは唇を歪めたが、すぐにくすくす笑った。

「そうかなあ」

「本当に……あなたが男であれば……」

ゼランはユーノのすぐ側までやってくると、息を切らせて肩で大きく息をついた。

「似たようなものだよ」

ユーノは肩を竦めた。

「あなただって、ユーノ、と呼んでいるもの」

「……では、本名でお呼びいたしましょうか、ユーナ・セレディス皇女、と」

ぶ、とユーノは吹き出した。

「自分じゃないみたい」

「男名の方がお気に入りですからな」

「うん」

はあ、とまた嘆息する相手に、今度は優しく微笑む。

(ユーナ・セレディスは、いない)

胸の中に響いた声は切ない。

目を閉じて、その声を深く押し込める。

どこにもいない。

それでも、その小さな声は抵抗するようにユーノの胸の底でもがいて跳ねた。

(わかってる)

素っ気なく応じて、ユーノはその声を切り捨てる。

(もう言うな)

目をぱっと開けて、ユーノはゼランを追ってようやく辿りつき始めた隊員達に笑いかける。

「ユーノさまあ！」

「ゼラン隊長お！」

「お前達は恥ずかしくないのかっ！ 小娘一人にしてやられおって！」

きりきりしたゼランの怒声が響き渡って、ひや、と数人が首を竦めた。

「いや、だって……ユーノ様は女じゃないですよ！」

「そうそう、とても人間とは思えません」

「辺境にいるという、人の姿をした魔性のものが化けてるとか」

「ふううん」

口々に遠慮なしの暴言を吐く連中にユーノは目を細めた。体を起こしてレノの手綱を操り、ゆっくりと最後の一人の周囲をぐるりと回る。

「私が魔性、ねえ？」

「あ、あ、いや、その、ものの例えということで！」

相手はひくりと引きつった。

「いいのかなあ……そんなこと言って？ 仮にもあなたが仕えてる皇女なんだけど？」

「あ、あの、えーとえーとえーと」

「ゼラン？ 礼儀作法がなってないんじゃないのか？」

「御存分に」

「うわああ」

ゼランが冷たく言い捨てて相手が悲鳴を上げた。

「ちょ、ちょっと、ユーノ様」

「うーん、何してもらおうかなあ。一日剣の相手してもらおうかなあ」

「うわ」

「何、その、うわって」

「いや、だって、ユーノ様の剣の相手したのって、翌日一日は寝込むじゃないですか！」

半泣きになった相手ににやにやしなから、ユーノはうなずいた。

「そうみたいだね。鍛え方が足りないんだろ、こーんな小娘にしてやられるんだからさ？」

ちらっとゼランを見てやったが、相手は知らぬ顔だ。

「隊長！ ユーノ様！ 俺、明日は家に帰って子どもと遊ぶ約束しててですねえ！」

「う、そ」

「は？」

ペろ、とユーノは舌を出した。

「嘘だよ、何慌ててんのさ」

相手がほっとした顔になって、露骨に深い安堵の息をつく。

「ちえ、ゼラーン、まだ皆はあはあ言ってるから、先に帰るよ？」

「え、あ、待て、ユーノ！」

「はっ！」

うろたえたゼランにあっさり背中を向け、ユーノはレノに声をかけて走りだした。

こら、また置いていかれたではないか、この馬鹿ものども！

背後で叫ぶゼランの声、うげええとかひえええとか情けない叫びが響き渡るのにくすりと笑って、
 どんどん速度を上げてセレドの街に戻っていく。

(そうだ、ユーナはいない.....誰にとっても)

叩きつけてくる風に押さえ切れなかった声がまた小さくつぶやいた。

セレド皇国は大陸の南、内陸部にある小国だ。

穏やかな気候は穏やかな人民を育てるのか、安定した治世は200年に及び、現在のセレディスは4世、
 美しい妻ミアナ皇妃と三人の皇女とともに慕われながら敬われている。

皇女三人は上からレアナ19歳、ユーナ17歳、セアラ15歳の花の盛り、セレディス皇の目下の悩みは
 各々にいつどんな契りの相手を見つけてやるかということだという平和さ。

だが、真実は、いつも二つの顔を持つ。

(ユーナ、ユーノ、ユーナ、ユーノ)

レノを走らせ続けているユーノの頭の中には、二つの名前が入れ替わり立ち替わり閃いては消えていく。

ユーナは女名、ユーノは男名、その間で不安定に揺れている自分。

考えても仕方のないことだ、自分はユーノとして生きるしかないのだ。

そう思いつつも、最近ときどき妙に気持ちが揺れる。

(ずっとこのままでいくしかないのか)

ずっと一人でいるしかないのか。

諦めたはずの想いに揺さぶられて耐え切れず、今日のようにどこまでも、駆けられる限りの速度でど
 こか遠くへ駆け去って行ってしまいたくなる。

(そんなことは、無理なのにな)

どこまで逃げても逃げ切れるわけではない。

どれほど逃げても自分の気持ちからは逃げられない。

そんなことはわかっているのだが。

それに、ユーノが逃げたが最後。

(セレドはカザドの手に落ちる)

果てしなく権力と血を求めるカザドの王、カザディノの手に。

ユーノは首を一つ振って、速度を落とした。

中央区、すり鉢状になったこの国の皇宮のある街の門が見えてきている。

もっとも、門といっても灰色の石で作られた二本の門柱のみだ。国境を示す区切りでしかない。兵が
 立つわけでもない。

そんな警戒をしなくても大丈夫だと人々は信じている。

そう。
人々は信じ切っている。

ユーノは無意識に腕を撫で、それに気づいて苦笑した。

灰色の柱の間を通り街に入り、いつものように皇宮へ続く道をまっすぐに駆け抜けようとしてレノを止める。

「？」

人だかりなぞ滅多にないのに通りの片隅で群衆が集まっていた。

少し手前で馬を降りる。

「レノ、少し待ってて」

うなずくように首を振った愛馬から離れて近寄ったが、いかんせんユーノの背では群衆の中は覗き込めない。仕方なしにごそごとと人の間へ潜り込んでいくと、途中から気づいてくれた数人が道を開いてくれて、群衆の輪の中央に出た。

「一体、何の騒ぎ……！」

目の前に見なれない風体の男が一人。

(カザド?)

咄嗟に腰の剣に手が滑りかけ、ユーノはようよう自制した。

こんなところで仕掛けてくるわけではないし、大人しく群衆が取り囲んでいるわけもなかろう。

第一、目の前に居るのは異国風の服装はしているがひよろりとした優男、腰に剣も帯びてないばかりか、疲れ果てているのだろう、ぐたりと寝そべっている。

「どうした？」

「あ、ユーノ様！」

男の側にしゃがみ込んでいた兵が慌てて立ち上がり頭を下げた。肩に皇宮の見回り役の徴がある。

とすると、この行き倒れの件はもう皇宮に伝わっているらしい。

周囲がユーノを見つけてざわめいたが、常日頃から町中をうろろしている彼女に民衆は慣れっこだ。

「旅人らしいのですが、よろよろやってきていきなり倒れたらしいのです」

「ふうん」

近寄って覗き込み、ユーノは思わず息を呑んだ。

泥や埃、すり傷などでかなり汚れているが、この辺りでは見ないような黄金色の髪、男にしては白い肌は滑らかで、年の頃は22、3、いやもう少し若いっているか。服装は粗末だが体格は悪くない。細身ながらも筋肉はしっかりしている。

それだけなら人だかりもすぐに離れようが、問題はその女性と見まごうばかりの美貌だった。

長い睫、通った鼻筋、聡明そうな額の下に今は閉じられているが大きな瞳。レアナを見慣れているセレドの者でさえ、つつい覗き込み見惚れてしまうような艶やかさだ。

今しもふっくらとした薄紅の唇が開いて小さな息を紡ぎ、

「は……」

掠れた声を零した。

喘ぐような甘い響きに、ごく、と見回り役の男が唾を呑み、固まってしまう。

ユーノも胸を貫かれたような気がして動けなくなった。

静まり返った群衆が見つめる中で、男の金の睫が微かに震えてゆっくり持ち上がっていく。

「ああ……」

誰が漏らしたのか、群衆から切な気な声上がる。

まるで、黄金の宝石箱が開いたようだった。

中におさめられていたのは極上の二品、深い色の大きな紫水晶。曇りも汚れもなく、しかもゆらゆら妖しく揺れる光を宿し、覗き込む人間を吸い込み虜にするような輝きがある。

(こんな……瞳が……あるのか……)

ぼんやりとユーノは思った。

相手の瞳から目が離せない。揺らめく光を必死に追って、その全ての光を見届けたくなる。一度捉えたと思った視線はすぐに乱れるような光に紛れ、またそれを追い掛けてなお近寄ってしまう。瞬きする、その一瞬に睫の下に瞳が隠れるのがじれったくてならない。

「目を……閉じるな」

思わず手を伸ばして男の頬に触れ、ユーノは命じた。

「……は？」

温かな頬から柔らかな声が間隔を置いて戻ってくる。

深くて甘い声だ。耳を侵し、体の奥まで滑り込まれるような気がして、ぞくりと皮膚が粟立った。

「もっと、見せて...」

我を失ってねだってしまう。

「ユ、ユーノ、様？」

強ばった声が耳に飛び込んで、ユーノはいきなり我に返った。

自分が寝そべった相手の体に跨がり、ほとんどのしかかるような状態で、しかも相手の顔を両手で包むように覗き込んでいるのに気づく。

「っ！」

恥ずかしさで全身に火がついた気がした。

(私は、何を)

なのに体が固まってしまって動けない。相手の頬を包んだ手を放せない。

訝しそうに相手が体をのろのろと起こす、その動きにそって相手の顔を固定したまま、ユーノはへたと後ろに座り込む。

「あの、君.....」

「.....っ」

男が頬に当てられたままのユーノの手に触れた。しなやかな指先が肌に触れると、またぞくりとした衝撃が走ってユーノは身を竦めた。

自分の状態には気づいている、けれど、手が放せない。目も放せない。

体が相手に向かって一気に開いていってしまうような感覚、その今まで感じたことのない感覚に、ユーノは混乱しうろたえた。

「す、すまない」

「？」

「お、おかしいと思うだろうけど、そのっ、手が、手が放せなくてっ」

戸惑った顔に見つめられて声が上ずった。呼吸が乱れてまともに考えられない。

「あのっ、私だって、そのっ」

「.....大丈夫だよ」

ふわりと相手が笑った。花が咲くような笑顔のまま、ユーノの手に自分の手を重ねる。

「心配してくれたんだね？」

「こ、こらっ！」

はっとしたらしい見回り役が声を荒げた。

「セレドの姫だぞっ！ 無礼なまねをするなっ！」

「え？」

男が不思議そうに瞬きした。

「姫？」

「あ」

まじまじとユーノを見て、また瞬きし、男はゆっくりと首を傾げる。

「君.....女？」

「あ.....」

ふいに、ユーノは自分がとん、と遠くに突き放された気がした。

あれほどくっついて離れなかったように思えた手から力が抜ける。するりと滑り落ちた手をそのままに、なぜかぼやぼや歪んだ視界で、ぼんやりと相手を見た。

「う……ん」

うなずいて俯いて、その瞬間にユーノは、ぴんぴん跳ね返って手入れもしていない焦げ茶の肩までの髪や、埃まみれで汗くさいチュニックや、姉や妹といつも比較される自分の容貌を一気に思い出した。

いつもどこでも女性と認識されることさえなかった、数々の記憶も。

(何を、期待した……?)

苦笑を押し上げようとして、それがうまくいかなくて唇を噛む。いつものことだ、そう思ったのに、何だかひどく居置まれなくなった。

急いで立ち上がった途端、背後から優しい声が響いてユーノはぎよっとする。

「その方ですか、ユーノ」

「……レアナ姉さま」

振り返ると、レアナは馬車から付き人とともに降りてくるところだった。側にゼランも控えている。

知らせに急いで駆けつけたのだろう、白いドレスを捌きながら、栗色の髪を背中に波打たせ、赤茶色の瞳を慈愛に輝かせている。象牙色の頬はうっすらと染まって、興奮と緊張が見てとれた。目の前の男が大きく目を見開き、レアナに見惚れるのを目の当たりにして、ユーノは思わず身が竦んだ。

(ああ、やっぱり)

一瞬泣きそうになったのを咄嗟に目を逸らせてごまかす。それでも視界の端に、まるで引き寄せられるように近づく二人が入って、胸が痛んだ。

「セレド皇国、第一皇女、レアナです。わがセレドで酷い目に合われたとか？」

「あ、いえ」

男は立ち上がろうとして苦しように顔を歪めた。それと察したレアナがそのままにと命じるのに頷き、その場で低く拝跪の礼を取る。

「お国をお騒がせして申し訳ありません。ラズーンのもと、旅に身を委ねるアシャと申します」

「アシャ」

型通りの文句を歯切れよく応じる相手に、レアナが微かに唇を綻ばせた。

(アシャ)

ユーノも胸の中で名前を繰り返す。

また微かに花の香りがした気がして戸惑いながら、そっと顔を元に戻した。花の香りはアシャからだろうか、他の人間は気付かないのだろうか。

「何でしょうか？」

「いえ」

微笑むレアナに見惚れるようなアシャの姿にぼつんと言った。

「アシャというのはここでは女名だ」

胸の中に開いた穴に吹き込む風を感じまいと、振り向いた相手にからかい口調で続ける。

「あなたにはよく似合ってるけどさ」

「ユーノ！」

レアナのたしなめに薄笑いを返して、ユーノはまた視線を逸らせた。

何度も繰り返された光景だ。今さら傷つくほどでもない。

ひねくれて胸の中でつぶやいてみせる。

(どうせ私は女とは思われていない)

「申し訳ありません。他国よりのお客様に」

「いえ、とんでもない。私は通りすがっただけのものです。それに」

ふいとアシャが奇妙な調子でことばを止めて、ユーノは振り返った。細めた相手の目が笑っていないのに気づく。

「私はこちらで酷い目にあっただけではありません……むしろ助けて頂いたようなもの」

くる、とアシャが唐突にこちらを向いてユーノは固まった。

「ユーノ様に」

アシャは如才なくうやうやしい礼を向けてきた。

「あ」

それが一瞬たとえようもなく嬉しくて、けれど次の一瞬、それは単にこの国の皇族に対する敬いだと気づいて、ユーノは一気に落ち込む。

(そう、だよな)

身寄りのない他国で権力者に逆らうようなへまをする旅人はいない。アシャがユーノに向けたのは、レアナに向けたような純粋な好意ではなくて、保身のための処世術だ。もしユーノが皇族でなければ、笑顔どころか振り向いてもくれないはずだ。

「アシャは今夜の宿はあるのですか？」

「あ、いえ」

「では、皇宮にいらっしゃい」

「は？」

「セレドで困っておられる他国のお客様を放っておくわけには参りません」

「でも、姉さま！」

ユーノは慌てて口を挟んだ。

確かにアシャはカザドのものとは思えない。だからと言って敵ではないと言い切れない。

「何ですか、ユーノ？」

「あ」

まっすぐな瞳でレアナに問い直されて、ユーノは唇を噛んだ。

(話すわけにはいかない)

カザドが何を仕掛けてきているか、ユーノが何を恐れているのか、レアナに打ち明けられはしない。

「では、どうぞ、アシャ」

レアナがにっこりと馬車へ誘う。これもまた見慣れた光景で、ああそうおさまるのか、よかったな、と周囲が頷きあう中、誰も咎めるものはない。皇族の守護たるゼランでさえも。むしろアシャの方が眉を寄せてユーノとレアナを見比べていたが、やがて気持ちを切り替えたようににっこりと笑った。

「では、お言葉に甘えます、レアナ様」

「姉さま、私はレノで戻る」

「わかりました」

唇を噛んで背中を向ける。

うなずくレアナとその後ろへ寄り添っていくようなアシャの姿をもう見ていたくなかった。

「.....いつものこと、なのにな」

ざわめく民衆が散り始める。レアナさまはお優しい、あいつはここで行き倒れて幸運だった、俺があいつになりかわりたい、レアナさまと御一緒できるのならな、そうおどけたのもいて、どっと賑やかな笑い声があがる。

平和なセレド。明るくて親切でお人好しな民。分け隔てなく身分を越えて民を愛する皇族。

それは素晴らしいことだ、とても美しいことだ。

俯きながらユーノはレノのところに戻った。

何だかひどく疲れていて、そっと愛馬の温かな体にもたれかかる。落ち込んでいる主人に気づいたのか、レノが顔を回して鼻面を寄せてきた。

その温もりにユーノは小さく息をついて目を閉じた。

「大丈夫.....慣れてるから.....何でもない」

いつものことだ。たいしたことじゃない。

ユーノが女だとびっくりされ、レアナが美しいと褒められる。

人は皆レアナに憧れ、声をかけられたいと望み、側にいることを幸福に思う。

アシャもそう思っただけだ。誰もが思うのと同じように。

(けど)

また小さな声がユーノの胸で弾けた。

あの頬を放したくなかった。あの瞳の中から消えなくなかった。

あの微笑みを、今度だけは自分に向けて欲しかった。

(馬鹿な)

舌打ちして首を振る。

(そんなことは諦めたはずだ)

それでも未練がましく薄目を開いて、遠ざかる馬車を見た。

「男に.....生まれてればなあ.....」

ふいにそうつぶやいて、その通りだな、と思う。

男であれば、アシャと友人にはなれたかもしれない。焦がれてもらわなくても、旅の話と一緒に酒盛りしながら聞けたかもしれない。

いや、今だってできるだろう、レアナに向けられる眩げな視線さえ気にしなければ。

もう一度首を振ってレノに跨がり、ユーノは俯き加減に皇宮へ向かう。

風が欲しかった。

何もかも吹き飛ばしてくれる風が。

自分の切なさも孤独も、全て消し去ってくれる風を得るために、ユーノは唇を噛んで、ことさらレノを駆り立てた。

2.セレド皇宮

広くゆったりとした石造りの浴室で、アシャは旅の疲れと汚れを落としている。

久しぶりの屋内、敵に命を狙われることもない。

体のあちこちに負った傷と逃亡で酷使した筋肉に熱い湯がしみ入るようだが、それでもこの寛ぎはたまらない。セレドに沐浴の習慣があつて助かった、と思う。

「ふう…」

窓の外はまだ薄闇、さすが田舎だけあつて、この暗さでもう周囲には静けさが満ちている。

湯舟にゆったりと体を伸ばして、額に張り付いた濡れた髪を掻きあげ、アシャは湯舟の端に頭をのせた。

小国、セレド。

ラズーンより遠く離れたこの国の名前は、実は意外なことで知られている。皇宮に住まう3人の皇女、中でも長女レアナの美しさは旅芸人や吟遊詩人が歌にもするほどなのだ。

アシャ自身も、やれどこかの大国の王子が手に入れ損なって悔しがったとか、軍を率いて攫いにいったところ、レアナに微笑まれてすごすご戻ったとか、お伽話のような噂を聞いている。

半分はでっちあげだろうと思っていたが、本物は確かに美しかった。それだけでもここまでやってきたかいはあつたかもしれない。

末の姫もまだ幼いながら、凜とした気迫があり、レアナと揃つての母親似、あつという間に人目を魅く美姫になろうことは間違いない。

がしかし。

「血というのは不思議なものだな」

苦笑しながら思い出したのは、ユーノと呼ばれたあの『姫』で。

のしかかられて頬まで包まれたのに、それでもすぐに女性だとは気づかなかつた。少年のような出で立ちのせいもあつたが、瞳の強さきつき、細くはあつたが弾くような瞬発力を漲らせた手足は少女と思えぬほど固かつた。皮肉なことばの鋭さは並々ならぬ聡明さを思わせた。

皇子であれば、さぞかし名のある者となつて、ゆくゆくはラズーンも名将を一人得たかもしれないが。

「あれでは、なあ」

まるで尖った針や研いだ刃を側に横たえて休むようなもの、言わんや床を共にするとは、考えるまでもない相手だろう。

「まあ……好んであれを妻にと望む男もいまい」

他に二人も美しい姫がいるのだ。国としては一人ぐらいああいう皇女が居ても、それはそれでいいのかもしれない。

「さて」

あんまりのんびりしては宴に遅れるな、と湯舟から出て用意されていた布で体を拭いかけ、ふ、とアシャは動きを止めた。

「……」

肩越しに窓の外を見遣つて、さりげなく濡れた体を拭きながら場所を移動する。気配を殺して脱ぎ捨てた衣類まで辿りつき、中から一振りの短剣を取り出した。

それは黄金色の短剣だった。

飾りは地味で、煌めく光だけがその高価さを語っているが、どちらにせよ一介の行き倒れの旅人が持つには明らかに分不相応と思われるはずだ。

親衛隊が荷物を探っていたが、ぼろぼろの衣服まで探ろうとしなかつたのは手落ちだった。それこそ刺客であつたら、皇宮の守りなどできたものではない、それがこの国の穏やかさを語つてあまりあるな、と苦笑する。

「？」

いつでも反撃できるように手早く下着を身につけたアシャは、やがて訝しく窓の外を再確認した。

「……俺じゃないのか」

つぶやきながら、薄暗い庭園に動く四つの影を凝視する。

大柄で荒い似たような気配が3つ、唯一違う1つの影はひどく小柄で華奢に見えるが、じりじり間合いを詰めてくる相手に怯んだ様子もない。抜き放つた剣は青眼のままだ。

(あの3人、結構な遣い手のようだが)

大柄な影は男だろう、盛り上がった腕で幅広の剣に力を込めていく。間合いがどんどん狭まってくるが、小柄な影はやはり動かない。

「……」

こんなところで目立つつもりはないが、仮にも皇宮、騒ぎが起こって万が一にもレアナが傷つくようなことは困る、とアシャは目を細めて剣を抜いた。こじれるようならこちらが始末をつける、そう思った瞬間、きらりと館の灯を跳ねて光が走り、一気に3人が残りの1人に襲いかかる、が。

「！」

まるで弾かれたように軽々と小柄な人影は空に舞った。飛び上がりながら一閃、追い続ける相手に一閃、飛び下りて駆け抜けざまに一閃、きっちり三振りまで片付けて、男達が呻きも上げずに倒れ込む。

しかも、それは当然のことだったように、倒れて身動きしない男達を確認するまでもなく、小柄な人影が剣を鞘におさめた。

(こんな遣い手がセレドに居たのか)

アシャは思わず瞬きした。

レアナの美貌に勝るとも劣らず、これは語られ歌われていい腕前だぞと呆れていると、小柄な人影が軽く口笛を吹く。独特な調子で二度吹くと、慌てたように庭の端から男が走り出してくる。

「片付けて」

「は」

声が応じるのに、脅すように小柄な人影は声を低めた。

「他言するな」

「はっ」

(何?)

顔を曇めたアシャの目の前で男は地面に転がった死体を次々どこへともなく引きずっていく。

「隠した...？」

なぜだ、とアシャは不審に思った。

命じ慣れた口調から小柄な人物は身分のある者なのだろう。

ましてや皇宮の庭で襲われたのだから、一斉に警戒体勢に入ってもおかしくないのに、相手は騒ぐどころか、今の出来事をなかったものように扱おうとしている。

どうも見た目ほどここは穏やかではないのか？

眉を寄せたアシャは響いた声に顔を上げて、なお愕然とした。

「ユーノ？」

「はい、姉さま」

皇宮の中から紛れもなくレアナの声が呼び掛けて、小柄な人影がはっとしたように応じたのだ。

するすると静かな足取りで明りの中に入って行くのは、確かに昼間見た中の『姫』だ。

(あの姫、が?)

まさか、とアシャは眉を寄せた。

今のはどう見たって、手練同士のしのぎあい、しかも3対1という圧倒的な不利をものともせず片付けた手腕は、とても少女のものではない。

だが、続く会話にアシャはより混乱した。

「何か物音がしたようだけれど」

「そう？ 気のせいじゃない？ 私、このあたりをぶらぶらしてたけど、何も聞かなかったな」

「何かを聞き間違えたのかしら」

「そうだろう。で、何の用？」

「もうすぐ、宴が始まりますよ、少しは身なりを整えていらっしやい」

「はあい」

平然とした顔で館に入るユーノの顔をじっと見ながら、アシャは目を細めた。

すぐに脳裏に過ったのは昼間のユーノの対応だ。

アシャへのぴりぴりした警戒心、レアナが皇宮にアシャを連れ込むことへの抵抗。

では、あの娘は知っているのだ、今この国が見かけほど穏やかではないことを。何か見えない荒れがあることを。

しかも、それを承知で周囲にほとんど知らせずに密かに食い止めているらしい。

(だが、なぜだ?)

3人の刺客相手に怯んだ様子もたじろいだ様子もなかったのは、それがおそらくは日常茶飯事だからだ。1人で闘わなくてはならない状況が初めてではないからだ。

だがしかし、ユーノは皇女なのだ。守られ庇われるはずの存在なのに、どうして隠そうとしているのか。

「.....ラズーン支配が.....外れ始めたか」

苦々しい思いで舌打ちしながら剣をおさめ、身支度を改めて整えながらアシャは顔を歪めた。

それを認めることはアシャの運命を狂わせる。

振り捨ててきた道を、果たすべき仕事を思い起こさせる。

同時にそれはアシャの胸の奥深くに芽吹いた重苦しい倦怠も引きずり出す。

どうせ偽りの世界、幻の舞台なのだ。

どれほど華やかな美姫もどれほどかけがえない絆も、『ラズーン』の目論みの前には塵ほどの重みもなく、いずれは流れに巻き込まれ消え失せていくのだ。

知らない方が幸せということもある。知ってしまった者の孤独と不幸はわかるはずもない。

微かなため息をついて身なりを整え、仕上げに覗き込んだ鏡の中からよく見知った顔が見返してきて、それこそ、この時に余りにも意味深く、アシャはなおさらうんざりした。

「わかる奴には一目でわかるか」

飾り紐を取り出し、梳きあげただけで額に乱れ落ちてくる髪を絡めるように、紐で額を頭を飾り巻きする。あえて華やかな結びを凝らして房を顔の横で垂らすと、もともとあまり好きではない造りものじみた女顔がますます女っぽく見える。

ほとぼりがさめるまで仕方がない。しばらくセレドに身を潜め、行く先を考えるつもりなら、いっそ紅も引いて女装でもするかと考えたのは、我ながら煮詰まった証拠だとがっくりした。

「.....やれやれ.....」

今の一件は事情がわかるまで、こちらも口を噤んでおこう。

アシャは肩を落として浴室を出た。

この人は、綺麗だ。

アシャが広間に入った瞬間、周囲から上がったどよめきに玉座近くに居たユーノは目を見張った。

もちろん、ユーノだけではない。そこにいる者全てがアシャに目を奪われている。

深紅の長衣の肩に金褐色の艶やかな髪が乱れている。額に幾重にも巻かれた朱と緑の飾り紐に絡みつく髪は金色の花冠、なおそれよりも鮮やかな紫色の瞳が極上の宝石を思わせる色に輝いて、ゆっくり周囲を見回す仕草もまるで何かの儀式のよう、静かに皇の前に跪くのを止めたくなるほどの高貴さがある。

「ラズーンのもと、旅に身を委ねる、アシャと申します」

旅人の決まり文句が詩のように響いた。

女達が息を呑む。その声に耳元で囁かれることを夢見たような顔で連れが微笑むのにむっとした男の一人が、低い声で吐き捨てる。

「女名前か。道理で優男なわけだ」

「よくぞ来られた」

アシャの正面一段高く設えた玉座に座ったまま、セレディス4世が鷹揚に応じた。

「災難であったな。わしはセレディス4世、これは妻のミアナ皇妃。それはわしの娘達だ。第一皇女レアナ」

皇の真横に居たレアナがにっこり笑った。

絹の、袖がない白いドレス、裳裾を長く引きずって、その上に同じような形の、けれど淡紅色の薄ものを重ねていて、会釈する動きにふわりと揺れる。

華やかな香りが漂い、アシャも思わずと言った満面の笑顔になって礼を返す。

「第三皇女、セアラ」

いつもの通り、皇はユーノより近くに居たセアラを先に紹介した。

彼女もレアナとお揃いのドレス、だが下のものはクリーム色で、薄ものは濃い目の赤、レアナより数段きつい性格なのは、幼くても支配者の威厳でアシャを見据えたので知れる。

アシャもそう思ったのか、苦笑しながらレアナより深めの礼を取った。

セアラが満足した顔になるのに卒なく笑う、その配慮が油断ならない気がする。

「第二皇女、ユーナ」

びく、と思わず微かに、ユーノは手首まで包んだドレスを押さえてしまった。

訝しそうにこちらを見たアシャの紫の目が、問いかけるように皇へ動くのに、

「ユーノ、で結構です」

つい口を挟んで、しまった、と思った。

それに刺激されたように相手の目がレアナ、セアラ、ユーノへと動いてくるのに軽く歯を食い縛る。逃げたい。

何度も同じことがあって慣れたはずのことだが、それでもやっぱり比較される瞬間、衣服や容貌や気配や仕草を見下げられる瞬間はまだ苦しくなる。

ユーノだけが違う。

ドレスは手首から首まわりまでしっかり覆って薄ものは同じものだから、いささか合わない。色味も白を基調は外せなかったで、薄ものを濃い緑にしてもらったから、それでも目立つ。裳裾はやや短くなっていて、下に脚を包むズボンを履いているから、余計に違和感があるだろう。

3人お揃いで仕立てると言われて、ほんの少しでも肌を見せるのは嫌だとなぐねて仕上げているから、本来の形の柔らかな女性的な美しさなどなくなっている。

レアナやセアラが髪を解き流して宝石や鎖飾りを垂らしているのに、ユーノは何一つつけていない。紅もほとんどさしてない。さっき暴れたところだから、髪を梳くのが手一杯だった。

出なければよかった。

すっぽかして逃げてしまえばよかった。

アシャの瞳の中に同情と哀れみを読み取って、ユーノは胸が絞られて切なかった。

確かに彼の視線は欲しかったけれど、それは不似合いな姿や一人だけ美しくないことを配慮される視線ではない。

できれば.....できれば。

微かに首を振って顔を上げ、こちらを見ているアシャを見返し、に、とユーノは笑った。

まだ正体は不明なのだ、何かあればすぐさま切り捨てる覚悟はしておかなくてはならない。一応武器は持ってないと親衛隊は告げてきた。この場で何か事を起こすほど愚かとも思えない。

だが、用心にこしたことはない。

相手がふてぶてしいユーノの様子に呆れたように目を逸らせるのに少しほっとする。

(よかった、気づかれてない)

気持ちがアシャにとっくに奪われていることに気づかれたら、それこそユーノはここに居られない。

「さあ、堅苦しいのは終わりにしよう。今宵は楽しんで頂こう。アシャ、こちらへ」

皇が誘うのに、アシャが嬉しそうにレアナの側へ近づいていく。

(露骨なやつ)

だが、それも己の美貌を知っている者の動きだ、傲慢に見えない。ばかりか、白いドレスのレアナに寄り添う姿は、お伽話の約束された恋人同士にも見えて。

「.....」

目を伏せ、笑う。

手に入らないとわかっている幻が現実に目の前にあるのは辛い。

アシャを取り囲む人々の輪から後ずさりして、ユーノは静かにその場から抜けた。

「旅から旅をしていたと聞いたが」

皇は警戒心の一つも見せず穏やかに尋ねてくる。

「ええ、いろいろなものを見て参りました」

背後で音楽が流れ、ダンスが始まった。緩やかにきらびやかに入れ替わり立ち代わり踊り出す人々を見ながら、アシャは曖昧に微笑む。

「美しいもの、楽しいもの、悲しいもの、苦しいもの.....敵意、妬み、企み、誠意、愛、友情.....
真実の姿も.....」

「急がれる旅かな？」

「いいえ、気の向くままに.....しかし、今度ばかりは」

アシャはゆっくりとレアナに会釈した。

「助けて頂き感謝しております」

「さぞ困られたことでしょう」

ミアナ皇妃が優しく応じた。

レアナとセアラは母親似、性格の違いがあるが、この柔らかで無防備な感触は共通しているな、と笑い返す。

「何かお役に立てることがあれば、是非お申し付け下さいませ」

「.....お父さま」

レアナが思いついたように口を挟んだ。

「よろしければ、しばらくお役目をお願いするわけにはいかないでしょうか」

「何をだね？」

「ほら、ユーノの付き人に.....この間、唐突にサルトが家に戻ってしまってから、あの子はずっと一人ですもの」

(おいおい、仮にも皇女の付き人に流れ者を付けようと言うのか)

お姫さま育ちにしても気楽すぎるだろう、とさすがにアシャが呆れていると、それをミアナ皇妃は別な意味に取ったらしく、心配そうに首を傾げる。

「しかし、そのようなことをいきなりお頼みしても」

「あなた、武芸もするわね？」

セアラがきらりと視線を上げた。なかなか鋭い、と目を細めて見返す。

「歌も歌える？ 楽器は？ ダンスは？」

「セアラ」

「...一通りは」

微笑むとそう、と頷いたセアラが皇に向き直る。

「この人が付けば、姉さまの無謀なところも少しは直るわ。優雅そうだし、あれこれ教えてもらえば、『セレドには皇子がいる』と言われなくてすむんじゃない？」

「あの、ユーノ、とお呼びになっているようですが」

「ああ.....本当はユーナ、なのですけど」

皇妃はほっと小さく溜め息をついた。

「ユーナと呼ばれるのを嫌って.....美しいものにも、ドレスも夜会にも興味がなく、いつも男のような格好ばかりして馬を走らせ剣を取り.....どうしたものでしょうか」

「いいではないか。わしは息子がいるようで心強い」

セレディス4世は嬉しそうだ。

「親衛隊員の中で、ユーノと互角なのは隊長のゼランだけだぞ」

「そうやってあの子を男に育てるおつもりですか？ 年頃というのに、花一つ贈られることがないのを不憫に思われませんか？」

柔らかく咎める皇妃に皇が苦笑する。

(平和な国...というより、平和な人々、ということか)

微笑を浮かべながらアシャは目を伏せた。

ここにいる誰も先ほど起こったことに気づいていない。自分達のすぐ側で、三つの命が一瞬に消え失せたことを知らない。

それはこの世界に共通の認識だ。

世界の裏側に何があるのか、気づく者はほとんどいない。

「どうかしら.....いけません？」

「姉さまの相手は大変だと思うけど」

小首を傾げながらレアナが問いかけ、セアラが真剣な顔で見上げた。

「でも、姉さまだって誰かが側に欲しいときもあるはずだから」

「構いませんよ」

アシャは微笑を深めた。

「急ぐ旅ではないのですし.....ユーノ様さえよろしいのなら」

表面上は平和で静かで穏やかに見えるこの小国に、見えない嵐が吹き荒れている、その理由がひよっとするとラズーンに近づく嵐と関連しているかもしれない。

捨てたはずだが、気になった。

「大丈夫よ、あの子なら.....あら、ユーノは？」

尋ねられてはっとした。

いつの間にかユーノの姿が消えている。

(俺が気づかなかった?)

確かにアシャはレアナに見惚れていたが、人一人消えるのがわからないほど鈍感なつもりはない。

「また抜け出したな、客がいるというのに」

「では、探して参りましょう。付き人の初仕事として」

満足そうに微笑む皇族一家に一礼してその場を離れ、アシャは広間を出た。

「ふ、う」

汗に濡れた髪をかきあげ、溜め息をついた。

熱っぽく絡みつくような女達の視線には慣れてはいるが、さすがに久々にずっと浴びていると気疲れする。見かけに不似合いな野放図さもある身としては、自由気儘に旅を謳歌する方がやはり自分の性に合う。

「しかし……」

(いつユーノは抜け出した?)

紹介された時は居たはずだ。視線を移していくと眩そうな目をしてこちらを見て、一瞬怯んだ顔になったがすぐに不敵に笑い返してきた。

今ならあの笑みの理由がわかる。万が一にもアシャが危害を加えるようなら、容赦なく切り捨てるという宣戦布告のようなものだろう。

それから談話が始まって、その時もまだ確かにユーノは居た。気配を消して身を引いたのはわかるが、それでも動きで空気を乱さなかった、その制御力に舌を巻く。

他の人間ならまだしも。

(俺を相手に)

このアシャを。

(シートスあたりが聞いたら何と言うやら)

アシャも放浪で随分温くなったもだ、と呆れ果てることだろう。

月が上り、青白い霧がかかった夜の庭園、微風もなく、静まり返った草や木々は静かに立ち尽している。意識を澄ませ、人の気配を探りながら進んでいくが、どこにも何も感じ取れない。

一旦立ち止まって気を沈め、もう一度歩き出そうとしたとたん、微かに馬の蹄の音がした。

「こっちか」

華やかな皇宮内と対照的に、蒼い月光が淡い影を落としている木立の向こう、白い馬が月光を避けるように立っている。側に人が誰もいない。こんな状態で馬を放置するとはな、と近付いて行って、夜に溶けるようなその馬の背に小さな人影が乗っているのに気付いた。

「……ユーノ？」

呆気に取られた。

さっきのドレス姿で馬に跨がったまま、ユーノは前のめりに馬の背中にしがみついている。もっと近づいて、相手が気持ち良さそうに寝息を立てているのに気づいてなお呆れる。

「……おいおい」

よくもそんな姿勢で、それもまたなぜこんな夜露に濡れる場所で。

しかも妙にほっとした顔で眠っていないか、そう思った瞬間にアシャは気づいた。

「……警護、しているのか」

思わず皇宮内を振り返った。

広間からは温かな明りが零れ、人々はまだ笑いさざめき、踊っている。窓から見える場所を今通り過ぎたのは、親衛隊の長、それこそゼランではなかったか。

皇を守り、皇宮を警備するはずの兵が責務を離れ、守られているはずの皇女が一人夜闇に潜んで敵を警戒している。

こんな暗い庭の片隅に、たった一人で。

「どうして……この子だけ……」

なぜ守られていない、他の皇族のように。何か特別な理由でもあるのか。単に男まさりというだけではあるまい。

考えながら、アシャは振り返って馬に近寄った。主の睡眠を守る役目を負った馬が瞳を凝らせて顔を上げるのに笑みかける。

忠実な馬だ。主を大事に思っている。それは、ユーノがこの馬を丁寧にきちんと従えていることを示す。

気配を殺してアシャはユーノに両手を差し伸べた。やはりどうしても苦しそうな体勢に見える。抱え降ろして、草の上にも、できれば軒の下にも寝かせてやりたい。

その間の護りは自分がすればいいなどと似合わないことを思いついてしまったのは、夜闇に休める場所さえなく一人居るユーノに、遠い日の自分を重ねてしまったからだろうか。

だが、近づくアシャの手に馬は警戒を緩めなかった。首を振り、蹄の音を立てて身構える。同時に押し殺した叫びが響いて、闇に光が閃いた。

「何者っ！」

「！」

ガシャツ、と激しい音が鳴って、アシャの目の前で剣が噛み合った。一方は馬上から振り降ろされた細身の剣、もう一方はアシャが抜き放った黄金の剣。

「.....な、んだ.....あなたか」

苦笑したユーノがそれでも剣から力を抜かず、じろりとアシャの剣を見て眉を寄せる。

「.....どこが、武器は所有していない、だ」

「.....そうすぐには見つかるような扱いをしていない、許してやれ」

親衛隊の愚を責める声にアシャも苦笑しながらユーノを見返した。黒い瞳が瞬きもせず、厳しい顔でこちらを見据える。

「暗殺者か.....カザドがお前を雇ったのか」

「カザド？」

冷やかな問いかけにアシャは眉を上げた。

確かカザド、というのはセレドより北西にある国の名だ。主はカザディノ、権力志向の脂ぎった中年男だなど思い出し、なるほどユーノが警戒しているのは隣国の王なのか、と気づく。

「.....違うのか」

だが、そのアシャの沈黙をユーノは的確に読み取った。訝しそうに首を傾げ、そうするとようやく年相応に見える顔で、

「何の用？」

すぐに剣を引いて鞘におさめた。

その思いきりの良さにまた呆れる。

「自分から剣をおさめていいのか」

「あなたには殺気がない。それに、私を殺るつもりならとっくに殺ってる」

「君が今手控えたように？」

「.....用件は何？」

ユーノは静かに視線を逸らせた。

「レアナ様に頼まれた。君の付き人になるように、と」

「っ」

はっとしたように振り返るユーノの体に一気に緊張が走ってアシャは苦笑した。

(えらく警戒されてしまってるな)

どこでも誰にでも長年の知己のように受け入れられるのがうまいはずだが、ユーノにはその魔法が効かないらしいと、ちょっと引っ掛かる。

(どこかで俺はへまをしたか?)

「危ないところを救ってもらった。お役に立てるなら本望だが.....得体の知れない男は苦手か？」

滑らかな口調で柔らかく尋ねてみた。

「.....」

ユーノは無言で見下ろしている。黒い瞳は警戒を緩めない。

仕方ない、とアシャはぼそりとつぶやいた。

「夕方のような時には、一人で戦うよりは助けになると思うが」

ぎく、と明らかに強ばった顔でユーノが見下ろしてきた。

「.....見たのか」

「凄い殺気だったからな。それに.....見事だった」

「.....」

ユーノは少し頬を染めた。小さな顔がうっすらと紅を広げて、何だか儂く可愛らしく見える。

「そう...か」

軽く噛まれた唇が柔らかさそうだった。

「了解は？」

惑うようにユーノの視線が揺れる。

「.....私の付き人は...危険だよ？」

掠れた声で吐いて、一旦外した視線をゆっくり絡めてくる。

「命の保証ができない.....」

その黒い瞳にふわりといきなり滲むように寂しい笑みが広がって、アシャはどきりとした。

その笑みの中には絶望がある。悲しみがある。

傷みがあって、それを堪える強さがある。痛々しいほどの、強さが。

思わず知らずその輝きにアシャが見惚れていると、静かな声でユーノは続けた。

「こんな性分だから、いつ何時何があるかわからない。でもさっきのが受けられるなら、あなたはそこそこ使えるんだろう.....いざとなったら何とか生き延びてくれるよね...？」

(いざとなったら何とか生き延びてくれる?)

おかしなことを言う、と思った。

付き人ならば、主を捨てて生き延びてはまずいだろう。見捨てることこそ咎めなければならないだろうに、ユーノのこの物言いでは、何かあれば自分を捨てて生き延びろと言っているようにさえ聞こえる。

どうもこれは今まで会ったことのある姫君達と種類が違うぞ、とようやくアシャは気づいた。

「ユーナ様.....」

「ユーノ、でいい。そう呼ぶなら、付き人を認める。改まったことばも要らない.....さっきのままですら十分.....」

低い声で言ったかと思うと、ユーノはふいに顔を振り上げ、体を立て直した。慌てて身を引くアシャに構わず、馬の手綱を握る。

「では、付き人として命じておく。皇宮に戻り、私が付き人を了解したと伝えろ。それから、私はしばらく戻らない、その間.....姉さま達を頼む」

「どちらへ！」

「ちょっと馬を駆けさせてくるっ！」

は、あっ、と鋭い声を響かせ、振り返りもせず駆け出す相手をアシャは茫然と見送った。

カッカッカッカ.....

蹄の音が街を駆け抜ける。その馬の背に身を伏せてユーノは手綱を握り締める。

(付き人? アシャが付き人? 私の付き人?)

胸が轟く。息が上がる。

馬を激しく急がせるからではない、思いもかけぬ幸運に身体中が熱くなって、その熱を放ってしまいたくてたまらない。

まっすぐに、いつもより数倍早く、街を離れた丘に駆け上って、ユーノは汗を蒸気に立ち上らせるレノを止めた。

「ア.....シャ.....」

小さくつぶやいて、慌てて唇を指で押さえた。それでもついつい嬉しくてことばを零す。

「.....ずっと一緒に居られるんだ.....あ」

はっとして我に返った。

「付き人.....つけちゃいけなかったのに.....」

サルト。

心の中で名前を呼ぶときつく締まった胸の痛みを顔に歪める。

守りたかったのに届かなかった笑顔。

あんな思いは二度とするまいと、二つに一つしか選べないなんてことがないようにしようと思っていたのに、アシャが側に居てくれる、その興奮で思わず受け入れてしまった。

「.....夢かと思った.....夢なんだと.....思っちゃった.....」

夢であるなら顔いでもいいだろうと、一瞬自分をごまかした。

「そのツケって.....そのうち払うことになるんだろうか...レノ...」

尋ねたがレノは応えない。

ただ風に白いたてがみを舞わせて、沈んだ主を気づかうように微かに振り向いた。

その首を静かに撫でて、黒い瞳を覗き込んで、ユーノは広間でのアシャの表情を思い出す。

レアナに注がれた喜びの笑み。セアラに向けられた慈しみのまなざし。

それと比較して、ユーノに与えられた訝しげな不思議そうな戸惑いの顔。

「.....違う.....のかもしれないな.....本当はレアナ姉さまの側に居たかった.....のかもしれない.....。それなら.....わかるな.....うん.....だって.....」

ユーノは自分の片腕を掴んでそっと撫でた。服の上からでも明らかにわかるでこぼこした肌触りに眉を潜めて動きを止める。そのまましばらくじっとして、一瞬唇を噛み締めてから、無理矢理気持ちを切り替えるように、あは、と乾いた笑いを漏らした。

「.....今は考えないでおこうか.....そうしようか.....だって、私、そんなことを考えている暇.....ないもの.....カザドのことだってあるし.....守らなくちゃいけないもの、一杯あるし.....レアナ姉さまにセアラ.....父さまに母さまに.....セレド.....」

続きそうになったことばは必死に胸の中で押し潰す。

(どこまでいっても私は入らない)

一際強く吹いた風に、ユーノは固く目を閉じ口を噤んで、竦んだ体を抱き締めた。

3.ラズーンよりの使者

「アシャ！」

「アシャ、どこにいるのっ！」

走ってきたアシャはすりと身を捻って木立の中へ飛び込んだ。

そのすぐ後から着飾った貴族の娘達が通り過ぎていく。どこに行ったのかしら、おかしいわね、などの華やかな囁きが遠ざかっていくのを、じっと木立の中で耳を立てながら苦笑する。

「こんなところでまで追い掛けられるとは思わなかったな」

どうやらあの宴の夜の印象が強すぎたらしい。

ユーノの付き人におさまったと聞くと、ことあるごとに注目され、女性だけではなく男性にまで一晚付き合わないかと声をかけられる始末、予想はしていたし慣れてもいるが、いいかげんうんざりする。

かと言って、飾り紐を外し前髪を下ろしていつもの髪型に戻せば、少々見識のある者にはすぐわかる。旅の汚れで目立たなくなっているならまだしも、今のように小奇麗にしまっては場所が場所でも、アシャの動きを知っている者なら気づくだろう。世界の南東のこんな小さな国に『彼』の顔を知っているものがいるとは思えないが、時期が時期だけに慎重になっておいたほうがいいかもしれない。

「やれやれ……」

(これからどうするかな)

ため息をついて腰を降ろし、乱れた髪を纏め直しながら、ふと背後で微かな動きがあったのに振り返った。

「ユーノ……」

木立は天然の小さな四阿のように地面を囲い込んでいる。木漏れ日が穏やかに草地に落ちている。

外と隔絶したわけではないのに不思議に静かな空間、その片隅に手足を縮め丸まって横になっているユーノの姿があった。

(またこんなところで寝ている)

明るい色の草は木立に遮られ、くすんだ緑の絨毯のようだ。ちらつく木漏れ日がユーノの体に躍っている。

熟睡しているのか、今度はアシャが覗き込んでも目を覚まさない。

「無理もない…か」

気配を殺して側に寄ったアシャは苦い顔のまま腰を据えた。

寝息に微かに揺れる茶色の髪を、そっと指先でのけてもユーノは目を覚まさない。

よほど疲れ切っているのだろう。

(餓鬼、の顔だよな)

ユーノは唇を少し開いて穏やかな呼吸を立てている。眠っていると歳相応に無防備な顔だ。

それだけ見ていると、当たり前の少女にしか見えないが、それが昨夜は殺気に厳しく引き締められていた。また刺客が紛れ込んでいたのだ。

今回は対処が遅れて、と苦笑したユーノの腕についた傷の手当てに近寄りながら、アシャは駆け付け損ねた自分にも苛立っていた。おかしな気配がある、レアナ達を見てきてほしい、そう命じられて従ったのが、結果的にユーノを刺客に晒すことになってしまったからだ。

『ゼランは何をしているんだ?』

尋ねたアシャにユーノは目を逸らせて、何とかできたからいいんだよ、としか言わなかった。アシャの手当ても拒み、自分でできるからいい、疲れたからもう眠る、とベッドに潜り込んでしまったから仕方なしに引き上げたが、あの傷では一晚中痛んだはずだ。

(いつもこいつばかり狙われる……一体なぜだ?)

カザディオがレアナを狙い、セレドを狙うなら、もっと他の人間を襲ってもいいはずなのに、カザド兵は執拗にユーノを狙う。

それも不審だが、それほどやすやすと侵入を許す親衛隊というのも、平和ぼけしているとは言え解せない。

(誰か……カザドへの内通者がいる、か)

もしいるとしたら、皇宮がらみの者だろうが、皇位継承で内部で揉めている気配もない。富や地位といったものへの欲望を露骨に示している者も見当たらない。

セレドは眠ったように穏やかな国だ。

なのに、その皇女は繰り返し狙われ、傷ついている。その理由がわからない。

風に浮いた髪の毛がまたユーノの唇にかかった。呼吸でふわふわと揺れる、それが息苦しそうに見えて思わずそっと指を伸ばす。

「アシャ...？ アシャ？」

「！」

柔らかな声が響いて、髪の毛をのけてやるはずのその指で、今度は自分がユーノの唇に触れようとしていたのに気づいて、アシャは慌てて手を引いた。

（俺は何をしている）

幸いユーノは目を覚ましていない。ほっと小さく息をついた。

（ただ、ちょっと）

自問自答する。

そうだ、ただちょっと、無防備に眠りこけてアシャが居るのにも気づかない、それが妙に苛立たしくなったのだ。

「アシャ.....どこですか？」

声はレアナのものだ。それがみるみる近づいてくる気配にアシャは急いで木立を抜け出た。

「ここですよ、レアナ様」

ようやくぐっすりと眠れているユーノを起こしたくなかった。木立から離れながら声をかけると、花園の辺りにすらりと美しいレアナの姿があった。ほっそりした白い首筋を惜しげもなく見せて、滑らかな胸元近くまで開いたドレスを鮮やかに捌きながら近寄ってくる。

「ああ、そこにおいででしたの。ユーノを御存知ありませんか？」

「え...あ」

背後の木立を気にしたがユーノが起きてくる気配はない。

アシャは微笑みながらレアナの接近を妨げるように自ら相手に近寄った。

「何か御用でしょうか？」

「ラズーンからお使者が来られたの」

レアナの影にいたセアラがひょこりと顔を出した。

セアラもいささかデザインは違うけれど、白いドレスを身につけている。

「ラズーンから？」

「広間に集まりなさいとお父様が.....ユーノ」

レアナがふいとアシャから目を逸らせて背後を見遣り微笑んだ。

「ラズーンから使者だって？」

突然後ろから眠そうな声が響いてアシャは振り返った。

ふわあう、とあくびをしながら近寄ってくるユーノの乱れた髪についていた草を、レアナが繭をしかめながら払いにかかると。

「また地面になんか寝転んでいたの？ ちょっとは女性としてのたしなみを気にしなくてはい」

「はいはい、そのうちね」

「また、そんなことを」

「.....そうやって並んでると、姉さまとアシャだと性別が逆よね」

セアラが腰に両手をあてて呆れてみせる。

え、ときよんとしたユーノがアシャを振り向いて笑い出した。

「違うない」

「セアラ様」

「私がもう少し背が高ければねえ、ほらこうやって」

大仰な振る舞いでユーノが右手を円を描いて回し上半身を倒してお辞儀した。

「どうぞ、アシャ姫、私に御手を」

「ユーノ！」

「あれ、駄目？」

いいかげんにしろよ、とアシャが睨んだのは体を倒す時にわずかにユーノが顔をしかめたせいだ。腕の傷が痛むのだろう。馬鹿なことをするんじゃないと、それは口止めされているから言えずに制すると、ひょいとおどけて眉を上げたユーノが肩を竦めた。

「アシャなら立派なお姫さままで通るんだけどなあ。私の代わりにユーナ・セレディスを名乗ってもらおうかなあ」

「なら、姉さまはどうするの」

「アシャの代わりに付き人をするさ」

にやりと笑って伸ばした指で屈み込みながらセアラの額を突く。愛おしげな優しい仕草で、微笑みながら、

「それとも旅に出るかなあ.....いろんなものを見たい」

一瞬何かを探すように逸らせた瞳にひどく寂しそうな色が漂った。

「冗談はそこまでにして、早く広間にいかなければ。お使者をお待たせしていますのよ」

「はい、はあい、と。アシャは？」

「アシャですよ」

「わかりました」

アシャはうやうやしく頭を下げた。

ラズーンの使者は背の中ほどの銀髪直毛、不思議な魅力をたたえた灰色の瞳の持ち主だった。年齢がよくわからない。

艶やかな、そのくせつかみ所のない雰囲気誰かに似ている、とユーノは思った。

(.....アシャ?)

そうだ、アシャだ、と胸の中で繰り返して、自分よりわずかに下がった場所に立つアシャを見た。

さすがに宴の時ほど派手な服装はしていない。地味とも言える焦茶色のチュニックとズボンという男性の格好だが、金褐色の髪を今日は紅の紐でまとめていて、それだけでも華がある。

女性的でひ弱そうに見える顔だちのせいかな、今は女性だけではなく男性にも追いかけ回されているようだが、それほど苦しんだ様子がないのは、同じようなことをあちこちで経験してきているからかもしれない。

人々に追い掛け回されて、付き人としての仕事を全うしてるとは言い難い時もあるが、ユーノには彼らを咎める気にはなれなかった。

(私も)

レアナほど綺麗ではなくても、セアラほどに愛らしい容貌ならば、アシャと数時間の逢瀬を求めて追ったかもしれない、そう思うからだ。

今は付き人で、望まなくても側に居てくれて、時に夜遅くでも刺客を心配して駆けつけてくれる、その幸運を思えば、昼間側に居ないことも贅沢だと思切れる。

(きれい.....だったな)

話し声に目覚めて木立から外を伺った時に目に飛び込んだ光景をユーノは思い出した。

花園の中、白いドレスのレアナとセアラ、微笑むアシャの3人は神話を描いた絵画のように美しかった。光がそこに集まっているようで、遠巻きにして見ている娘達と同じように、いや、それよりも竦むような思いでユーノはじっと見惚れていた。

私はあそこにふさわしくない。

あの美しい光景には入れない。

呼ばれたから出ていっておどけて見せたけど、礼をとったのは本心、男女交代することでアシャを望めるならばと一瞬願ってしまった自分が哀しかった。

不愉快そうにアシャが顔を歪めて、もうふざけ通すしかなかったけれど。

消えたかった。

ここから消えてしまいたい、と強く思った。

「ラズーンのもとに。イシュタが御挨拶申し上げます」

使者がやや高めの声を張り上げてユーノは我に返った。

「使者、イシュタ殿。セレドは従順をお誓い申し上げます」

セレディス4世が玉座を降り、使者の前に膝をつく。

ラズーンはこの世界の頂点にある統合府、その下にセレドを始め諸国が在る。そこには性をもたない神がいると言われ、作られる伝説は後を絶たない。この世界はラズーンの下で平和と繁栄を約束され、その昔、ラズーンに刃向かう者は悉く滅ぼされたと聞く。

だが、ラズーンは確かにこの世界を統べてはいたが、国々の治世は国王に任され、ラズーンが直々に支配することはなかった。日々が平穏であるならば、ラズーンは天上の神々の住まう幻の都に過ぎず、そこが如何なる姿をしているのか、特に世界の端にあるようなセレドでは興味を持つものなどいない。

今回のように、ラズーンの使者がセレドのような小国に来るのは極めて稀なことだった。

「セレドの忠誠は疑っておりません。ラズーンのもとに慎んでお伝え致します。セレド皇国より皇族の方を使者としてラズーンへ差し向けて頂きたい」

ことばこそ丁寧だが、秘められた冷たさと反論しようのない容赦なさに、セレディス4世は顔を強ばらせた。

「それは……如何なる……」

「詳しくは存じませんが、私は使者に過ぎませぬゆえ。ただ確実に伝えるようにとだけ申し渡されております。まず、皇族の方は一人でいらっしゃること。皇族以外の方をお連れになる場合は、これもお一人のみ供とされること」

(一人)

びく、と思わずユーノの体が動いてしまった。顔が表情を無くすのに気づいて僅かに俯く。

(一人、か)

目を閉じ、唇を噛む。

(ならば、きっと)

予想される状況を簡単に思い描き、けれど、そうならない可能性もほんの少しだけ想像して、ユーノは苦笑した。

(まだ、夢を、見てるのか、私は)

「使者、イシュタ殿」

セレディス4世はうろたえた声で応じた。

「どうしてもわからないのですが、なぜそのようなことをラズーンは求められるのでしょうか？ 我々の恭順は十分に示されているのでは...」

「残念ながら、そうではない」

空気を裂くような鋭い声でイシュタが切り捨てた。続いて、それを補うように淡い微笑を浮かべる。

「.....諸国は動乱の期に入っております。この期に勢力を伸ばそうとする国もあり、世は争いに満ちつつあります。今この時だからこそ、ラズーンは全ての世界の平和のため、諸国の恭順を直接確かめたいと思っているのです」

「しかし.....」

セレディス4世は口ごもった。背後を振り返り、妻やユーノ達を見渡し、イシュタに向き直る。

「ご覧の通り、我が国の皇族は我らのみ.....しかも、私以外は全て女子ども。もし、諸国動乱の時が来ているのであれば、その中をラズーンに向かえとは余りにも無謀.....」

「確かに」

イシュタはたじろいだ様子もなかった。薄笑みを浮かべたまま、

「しかし、ラズーンへ皇族がおいでにならないとすれば、ラズーンはセレドの忠誠を信じるわけにはいきません。ラズーンにとって信無き者は災いの芽。摘み取ることこそラズーンの道、世界の正しき在り方となるでしょう」

幾度もこうした愁嘆場は見たのだろう、イシュタの声は淡々としていて脅しも凄みもない。

しばらく無言で見つめあっていたが、やがてセレディス4世は肩を落とした。

確かに想像の彼方にある統合府ではあったが、それゆえに、それを元に暮らしてきた日々はその存在への反目を許さない。

再び後ろを振り返り、品定めをするように一人一人の顔を見つめ、やがてイシュタに目を戻した。

「お受けいたします」

「ラズーンのもとに。セレドの忠誠を喜びます」

がっかりしたセレディス4世と対照的に、一礼をしたイシュタは満足そうに立ち去りかけたが、ふと気づかわしげな顔になって歩みを止めた。訝しそうに凝視する、その視線の先にはなぜかアシャが居る。

ユーノもつられるようにアシャを見ると、相手は悪戯っぽい微笑を浮かべた奇妙な表情でイシュタを見返し、静かに頭を下げた。

それを見たイシュタが、まさかな、と小さくつぶやいた。首を振り、そのまま、急ぎ足に広間を出ていく。

(なんだ?)

アシャはそれ以上イシュタを気にした様子はない。むしろ疲れ果てた顔で玉座に戻ったセレディス4世を見つめている。

「父さま」

レアナが心配そうに声をかけた。

「どうしてあんな条件を受け入れたの、父さま」

遠慮のない物言いはセアラ独特、厳しい顔で問題を指摘する。

「誰がラズーンへ行くと言うの」

「あの方がおっしゃったことは本当だと御考えでしょうか」

ミアナ皇妃が静かに問うた。

「動乱の期だとおっしゃっておりましたが」

「私にはそうは思えません」

レアナが母親のこぼれを引き取るのに、一瞬ユーノの胸がちくりとした。

「セレドはこれほど平和ですのに。他の諸国はどうして争いなど起こそうとしているのでしょうか？ どうして私達のように近隣と平和に外交を続けて共に生きていけないのでしょうか」

(私達の、ように)

そうだ、レアナは知らない、話し合うことさえなく襲いかかってくる力の存在を。

「わしにもわからぬ。そのような期が来ているなど考えられぬ。ゼランからもそのようなことは聞かぬしな」

ユーノは目を伏せた。

「そういうことを言っても仕方ないでしょう、誰かが行かなくちゃいけないのよ？」

セアラが苛立った声で割って入る。

「父さまはセレドの皇、母さまには父さまを支えて頂く役目がおあり……」

レアナが低い声でつぶやいて、きっと目を上げた。背筋を伸ばしてまっすぐにセレディス4世を見る。

「私が行ってはいけませんか？」

「レアナ！」

とんでもない、と皇妃が声を上げた。

「だって、第一皇女ですもの、使いとしては適役ではありませんか」

「冗談じゃない」

ユーノはぼそりと唸る。

「動乱の期だって言っただろ、姉さまには無理だよ」

「そうよ、私ならまだしも！」

「セアラ」

口を挟んだ末娘にセレディス4世が重々しく遮る。

「そなたは幼すぎる」

「でも、だって、それなら……」

言いかけたセアラがちらりと動いた母親の視線を追う。

ふいと静まった輪の中で自分に集まった視線に、ユーノは微かに笑った。

(やっぱり、か)

「つまり、私が行く、ということだ」

「ユーノ！」

「姉さま！」

すぐに納得できない声を上げたのはレアナとセアラの二人のみだ。

「しかし」

「でも」

あやふやにことばを継いだ両親にユーノは肩を竦めてみせる。見返したユーノにミアナ皇妃がはつとしたように視線を逸らせた。

「大丈夫。一度国を出てみたかったんだ。冒険を試してみたかった。けど、こんなことでもなけりゃ、母さまも父さまも出しては下さらないよね？」

「ああ、もちろん！」

「ええ、そうですとも！」

ことさらはっきりした強い口調が、ユーノが自分で使者に立つと言ってはくれないかと思っていたのを痛いほどに知らせるのを、きっとわかっているのだろう。

相手の重荷をなお減らしたくて、ユーノは楽しそうに笑ってみせる。

「私の腕はゼランが保証してくれる。すぐ支度にかかります」

「うむ………供はどうする？」

セレディス4世が頷いて続けた。

「アシャを連れていくのか？」

一瞬。

ユーノは迷った。

旅の空で二人きり。レアナから離れて、いろんな場所をアシャと二人で巡れる。

がしかし、視線を走らせたアシャが複雑な表情でレアナを見つめているのに気づいたとたん、唇は勝手にことばを紡いだ。

「……ううん、一人で行く」

はつとしたようにアシャが振り向く。その驚いたような紫の瞳にこり、と笑った。

「大丈夫だよ、私は」

何か言いたげに開こうとしたアシャの口を封じるように目を伏せて繰り返す。

「一人の方がいい」

そうだ、それでいい。それならどこで野垂れ死んでも、後悔なぞしない。

アシャにセレドを守ってもらえばいい。いつぞやの剣の腕は本物だ。

何より。

(何より……ここにはもう私は要らない)

「危ないわ、姉さま」

「この平和な時代に危険なんかない。使者殿は少し脅かしたただけだ」

セアラの声に言い切って顔を上げた。

「早く発った方がいいでしょう、父さま。へたに遅れてラズーンに忠誠を疑われるのは悔しいや。準備にかかって……数日中にはセレドを出ます」

「うむ……では、頼むぞ、ユーノ」

「はい、父さま」

ユーノは呆然とした表情のアシャにくるりと背中を向けた。

(一人で?)

まさかと思ったことばを聞いて、アシャは我を失っていた。

(そんな、無茶な)

たとえ平和な時代であろうと、ラズーンへの旅はこんな小国のお姫さまがおいそれと始められるものではない。長くて複雑な道を辿り、途中海も渡ることになる。旅慣れたものでも辿り付けずに引き返すものもある。ましてや17歳の少女一人が果たせるものではない。

(なぜだ?)

付いて来い、と命じられると思っていた。またラズーンに逆戻りか、どうも結局は逃れることはできないものなのだ、そう胸の底で苦笑していた。

それでも嫌だと拒む気どころか、むしろそれもまた面白いかと思ってしまったのは、ユーノという人間に興味が出てきたからかもしれない。

どうしてこんな皇族がいるのだ、なぜこんなふうになってしまったのだ、と。

それを当の本人からあっさり切られて、呆気を取られ、自分で思った以上に衝撃を受けてしまい、その自分にまたアシャは驚いている。

(俺はユーノに付いていきかかった、のか?)

俺が、誰かの側にいたい、と思った?

まさか。

「アシャ」

「あ、はい」

ミアナ皇妃から呼ばれてはっとする。

「ユーノとあなたはうまく合わなかったのですか?」

「え...?」

「私達、あなたはサルト以上にうまくやっていると思っていたのですが、そうではなかったのですか?」

「いえ……そのようには……感じなかったのですが」

応えながら微妙にうろたえている自分を感じている。

(うまくいっていなかった? ユーノと俺が?)

思い出せるかぎりへまはしていない。人の好意や信頼を引き出すことはアシャには手慣れたものはずだ。

「姉さま、意外とあなたが苦手だったのかしら」

「は?」

セアラがぼつりと言ってぎょっとした。

「やっぱり女の自分より綺麗な男って目障りよね」

「あの……セアラ様」

「ユーノが一人でいいと言っておるのだ、それでいいではないか」

セレディス4世が不思議そうに遮った。

「ゼランの話でもユーノの腕はかなりのもの、それゆえの自信が一人旅を決心させたのであろう。

誇らしいことだ」

(そう、なのだろうか)

アシャはユーノが立ち去った方向を見遣った。

今まで感じたことのない焦りが広がる。まるでユーノに置き去られたような落ち着きのなさも重なってきて、そんなものを感じている自分が二重に落ち着かない。

(俺は何を引っ掛かっている?)

ユーノは自分の剣の腕を過信している。それがために無謀な一人旅を始めようとしている、世間

知らずな少女なのだ。アシャが付き添わなくてはならない義務などない、付き人としては主に一人で行くと言われた以上、逆らって付きまとうわけにもいかないはずだ。アシャは引き続いて皇宮の誰かの付き人として留まるか、再び諸国への旅に出るかすればいい。

だが。

脳裏を掠めたのは皇族を使者に、と言われた時のユーノの表情だった。

縋るように一瞬父母を見て、それから小さく笑った。全てを諦めた顔で。どこにも行き場がない顔で。

始めから、自分が行くしかない、そうわかっていた顔で。

そうだ、ユーノが気づいていないはずがない。動乱の期をここにいる誰よりも感じていたはずだ。

その揺れ動く世界を一人で行くことの無謀さも、きっと誰よりわかっていたはず、なのに、なぜ。

今、すぐに、ユーノを追って確かめたい。

なぜ、一人で行こうとする？

なぜ、俺を連れて行かない？

それはアシャにとっては初めての、胸を搔きむしられるような苛立ちだった。

4.カザドへの挑発

とにかく、付き人である以上、主に許可はもらわねばな。

皇宮が寝静まる前にと、アシャは足を速めてユーノの居室に向かう。

イシュタが来てから数日、アシャは碌にユーノと話せなかった。姿を見かけて話し掛けようとするたびに、するっとかわされてしまうか、レアナやセアラ、時に不安がったミアナ皇妃などに遮られてしまう。

アシャはアシャなりに旅の装備をあれこれ考えているが、はたと気づけばそれこそユーノに同行する旨さえきちんと告げていない。自分でも思わぬところで浮き足立っていると苦笑しながら歩いていると、背後から軽い足音が追い掛けてきた。

「アシャ」

「……レアナ様」

夜闇に柔らかく響いた声に緊張を緩めて振り返る。

急いで追ってきたのか、栗色の髪を肩に乱したレアナはほっとした顔でいそいそと近寄ってきた。

「ユーノのところへ行くのでしょうか？」

「同行の許可をまだ頂いておりませんので」

苦笑いしながら応じると、レアナは困ったように眉をそっと潜めた。

「きっと本心ではないのです」

弁解するようにガーネットのような瞳をアシャに向ける。

「一人で行きたいなんて。あなたが一緒に行って下さったら、きっと心強いはずですわ」

「さて、私がどれほどお役に立ちますか」

微笑んで応じながら、アシャはその美しく澄んだ目を見つめた。

幸福な環境で育てられた生まれつきの姫君。

人を信じて行動することに一瞬のためらいもなく、これほど優しく温かで麗しい女性はそうそういるものではない。その声から姿から瞳から、無限の信頼が溢れ落ちてきて、自分がとてもたいした人物であるかのようにさえ思えてくる。

男なら誰でもきっと、この女性のために我が身を捧げることを当然のように感じてしまうだろう。

「全力を尽くします、レアナ様の御恩に報いるためにも。しかし、ユーノ様は立派な剣の腕もお持ちだし、聡明でいらっしゃる。私の方が足手纏いになるやもしれません」

「では、どうか、これを」

レアナはじっとアシャのことばを聞いていたが、透き通るような白い腕を上げて首にかけていたペンダントを外した。

「あなた方を守ってくれますように」

それはセレドの紋章を象った古めかしいが立派な造りの銀のもの、一目見て由緒あるものと気づいたアシャが訝しく眉をしかめると、それを包んでアシャの胸に押し付けるようにして、レアナが囁いた。

「確かに大切なものです。けれど、ユーノなくしてセレドは国を保てない、何があっても戻って来なくてはならないのですよ、とユーノに伝えて欲しいのです……あなたからならきっと受け取ってくれるでしょう」

「しかし」

「ユーノは」

小さく寂しそうにレアナが微笑む。

「それは姉さまのものだと拒みました」

ラズーン支配下（ロダ）には掟がある。

『国の相続は第一子を持ってなす。が第二子がある場合は、第二子は第一子の相続に異義を唱えることができ、その決定は視察官（オベ）によって為される』

大抵は国を継ぐ証となるものを第二子が持ち、それに由って第一子の世継ぎと対等とするものだが、ユーノはその証であるはずの紋章を受け取らなかったらしい。

それは、ことばと裏腹にユーノが帰れないかもしれないという覚悟を決めていることを思わせる。

「もし万が一のことがあれば、セアラに託してほしいとまで言うのです……でも」

レアナは微かに涙ぐんだ。

「私にあの子の命はないものと思えなどとはあんまりです」

ミアナ皇妃よりもユーノの身を案じているらしいレアナの悲しみは、アシャの胸を強く打った。
「わかりました」
そっとレアナの手を包み込み、胸に抱く。
「私が必ずユーノ様をお守りし、無事にセレドまで戻って参ります。もし万が一ユーノ様が受け取って下さらなくても、私がこのペンダントにかけて必ず御無事を誓います」
「よろしく頼みます、アシャ」
「確かに」
アシャが頭を下げたそのとたん、抑えた調子だが鋭い口笛が響き、
「レーノッ！」
ユーノの声が闇を駆けた。庭園の一面から飛び出した馬は小柄な人影を乗せ、アシャ達の前を過ぎ、あっという間に皇宮の外へ走り出していく。
「あれは……ユーノ……？」
(今頃、またどこへ行く気だ)
「失礼いたしますっ！」
レアナへの挨拶もそこそこに、ペンダントを首に掛け、アシャも慌ただしく馬を引き出し追い掛けた。

一体どこへ行く、そう不審がりながら、アシャは郊外へひたすら駆けるユーノを追う。そのうちに前方の白い馬にまわりつくようにひたひたと寄せてきた一群に気づいた。どれも黒づくめ、姿形を隠した装束、しかもそれぞれ剣を帯び、中には鞭を手に行っているものもいる5、6騎、ユーノのレノを押し包むように迫っていく。

「ちいっ」
馬に鞭をくれてアシャは速度を上げた。
(ラズーンに出る前にもう騒動か。いつかの奴らか?)
ユーノは襲ってきた刺客を隣国カザディノ王の手の者だと言っていた。レアナを、やがてはセレドを手に入れようと狙っている、だが私が居る限り、そんなことは不可能だけどね、と冷やかに笑った黒い瞳を思い出す。

なぜそれを明らかにしない、なぜ一人で戦って、誰の助けも拒んでいる。
そう尋ねたことばには口を噤んでついに応えなかったのだが。
1騎、ことさら素早くユーノに追いついたのは鞭を手に行っていた男だった。ユーノを攻撃範囲に捉えたと見るや、手にしていた鞭を撓らせ、横に並びながら叩きつける。

パシイッ！
鋭い音をたてて鞭はユーノの左腕に絡んだ。そのまま男の馬に引き寄せられるのかと思いきや、ユーノは一瞬の早業、左手で手綱を握ったまま右手で剣を抜き放ち、ついで左腕を胸に引き寄せながらレノを相手の馬に寄せ、鞭を当てた男がうろたえたように姿勢を崩すのを見計らったように剣を一閃、鞭を断ち切る。

「うおっ」
男はそのままもんどりうって落馬した。
後から走っていた者が慌てて落ちた男を避け、ある者は馬を制御し損ね、ある者は自ら落馬し、どやどやとその場に足踏みならして溜まってしまおうのを、少し先に立ったユーノがレノごとくると身を翻して立ち止まる。

「どうした？ かかってこないのか？」
薄笑みを浮かべたまま、ユーノはひんやりとした嘲笑を響かせた。
「相変わらず間抜けなことだ。永久に私一人に手こずっている気か」
なにを、とかくそ、とか忌々しげな舌打ちが響く。

どうやらこれは全くユーノの敵ではなさそうだと見て、アシャは馬を緩めて背後の闇に身を潜めた。見物するというだけではなく、ユーノがアシャに話そうとしないことが何か聞けるかもしれない。危なくなれば飛び出せばいい、そう考えて馬の背に肘をつき、体をもたせて目を据える。

隠れていた月がそれでもまだ雲に覆われながら、ほのかに光を落としてきた。

白いレノの上で冷めた微笑を浮かべながら、左手の鞭の残骸を振り落とし、右手の剣をいかにも無防備に、そのくせどんな攻撃にもすぐに対応できるように垂らして、ユーノが嘲笑うように唇を歪めて顎を上げる。

皇宮でさえ見せたことのない、傲慢な仕草だった。

「ラズーンの使者がセレドに来たぞ。私は紋章を持ってラズーンに出向く。カザドの非道も知れることになるだろう」

(何?)

ユーノがさりげなく自分の胸元に触れてみせ、アシャは顔をしかめた。

ユーノは紋章を受け取っていない。

それをいかにも自分が身につけているように振舞うのは、あまりにも露骨な誘いだ。ただでさえ危険の多い旅に、なお刺客を引き寄せてどうしようと言う気なのか、とアシャは訝る。

「阻止したいなら追ってこい.....私がいけない間にセレドを狙ったのなら、ラズーン全土に散らばっているという視察官(オベ)を見つけて、カザドにラズーンへの反逆の意志ありと訴えてやる。紋章だつてどこかの深い谷底に投げ捨ててやる。もちろん、紋章がなければ、いくら姉さまに無理に国を継がそうとしても無駄だよ.....わかってるだろうけど」

男達が悔しそうに唸るのに、ユーノはくつつつと笑った。人の悪い、不愉快な笑みだった。

「追いかけてっことを楽しもう.....ラズーンに着くまでに私を殺して紋章を奪えば、全てはカザディノ陛下の望むままだろうが」

「なら、今ここで」

吐き捨てるように唸った男が剣を引き抜く。

「そうだ、今ここで」

「くっ」

ユーノは低く嗤った。

「やってみろ.....セレドのユーノをたかが5、6人でやれると思うなよ」

(おいおい)

冗談じゃない、とさすがにアシャは身を起こした。

確かに今夜の連中はユーノの遊び相手にもならないだろうが、何も旅立つ前にそんな騒ぎを起こす必要はないだろう。

(一体何を考えてるんだ、こいつは)

「ただの鞭と思うてか」

「何」

「ふふふ」

男達が妙な笑いをするのに、アシャははっとした。先ほどの鞭の攻撃、どうにも半端だと思ったら、と相手の意図に気づく。

ぐいと馬を引いてけたたましい声を上げさせ、大声で呼ばわった。

「ユーノ様! そこにおいでですか!」

「ち...っ」

「皆がお探ししておりますぞ! どこにおられる!」

「まずい.....引けっ」

男達が慌てたように急いで向きを変えた。ユーノを放ってさっさと闇の彼方に消えていく。

「.....どういうつもりなのさ」

アシャが近づいていくと、ユーノは渋面でこちらを睨みつけた。

「どういうつもりも何も」

馬を寄せていきながら、しらっとした顔でアシャは応じた。

「実際にお前を探していた、それだけだが」

「.....余計なことして」

「余計なことをしたのはそっちだろう」

思わずため息をついた。

「ラズーンへの旅はそれほど気軽なものじゃない。刺客まで引き寄せて、どういうつもりだ」

「.....それ.....」

月の光でアシャの胸元に光ったペンダントに気づいたのだろう、ユーノが驚いた顔でつぶやく。

「なんであなたが紋章を持って.....姉さま.....？」

「ラズーンへの旅に同行すると言ったら、渡された」

「え...っ」

はっとしたようにユーノが振り仰ぐ、その瞳に一瞬切ないほど強い願いが閃いたのを読み取り、アシャはことばを失った。

(俺を.....望んで、いる?)

ふいにそう感じて、どきり、となぜかアシャの胸が不規則に打った。

「そ、そんなことっ」

すぐにユーノはきつい顔で目を逸らせた。馬の向きを変えて皇宮へ戻り出しながら、不愉快そうに唸る。

「そんなこと、勝手に決められちゃ困る。私は一人で旅をしたいんだ」

お前なんか要らない、そう言われた気がして、アシャは思わずむっとした。

「一人じゃ困る時もあるだろう」

「そんなものないっ」

「.....いろいろあると思うぞ？」

(さっきの鞭がそう、なら)

人が悪いな、そう思いつつ、ユーノの様子を見守る。

「ないっ、たとえあったとしても、一人で大丈夫だ、ずっとひと...っ」

気丈に伸ばしていた背中がびくりと震えた。

「あ...う...」

(効いてきたか)

「な...に.....っ」

「ほら、な」

揺らめいて今にもレノから落ちそうになったユーノを、とっさに馬を寄せてアシャは支えた。かたかたと小刻みに体を震わせながら、ユーノが白い顔で見上げてくる。抱えた左腕がだらりとして、剣を片付けていたからよかったものの、体を抱き締めるように抱えた右手も、いや、今はもう全身震えている。

「鞭に刺がなかったか？ たぶん痺れ薬が塗ってあったんだ」

苦笑しながら説明してやり、アシャはふと気づいた。

「あいつらは.....そうか、お前を拉致するつもりだったのか」

「くっ.....」

悔しそうにユーノが唇を噛んだ。何度か話そうと試みて、ようやく掠れた声を絞り出す。

「わた...しを.....使って.....姉さまを.....落とそう...って.....こと...だろ.....生きて.....さえいれ.....ば...
...いいから...っ」

「おいおい」

生きてさえいればとは穏やかじゃないぞ、そう突っ込もうとして、それが冗談や考え過ぎでないことに思い当たった瞬間、アシャの胸の中にねじれたような熱さが広がる。

(生きてさえいれば、だと?)

ユーノが意に添わないことを、素直に了承するわけではない、それこそ意志を失うほど痛めつけるか傷つけるかしない限り。

(この上、なおこいつを傷つける?)

今腕で支えている、震えるこの華奢な体を?

その思いが引き起こしたひやりとするような怒りに、アシャはぞっとした。

(俺はなぜ、こんなに怒ってる.....?)

制御は充分できているはずなのに、なぜこんなことで乱されてしまう?

不安につい無意識に強く引き寄せたせいか、ユーノが呻いて顔を歪める。

「きつ...い」

「ん、すまない.....だが、それじゃレノでは帰れないだろう。こちらへ来い」

「いい.....放って.....おいて.....くれれば.....少しずつ.....回復する.....」

「馬鹿なことを言うな」

自分の声が尖ったのがわかった。

「どこの世界に動けなくなった主人を置いて戻る付き人がいる」

「あなたは.....も.....付き人...じゃない...」

掠れた声でユーノがつぶやいて胸が一瞬凍った。

「何を.....言ってる」

反論する自分の声が弱々しくてまた驚く。一体自分に何が起きているのかわからないまま、ユーノを思いきり抱きしめたくなるのを、アシャは必死に自制する。

「.....付き人は.....もう.....いらぬ.....姉さまに.....ついてて.....」

「.....レアナ様には許可を頂いた」

「私は.....許可...してない...」

首を振って拒むユーノにいら立ちが募る。

「.....ちっ」

「う、あつ」

薬のせいでがたがた体を震わせながら強がるユーノに、アシャは舌打ちした。ぐい、と力まかせに引き上げれば、思っていたよりうんと華奢で軽い体がやすやすと腕の中におさまる。腕の中にしっかり抱き込み、手綱を握りしめて囲い込み、ようやく少し息がつけた気がした。

「.....レアナ様に約束した、必ずお前を連れ帰ると」

もうこういうしかないだろうと思ってつぶやくと、びくりとユーノが震えた。

「姉.....さまに.....」

「だから、俺はお前に同行するし、お前と一緒に旅をする。そして、旅が済めば、お前を無事にセレドに連れ帰る」

「姉さまの.....ために.....」

「そうだ、レアナ様のために」

「.....そ、う.....か」

くす、と小さな笑い声が響いて、アシャは腕の中を覗き込んだ。

「何だ？」

「.....いや.....わかった.....同行を.....許可する...」

「ユーノ.....？」

これで何とかこいつと一緒に居られる、そう安堵したアシャの耳に微かな笑い声が続く。痺れ薬だけではなく、別の薬も入っていたのか、と訝っていると、ふわりとこちらを見上げた黒い瞳が月光を跳ねた。

（深い泉のようだ）

胸を抉られたような衝撃に思わず見惚れた。細められた瞳が潤んでいる。それでも顔は白いままで微笑んで、やがてゆっくりユーノは目を閉じた。

「.....あ...しゃ」

「うん？」

柔らかな幼い声で呼ばれて胸が詰まる。

「.....わがまま.....を言っても.....いいか」

「何だ」

「.....少し.....眠りたい.....皇宮についたら.....起こして.....くれ」

「.....ああ」

ユーノがそっと胸に顔を寄せてくる。吐息が静かに当たるのに、心臓が不安定に波打っていくのがわかる。その鼓動で起こしてしまわないか、そんなことを心配している自分がある。

（俺は一体.....何を）

戸惑いながらも胸の鼓動が押さえ切れない。やがてユーノがくう、と静かな寝息をつむぎ出してから、アシャはそっとユーノを覗き込んだ。さっきまでの緊張がかけられない寝顔にふいに深い安堵が広がる。

（俺の腕の中で、眠ってる）

あれほど周囲にぴりぴりしていたユーノが。安らいで、全てを委ねて、何も拒まずに。

(よかった)

小さく吐息をついた後はもう止まらなかった。胸の鼓動を沈めるためだと言い訳して、アシャは少し強くユーノを抱き締めた。

5.標的として

日ざしは草原の上にさんさんと降り注いでいる。風にさやさやと微かな音をたてて葉裏が翻り、ほの白く陽光を跳ね返している。

ゆっくりと国境へ進む二頭の馬の背中には長旅の用意、皇宮から離れること丸一日の行程を飛ばしに飛ばしてやってきたが、今は速度を緩めて静かに揺られながら、ユーノは口を開いた。

「カザディオはずっと姉さまを狙ってきた」

ちら、と見遣ったアシャの服装は白いシャツと濃紺のチュニック、深緑色のチュニックと灰色のシャツのユーノよりよほど皇族のように見えるのに、微かにため息をつく。訝しげに眉を上げる相手に軽く首を振って、気を取り直して話を続ける。

「始めは外交的に姉さまを欲しいと申し入れてきた。けれど姉さまは同意しなかったし、姉さまの同意しない婚姻を国の誰も望まない」

一瞬、過ぎてきた年月が怒濤のようにユーノの頭を掠めて目を閉じた。

ずっと一人で戦ってきた。おそらくこれから先もずっとそうだろう。

誰もユーノのような姫は望まない。ユーノの背負う運命を共に背負ってくれる者などいない。

胸の中で言い聞かせ、唇を引き締めて目を開けた。

「筋を通して断ったが、ラズーンに内密に国土を広げると姉さまの両方が欲しかったカザディオは諦めなかった……何度も裏から手を回してきた」

「だがなぜ、それでお前が狙われる」

アシャが不審そうに尋ねてユーノは口を噤んだ。

「なぜお前だけがカザドに狙われている」

重ねて問われ、ユーノは小さく息をつく。

「いいだろ……別に」

「よくない」

「私が強かったからだろ」

「話すと言ったろ？」

アシャは引かない。ユーノは深いため息をついた。

話したくはなかったが、話さないままでも、違う理由でもアシャを納得させられるとは思えない。不承不承、歯切れ悪く、ことばを口に押し上げる。

「……私が、同意しないと」

「？」

「……カザディオがあまり執拗だったんで、父さまがそう伝えただ。レアナも乗り気ではない、セレドとしては一度はちゃんと考えたが、何より第二皇女である、ユーナ・セレディスが婚姻に同意しないのだ、と」

「皇は……お前のせいにしたのか？」

呆れたようなアシャの声がはっきり指摘して、ユーノは慌てて口早に続けた。

「カザディオの強欲な振る舞いは時折噂が流れてくるんだ」

「いやしかし」

「隣国だけに皇として公に拒否して後々揉めることを恐れたんだと思う……父さまの気持ちは、わかる」

「だが」

なおも不服そうなアシャのことばにユーノは反論した。

「ゼランや親衛隊をつけてくれた」

「けれど」

「剣を学ばせてくれた、私はダンスよりそっちが楽しかった」

「違うだろう」

きっぱり言い放たれて思わず俯き目を逸らせる。

「それはお前が取る責任じゃ」

「アシャ」

苛立ったような声を遮ってことばを継ぐ。

「私はセレドが好きだ」

声が震えそうで、ユーノは強く唇を噛んだ。腹に力を入れ直し、一言一言紡いでいく。

「平和で温かくて、みな優しい。争いも知らない、戦も知らない。あのままの国でいてほしい」

目を閉じ、胸を走った痛みを堪える。
「私は姉さま達が好きだ……カザディノのようなやつの中で不安がらせたり悲しませたりしたくない……私が頑張ればいい。私がしのげばいい……私が戦えば、姉さま達は狙われないですむ、なら、それでいい」

「けど、お前は？」

「私？ 私は」

きつい声で問い返されて顔を上げる。自分を凝視している紫水晶の瞳が明らかに憂いをたたえている。
(案じてもらっている？)

そんな目は随分見たことがない、いつも大丈夫だとか任せるとか頑張れとか、突き放されるような視線ばかりで。

気持ちが弛んで、苦しい胸の中を全て打ち明けてもいいような衝動に襲われた瞬間、ユーノはアシャの首に光ったペンダントの鎖の光にはっと我に返る。

(違う、だめだ、そうじゃない)

受け取らなかったペンダントはアシャがかけている。それを託した白い手をユーノは知っている。

(この人は、レアナ姉さまのものだ)

く、と奥歯を食いしばって迷いを振り切った。

「私は武芸の才に恵まれているらしい」

肩を竦めながら、おどけてくすりと笑い、彼方になってしまった皇宮の方を振り返った。

「適材適所ということだろ？」

戦う力を持って生まれてきた。守られることがなくても生きていけると知っている。だから、自分が為すべきことに全力尽くして生き抜くだけだ。

気合いを入れ直したとたん、ユーノは周囲に動いた影に気づいた。

「アシャ？」

「む」

皇宮の方を振り返ったユーノがひょいと悪戯っぽい目で見返してきて、アシャも周囲の動きに気づいた。

「お見送りだ」

「お前が挑発してくるからだろう」

「ぼやくな。旅の門出に賑やかでいい」

丈のある草原の中を滑るように近寄ってきた一群は黒づくめのカザド兵、円弧を描くように押し迫ってきたかと思うといきなり数本の短剣が馬上のユーノ達を襲う。が、もちろん二人ともそれより先に馬から飛び下り、襲撃に驚いて立ち上がる馬に蹴り潰されそうになる前に草原の中を走っている。

「逃がすなっ……ぎゃっ」

うろたえた叫びが上がったが、すぐに悲鳴に変わった。逃げたと見せたユーノが轉身、早々に一人を倒したのだ。

そのまま素早く抜き放った剣を掲げて走るユーノを横目に、アシャは金の短剣を取り出す。あまり派手に立ち回りたくはなかったが、いささか数が多いこともあるし、日暮れまでには隣国レクスファに入りたい。

「ぎゃ」

「ぐあっ」

激しい物音と同時に悲鳴が響いているのはユーノが順調に倒している証拠だろう。

アシャの周囲を取り囲むのは数人、碌な武器も持っていないと一気に押し包んでくるのににやりと笑って両手を広げた。訝しく立ち止まる相手に踊るように短剣を持った腕を交差し、姿勢を低くする。「はったりだ、かかれっ」

そう叫んだ男も、次の男も、そしておそらく最後の男も何が起こったのかわからなかったはずだ。

見た目には緩やかな動きに見えても、アシャの剣法は独特な様式を持つ。構えはなく、死角もない。舞うように円を描いて空を切る短剣と、同じように空を区切っていく脚に裂かれ叩きのめされて、囲んでいた兵が一瞬にして声もなく地に伏し事切れる。そのまま草を乱すことなく気配の残る方向へ走るアシャの体には返り血一つ浴びていない。

見る者が見れば、それが何を示すのか、アシャの本性が何なのか、瞬時に悟ってただちに撤収しただろうが、それほどよく知られているものでもない。

(知った時には命がないからな)

冷ややかに笑ってアシャは次々と敵を倒しつつ進んだ。みるみる草原は悲鳴と怒りで満ち、やがて次第に静まり返っていく。ユーノも手加減する気はないのだろう、声は減る一方だ。

「ぐ、あっ」

目の前で間抜けに背中を晒して逃げようとした最後の相手を蹴り倒してから身を起こし、アシャは周囲を見渡した。

「ユーノ？」

気配があるのに声がない。

(まさか)

やられたのか、と不安になって草を掻き分けていくと、濃厚な血の香りの中で微かに慌たしい呼吸が響いている。

「ユーノ！」

「.....っん」

数人の兵が倒れている少し先の空き地で、ユーノが右腕を抱えて転がっていた。それほどの手練はいなかったぞ、とアシャが慌てて駆け寄ってみれば、シャツをしとどに濡らして溢れた血に染まりながら、ユーノはきつく唇を噛んで身を縮こまらせている。かなりの激痛なのだろう、汗に濡れた顔が真っ青だ。

「ばか！ どうして呼ばない！」

痛みに声にならないのかと思ったが、抱き起こすとばかりと目を開け、ほのかに苦笑した。

「ごめ.....まずった.....」

「こっちに手練がいたのか」

「ちが.....ちょっと古傷、を.....あっ」

腕を掴んだ途端に声を上げたから、毒剣でも使われたのかとシャツを切り裂いて傷を確かめようとして、アシャは茫然とした。

「なんだ.....これは.....」

二の腕の中ほどが切られたのは今しがたのことだろうが、それ以外にも皮膚が大小様々な切り傷で埋まっている。しかも、その中の幾つかはようやく塞がったばかりと見える生々しいもので、今切られた傷がその一部を抉り直すような形になっている。これでは大の男でも動けなくなる。

「お前.....いつこんな傷.....」

「なん.....でもない.....」

真白な顔で歯を食いしばっていたユーノが微かに首を振った。慌てたようにシャツをかき寄せ、アシャの手から腕を取り戻す。

「なんでもない、じゃないだろうが！ いつからこんな」

(さっきの話はここ最近のもの、ではないのか?)

唐突に降り落ちた理解に動きを止めると、ユーノはぐい、とアシャの体を押し退けた。ふらつきながら立ち上がって、口笛を吹き、馬を呼び戻す。

駆け戻ってきた馬の荷物から布を取り出そうとするユーノに、アシャは急いで側に寄った。

「貸せ」

「いい.....」

「いいから、貸せ！」

ずっと、こんなことをしていたのか。

体の芯が冷えてぞくぞくする。

あれほど傷が残るような状態で、その傷も回復しないまま、何度も一人で戦っていたのか。

(だから、か)

傷を受けても悲鳴を上げない、助けを呼ばないのだ、そんなことをしても誰も助けになど来ないから。むしろ弱っていると敵に知れて、屠られるのが早まるだけだから。

「.....あり...がと...」

腕に布を巻きつけてやった後、軽く喘ぎながらユーノが微笑む。

「一人ですより.....手早いな」

掠れた声にアシャは胸の奥を冷たい手で握りしめられたような気がした。

(一人ですより)

では、こいつは手当てさえ誰にも頼むことはなかったのか。

汗に濡れた額を拭ったユーノがよろめくように馬に乗ろうとして、アシャは思わず押し止める。

「待て」

「なに.....早く、行かなくちゃ.....今日中には、レクスファに入る、んだろ」

「俺の前に乗れ。今日は国境近くで宿をとる」

「え」

アシャの答えにユーノが驚いた顔になる。

「どうして.....」

「どうして、じゃない。手当てが先だ」

「だい...じょうぶだ、いつものこと、だし」

いつものこと、じゃないだろう、そう怒鳴りかけたのをアシャはかろうじて踏み止まる。

自分でもどうしてここまで怒っているのかわからない。ただ手当てもろくにしないで旅を進めようとするユーノが、腹立たしくてたまらない。

「旅程を遅らせたいのか？」

冷ややかに唸って、ユーノを睨み付けた。

「でも」

「ここで体調を崩して床に伏したら、ラズーンどころじゃなくなるぞ？」

旅に関しては俺の方が経験豊かなはずだがな、そう付け加えると、さすがにまずいと思ったのだろう、小さな声でわかった、とユーノは同意した。

口で言うほどユーノは大丈夫、ではなかった。

アシャの前で馬に跨がっているのがぎりぎり、レクスファとの国境を越えたところにある小さな宿に入った時はもう限界で、崩れるように動けなくなってしまったのだ。

「.....ごめん」

「ん？」

空いてる部屋は一つですがと案内され、ユーノをベッドに寝かせたアシャが床に敷物を延べていると、悔しそうな声でユーノが謝った。

「カザドを挑発したのは.....私が、間違ってた」

「.....ああ」

何だ、今さらそんなこと、と笑いかけたが、ユーノは生真面目な顔で見上げている。

「ごめん.....あなたにまで迷惑をかけた」

旅の初日から寝込むようなことになってしまった、と苦しそうな声でつぶやく。

「構うな」

珍しく殊勝だな、とからかって敷物をまとめ、アシャはテーブルに置かれていた器を手にした。

「起きられるか？」

「うん」

揺らめく灯火の下、のろろと上半身を起こすだけでユーノの顔色が青くなるのに、もう一晩ぐらいは休めてやった方がいいなと思う。

「ほら」

「た、食べられる」

「そうか？」

木の匙で掬ったスープを口元に差し出すと、ユーノはうっすらと赤くなって拒んだ。

「剣も左手で使えるし」

「ほう.....両手遣いか」

剣士であってもそこまで才能のある者は珍しいぞ、と元気づけてやると、ユーノは軽く首を振った。

「いや、両手で操れるというんじゃない」

アシャに器を支えてもらって、ゆっくり左手で使う匙はあやうげだが問題はない。

「いつ.....どちらが使いなくなるか、わからないから」

ユーノがぼつんと軽く言い切って、アシャは思わずその顔をまじまじと見た。

(まだ17、なんだぞ)

自分の体が「使いなくなる」ことを想定して毎日を暮らしているのは、戦場に居る兵士だけだ。そんな危機的状況の感覚が当たり前になっているのはおかしいと、ユーノは気づいていない。

(本当に、誰も助けてやらなかった、のか)

悲鳴を噛み殺すことが習性になってしまうまでに、どれぐらい時間が立っているのだろう。

「ユーノ...」

一体今まで何があった。これまでどうやって生きてきた。

尋ねかけたアシャの問いを察したように、ユーノは首を傾げて話題を変えた。

「これ.....変わった味がする」

「少し手を加えたんだ。止血と痛み止めの薬草が入ってる」

「そうか.....それで不思議な味がするんだ」

「食べにくいかな？」

「ううん.....おいしい」

ちら、と微かにユーノが笑って、アシャはそれだけで尋ねようとしていた意気込みを逸らされてしまった。実は睡眠薬も入ってるがな、とこれは口にしないですすめると、ほどなく器が半分ほど空になる。

「これ.....何か.....他のも入ってる.....？」

「なぜだ？」

「急に.....眠く.....なってきた気が.....する」

「疲れたんだろう。さ、横になれ」

「ん.....」

アシャの手に支えられてゆっくりと横たわるユーノがじっとアシャを見返す。

「何だ？」

「ただの.....旅人.....にしては.....おかしい、よね...？」

「え？」

「なんか.....いろいろ.....おかし.....」

それ以上突っ込まれると面倒なことになる。引きつって応じることばを探そうとしたアシャの目の前で、ユーノの瞳がゆっくり閉じる。やがて、静かで柔らかな寝息が響きだし、ほっとした。

「.....どうしたんだかな、俺は」

何だかどうも落ち着かない、とアシャは思った。

ユーノの腕の傷を見てから妙に気持ちが不安定になっている。いや、そうじゃない。もし万が一ユーノがカザドに捕まってしまうようなことがあれば、どんな目に合うかわからないと気づいてからだ。

望んで背負ったものではない。実の父親の不思議なことばに無理に背負わされたものなのだ。なの

に、その責務をユーノは黙って引き受けている。誰でも助けを求めずに、一人でずっと耐えている。

(いつから……いつまで)

ならばせめて、アシャと一緒に居る間だけでも健やかに眠れるようにしてやりたい。刺客に怯えず、深く休息させてやりたい。

あの夜、腕の中で眠り込むユーノにそう思った。

(まあ、どこまで言うことを聞くかは疑問だな)

ため息をつきながら、アシャはテーブルに地図を広げ、改めて行程を確認した。少しでも楽な道、少しでも安全な道を選びたい。

ラズーンが気紛れで皇族を呼び寄せているはずはなかった。特に視察官(オペ)を派遣しての召集は、二百年祭のために違いない。だが、この地図は概略も概略、おおまかな道は示されているものの、太古生物が復活している場所は記載されていないし、『運命(リメイン)』の動きも示されていないようだ。

「これも……テスト、か」

動乱の世界を生き延びた優秀な『銀の王族』しか欲しくない、そういうつもりなのだろうか。ユーノはアシャが付いているから、ほぼ間違いなくラズーンに辿りつけるだろうが、他の者はそう容易くはいくまい。

(しかし、それほど余裕などないはずだが……二百年祭のためならば)

世界の命運をかけた大きな企てだというのに、どうして今回に限り、『ラズーン』はこれほど偶然性に頼るような動き方をしているのか。

(落ち着かないのはこれもあるな)

いつもの二百年祭の動きではない、それがアシャを警戒させている。

「う……ん……っ」

「ユーノ？」

背後で微かな呻き声が響いて、アシャは振り返った。

いつの間にかユーノの額に玉のような汗が滲んでいる。眉を顰め、ほのかに口を開いて息を弾ませてうなされている。

「熱がでてきたか」

傷を確認するが、傷そのものの発熱というよりは吞ませた薬の効果が出てきたというところだろう。

椅子を枕元に持ち出して、額の汗を拭いてやる。何ごとかつぶやくように微かにユーノの唇が動いたが、まるで命じられたようにすぐにきつく一文字に結ばれてしまった。

その顔は昼間草原で一人体を丸めて痛みに耐えていた時のものとそっくりだ。

夢にうなされても助けを求めない仕草が痛々しくて、それが何だか胸苦しくて、アシャはユーノの額に手を当てた。ぴくりと震えたユーノが、自分の中に何かの力が流れ込んでくるのを感じたように眉を緩める。

『標的』として、一人で生きてきた娘。

その孤独には覚えがある。

だが、それもひよっとすると、遠い要因に『ラズーン』の存在があると言えるかもしれない。アシャが果たすべき道にあった責任だったのかもしれない。

(俺のせい、でもあるのか…?)

重い憂いを抱えて、アシャは僅かに眉を寄せた。

熱い、熱い、熱い……。

ユーノの夢の闇は暗く燃え上がっている。

(傷のせいだな)

ユーノはつぶやく。

何度も経験したきたことだ、今さらうろたえるものでもない。
痛みが強まる。血が流れ出していったまま、永久に止まらない気がしてくる。
血を流しているのはどこなのだろう。

腕か、脚か、腹か、胸か。

美しい姉、可愛い妹、たおやかな母、穏やかな父。

幸福で優しい家族。

誰にすがれるというのだろう。

誰にユーノの傷みを訴えればいいのだろう。

訴えれば最後、家族はユーノを案じる。カザドに怯える。自分達の無力に傷つき、苛立ち、不安がる。

いずれはカザドに呑み込まれるしかない国だとしても、できれば今少しの平安を。偽りでもいい、それがユーノ一人の犠牲で済むのなら。ユーノが戦うことで、平穏が続いてくれるのなら。

血を流しているのは心だ。

見捨てられ顧みられることなく朽ち果てていくその傷みを、誰にも告げられないで闇に沈む心。

誰もユーノを振り返らない。誰もユーノの側で立ち止まらない。

いや、立ち止まってしまえばそれは新たなる悲劇を生むだけで。

闇は朱に染まっていく。血の紅、炎の紅蓮。

引き裂かれた肉の海にのたうつユーノの額に、ふいにひらりと落ちて来たものがあった。

ひんやりとした、そのくせ心を寛がせ和らげる感覚。静けさが額から荒れた心に染み通ってくる。

(何……?)

バカ、ドウシテ、ヨバナイ。

それが落ちてきた彼方の上空から、一つの声が響いた。

苛立たしげな、心配そうな声……アシャの声。

(アシャ、だって?)

く、と微苦笑を漏らす。赤く熱いものに濡れた手で額を触れる。

だが、そこには何も無い。

(ほら、ね)

吐息をついて手から力を抜く。

(アシャは姉さまが好きなんだ。優しくしてくれるのは、セレドの皇女だから……姉さまの妹だからだ。危険な旅に付き合ってくれたのも……姉さまに頼まれたから……)

くす、と皮肉な笑みを零す。

(期待しちゃいけない……アシャの視界に入ってるなんて思っちゃいけない……私は……ユーノ、として気づかわれてるわけじゃない……)

深く息を吐くと溜まった涙が溢れ落ちた。傷みが再びきつくなる。歯を食いしばってそれを堪えながら、ユーノはまた暗い夢に落ち込んでいった。

6.レクスファの王子

ユーノの容態が気になって、アシャはなかなか眠れなかった。夜中に何度か目を覚まし、額に汗を浮かべて喘いでいるようなことはないか、痛みを堪えて唇を噛みしめてないかと、様子を窺った。

そのたびに眠る前よりは静かな呼吸に安堵し、ふわりと頼りなく開いた唇に妙に落ち着かない気持ちになり、ごろりと床に寝転んではじっと闇に目を開いていた。

いつが最後だっただろう、こうして隣に眠る人間を案じて過ごしたのは。

いつからだろう、少し離れたところに居ても、人肌が空気を温め伝わってくるということを忘れてしまっていたのは。

それほど長く一人で旅をしてきたかな。なのに、今こいつの側に居るのが落ち着く、不思議なことだ。

ぼんやり思ったのが明け方で、次に目を覚ましたのは野太い声が呼ばわった時だった。

「奥に休まれているお客人に申し上げたい！」

がつんと後頭部を殴りつけてくるような、遠慮のない大声だった。

宿中が驚いて静まり返ったような緊迫感、するりとユーノがベッドから滑り降り、部屋の扉に張りつくように控える。その手には既に剣があり、細い体には削いだような殺気が漲っている。

「まずは我が国、レクスファへようこそ！ 傷の具合は如何かな?！」

どっと男達の笑い声が響き渡った。呼ばわった男もひとしきり笑った後、再び声を張り上げる。

「何も取って食おうというのではない！ ちょっと尋ねたいことがあるのだ!!」

「ユーノ」

覚えのある声にアシャは乱れた髪の毛を掻きあげながら、ため息をついた。

いきなり遭遇しなくてもいいだろうに。

だが、確かに国の端で大立ち回りをやったのだから、出張ってくるのは思いついてもよかったな、とうんざりする。

だが、そのため息と声音を、ユーノは違う意味に取ったらしい。一瞬眉を潜めてつらそうな顔になり、ちらっとアシャを見遣ると剣を握り直し、扉を開ける。

「揉めるようなら、何とか逃げて」

言い捨てて肩を聳やかせ、すたすたと出ていってしまう。

やれやれとアシャは吐息を重ねた。

(昨日の今日だっていうのに)

「度胸が良すぎるのも考えものだな」

ぼやきながら、仕方なしに軽く髪をまとめて起き上がり、ユーノの後を追う。

「お前が、だと？」

ユーノが何か応じたのか、相手が呆れたように喚いた。

アシャ達の部屋は宿の奥隅にある。

そう言えば聞こえはいいが、要するに物置きの端、宿屋の入口から数段上がっただけの板の間に続く部屋だ。

その階段を前にユーノが仁王立ちになり、向こうに銀と黒の近衛兵の鎧、下に暗い赤のシャツを着ている大柄な男が居た。腰に下げた両刃の幅広の剣は彼にしか振り回せないと噂の重くて無骨なもの、柄には『やはり』少し汚れた真紅のリボンが巻きついている。

(まだ付けてるのか)

予想はしたが、実際にそれを見ると、また思わずため息が出た。

「私が倒しちゃ、おかしいっていつのか」

ユーノが冷ややかな口調で応じている。

「あそこには、十数人のカザド兵が倒れていたんだぞ！」

「それで？」

あしらうようにユーノが軽く尋ねる。

「お前のような若造に倒せるはずがない！ 我らとて、カザド相手には手こずるのだぞ！」

(ふむ)

そうすると、カザドはレクスファとも小競り合いを始めているということか。

アシャは素早く整理する。

小国の企みにしては動きが早くて大きい。いや、大きすぎる。

まるでラズーンに知られてもいいと思っているようだ。よほどラズーンの影響力を過小評価しているのか、それとも頼りになる者が背後にいるのか.....。

(『運命(リマイン)』?)

思いついてひやりとした。

もうこんなところまで勢力が及んでいるのか。そんな報告も徴候もなかったが、それはやはりどこか平和に慣れてしまった視察官(オベ)が重要なことではないと見逃していたのか。

「よっぽど腕が悪いんだな」

ユーノがよく響く意地悪い声でやり返した。

「そのでっかい体も剣も、道端に立たせて子どもを脅かすためのものか」

「な、なにおっ...」

男は真っ赤になった。今にも剣を引き抜きそうだったが、側の仲間に諫められてかろうじて堪え、唸るようにことばを継ぐ。

「で、では、怪我をしたのは誰だ」

「それも私だ」

「じよ、冗談も休み休み言えっ！」

ついに我慢しかねた顔で、男が胸を膨らませてぐいぐいと歩み寄る。

「大の男でもかなりの出血だぞ！ お前が、お前みたいな細っこい小僧が、あれだけの血を流すような傷に平然としていられるわけがない！」

「あれが『かなりの出血』なのか。軟弱なやつだな」

「この、この、この...っ」

相手は今にも頭の上から火を吹き上げそうだ。

(おかしい)

身じろぎもしないユーノの背中にアシャは眉を寄せる。

ユーノがこんな舌戦に没頭するのを良しとするだろうか。

どう考えても必要以上に相手を煽り過ぎている。相手が単純だからいいものの、ちょっと冷静な者ならばすぐに数を頼みに囲い込むかもしれない。ましてや、背後に数人、同様の近衛兵と見られる連中が控えている。

多勢に無勢、一人をいきり立たせたところで活路が見出せるわけもない。

もう一度改めて、アシャは怒鳴っている男に向けていた視線をユーノに向け直した。

手は剣の柄にかかっている。緩やかに握りしめられ、またゆっくりと広げられる細い指。白く色を失って、まるで象牙の細工物のようだ。

ふいに、それは何かを耐えているような仕草だと気づいた。同じ動きを自分で繰り返してみても、自分ならそれで何をしているのかをアシャは確認する。

薄らぐ意識を何とか保たせておこうとする、無意識な手の動き、だ。

『大の男でもかなりの出血』

いきなり相手の言ったことばが脳裏に戻ってきた。

「それほど言うなら、手合わせ願おう！」

迫ってきた男が剣を握りしめて今にも抜き放とうというのに、ユーノは軽く半歩足を下げただけだ。見ようによっては、自信たっぷりに待ち構えている、そう見えなくもない。

だが、その瞬間、ユーノの上半体がぐらりと揺れたのをアシャは見逃さなかった。

半歩しか『動かない』のではなく、半歩しか『動けない』のだ。

あまりユーノが元気そうに振舞うから、うなされて薬を使わなければ眠れないほどの傷だということを、アシャはつい失念してしまっていた。

舌打ちしながら素早く前へ回って、ユーノと男の間に割り込む。近くに寄ればすぐにわかった、微かに乱れた小さな息遣い。立っているのもやっとなのではないか。

自分の間抜けさに苛立ちながら、アシャは背中でユーノを庇って、くるりと男に向き直った。

「お...っ...？」

ふいに飛び込んできたアシャに、盛り上がった肩に力を込めて、今にも襲いかかろうとしていた相手が意外な軽さで踏み止まった。ぎょっとして身を引く、そのいかつい顔に光っていた窪みがちの両目が、アシャを認めてみるみる大きく見開かれる。

「久しぶりだな、イルファ」

「.....ア.....アシャか?!」

相手は見る見る喜色満面、剣から手を離してがしっと両手をアシャの肩に置いた。まじまじと幻を捕まえたように覗き込みながら瞬き、いきなり顔をくしゃくしゃにする。

「この.....生きてやがったのか！ え！ この、女装趣味の変態が！」

「よせよ、そっちが勝手に女だと勘違いしたんだろうが」

さっそくそれか、と顔をしかめるアシャにイルファは嬉しそうに目を細める。

「俺だけが勘違いしたわけじゃないぞ、だがいやしかし、そうか、無事だったか、急にいなくなったから、俺はもう夜も眠れぬほど心配してだな」

「あのまま居ればとんでもないことになったじゃないか」

思わず引きつって言い返したアシャの背中に、とん、と柔らかな感触が当たる。

はっとして振り返るより早く、ずるずるとユーノがもたれかかりながら崩れ落ちた。蒼白な顔を歪めて目をきつく閉じ、唇の色も真っ白になっている。すぎるのではなく、自分の体を抱えるように倒れてしまうのを、身を翻して床に付く前に、急いで抱き支えた。その腕にくたりと柔らかな体が崩れ落ちる。

「ユーノ！」

「な、何だ？」

イルファがアシャの慌て方におろおろした声を出しながら覗き込んでくる。額に手を当て、脈を確認して、アシャはイルファを振り返った。

「イルファ、ゆっくり休めるところがほしい。それに薬も」

「.....というと、やっぱりこの若造が？」

微妙に情けない顔になったイルファに苦笑する。

「そうだ、それにカザド兵を片付けたのもな」

傷を改めたが再出血はしていない。だが、それは外に零れていないというだけで、皮膚の内側、奥深くに広がっているかもしれない。早急にきちんと診て手当てをしたかった。

「こいつがか.....」

まだ半信半疑で首を振りながら、イルファはそれでも生真面目な顔になった。

「だが、それなら、城へ来てもらわねばならん」

「何？」

「カザドはレクスファにとっても目の上の瘤でな。かねてより、奴らの侵略好みを不愉快がられていた我が王が、国境でカザド兵十数人を倒した剣士のことを聞かれて、是非城でもてなしたい、とおっしゃられたのだ」

「ふむ...」

「お前の置いていった荷物もちゃんと残してあるぞ」

「.....戻るとも限らないのか」

「探し出すつもりだった」

「.....」

大きくうなずくイルファにまた深いため息をついて、アシャはユーノを抱き上げて立ち上がった。

「竜車（くるま）か」

「そうだ」

確かにレクスファの城ならば、安全も確保できるし、設備もいい。傷ついたユーノを回復させるのに問題はない。

「部屋に荷物がある。持ってきてくれ」

「わかった」

イルファがいそいそとすれ違う。宿代も払っておけばいいな、と確認してくるのを、頼む、と応じて宿を出ると、真っ白な竜を一頭を繋いだ、王家の銀色の竜車が止まっていた。

ユーノを抱きかかえたまま乗り込んだアシャの後ろから、荷物を抱えたイルファが大きな体を押し込むように乗り込んでくるが、竜車（くるま）には依然余裕がある。

前に乗った御者の手から伸びた鞭が音をたて、ゆるゆると竜が歩み始める。何ごとかと遠巻きにしていた民衆が見送るなか、次第に速度を上げながら城の方へ向かっていく。

「一体どういう子どもなんだ？」

膝の上に抱いたユーノの頭を、そっと自分の胸にもたせかけるアシャに、イルファがおそろおそろ尋ねてきた。

「お前が付いているということはただの小僧ではあるまいが。また何か面倒事に巻き込まれたのか」

「人を災厄の徴のように言うな。理由があつて付き人をしている、貴族の子どもだ」

「ふうむ……貴族にしては気配が鋭かったぞ？」

「見かけで判断するのは、俺の時で懲りてると思ってたがな？」

くすりと笑うと、イルファが複雑な顔になって見返してきた。

「あれはそもそもお前が……そう言えば、あの時よりまた色っぽくなってないか」

「よせよ、気色悪い」

「どこぞでいい相手でも見つけたのか」

「……それ、相手を男だと思ってるのか？」

「違うのか」

「……お前は根本的なところで勘違いしてるぞ」

顔を顰めて首を振ったアシャは、近づいてきた白亜の城に懐かしく目を向けた。

「ん……」

ふ、と息を吐いて、ユーノは目覚めた。

（ここは……？）

目の前には豪華な飾りを施した白い天井が広がっている。

見知らぬ場所だとわかったが、意識がまた薄れていったように、再びゆっくりと目を閉じた。

辺りの様子を把握しないまま飛び起きて自分の状態を知らせる愚は、身に染みて知っている。この瞬間も、彼女を監視している目がないとは言えないのだ。

次第に清明になってくる意識で、ユーノは周囲の気配を探った。

かなり広い空間だ。

静かで物音はするが、遠く微か、しかも笑い声が混じるのはここが戦闘体制にないことを示している。緊迫した人間の移動する気配もない。穏やかに晴れた昼下がりを思わせる柔らかな空気、ほのかに花の香りがする。庭園か花壇があるのだろう。

殺気は感じられなかった。

（それとも……感覚が鈍っているか……）

体中が熱っぽくだるかった。右腕を中心に重い感覚が同心円に広がっていく。鈍くて緩いその動きが、ユーノをゆっくり溶かしていく。深い湖に投げ込まれたようだ。水面に波紋を残しして、ゆっくり深く沈んでいく……底へ、底へ、底へ……意識の闇の水底へ。

（いけ、ない）

我に返って眠り込む意識を引き戻す。

暖かくて気持ちよくて、そのまま底まで沈みかかったが、右腕の痛みを意識して起きていよう、とした。ずきずきと呼吸に従って、今度は鮮烈な赤い痛みが響き渡る。汗がじんわりと滲んで、ユーノは唇を噛んだ。

（剣に……また毒でも……塗ってあったのか）

殺されることはないはずだ。カザドは紋章をユーノが隠していると思っている。探し出す前に殺すことはないはずだ。

（半殺しにはあう、だろうな、捕まったら……っ）

急にめまいが襲ってきて、掛け物をきつく握りしめた。引きずり倒されそうな感覚の中、弾みかける呼吸を堪えて、何があったか必死に思い出す。

男が宿屋にやってきたのだ。カザド兵を倒したのは誰かと聞かれた。自分だと答えたら、信じられないように目を見開いた。

『お前が?!』

それを聞いたあたりから、少しずつ、頭の芯にどす黒い闇が広がり始めた。おさまっていた痛みが、ずきん、ずきん、と心臓の拍動と一緒に締めつけてくる、それを堪えていると、妙にけだるくぼんやりし始めて、足下が危うくなってくるのがわかった。

引き下がるわけにはいかなかった。

アシャは何か事情があるのか、男の声を聞いた時から困った顔になり対応するのを避けていたようだった。

ユーノしかいない、そう理解して先に立って、けれどどんだんぼやけてくる意識は剣の柄を握り直す程度では持ち直せなかった。男が迫って来た時にも本能的に構えようと足を引いたつもりだったが、その片足がきちんと床についたのか、それとも床を踏み抜いてどこかへ落ちつつあるのかもわからなくなってきた。

血を失い過ぎているのだ、このままではまずい。

そう思った瞬間に急に視界を覆ったのは、広々とした背中。

アシャが庇ってくれた。

気づいたとたんにはくくり、と気持ちが緩んだのはどうしてだろう。大丈夫だ、そう思った時にはもう支えを失って、崩れ落ちていくのを止められなかった。

(あれから、どうなった?)

周囲の気配を確かめながら、ゆっくりと目を開く。

穏やかな静かな空気.....セレド皇宮と似ている。

(どこかの.....城、か?)

意識を失ったユーノを、移送手段のないアシャが遠くへ運べるわけがない。あの近くでこれほどの大きな建物となると。

(レクスファの白亜城か)

ユーノはゆっくりと顔を横向けた。

壁も天井と同じ凝った紋様が浮き彫りにされ、ところどころに縞めのうとひすいがはめ込まれている。残りの地はまばゆいほどの純白の石、白亜城の謂れを裏付ける。

側には誰もいない。

「つ...」

ユーノはそっと体を起こした。

柔らかな光沢のある布で覆われたベッド、豪華な色とりどりの刺繍に彩られた夜具に埋まっている自分に気づいて、思わず苦笑する。

(セレドでもこんなに豪華な床には寝なかったのにな)

草や土やレノの上、冷えた石や、時には屋根の上、などはあったが。

(.....と、剣)

側の机の上に自分の剣があるのを見つけてはっとする。そろそろと手を伸ばして、剣を夜具の下に引き込んだ。

剣を側に置かれていたから、襲われる心配はないのだろうが、それでも全てが安全な場所などない。剣を引き寄せて、ようやく少しほっとしたとたん、とんとん、と軽く扉を打つ音がした。

「.....どうぞ」

答えながら、掛け物の下で剣の柄を握りしめる。目覚めた途端の来訪というのはできすぎている。

「お加減は如何でしょうか」

長いドレスを引きずって、明らかに武器も何も持たない侍女のような女性が入ってきて、ユーノは少し気を抜いた。それでも完全に緊張は解かないまま、相手を見つめ返すと穏やかな微笑が戻ってくる。

「ここはレクスファ国、白亜城です。お付きの方はレクスファにとって大恩ある方、ただいまはイルファと王がもて

なしておりますので、どうぞ御心配なさいませんように」

「アシャが...?」

「はい」

侍女はにっこりと笑って、斜め背後を振り返った。

「王子さま。御挨拶なさらないのですか？」

「？」

きよんとするユーノの前に、侍女の後ろからもじもじしながら5、6歳の少年が出てきて、一層ユーノは訝った。

白いブラウス、白い半ズボン。よく伸びた足には白い革靴。

白亜の城を守る精霊かと思われるような出で立ちに、そのまま王冠を戴いているように見えるまばゆいプラチナブロンドの髪を首あたりで切りそろえ、瞳は驚くほど澄んだアクアマリンのような薄い青、さらさら髪を鳴らしてためらうように侍女を見上げる。

「メーナ...」

甘えるような高い声で愛らしく眉を寄せた。

「どうぞ、王子さま」

「.....あ、...うん。あ、あの」

少年は緊張した顔でユーノに向き直る。

これは公式の挨拶かと、ユーノは剣をベッドに置いたまま、ゆっくりと体を起こした。

「ぼくは、レクスファの王子、レスファートです。レクスファへようこそ.....大変な旅をしていらした、とお聞きしました」

少し舌足らずに口上を述べると、困ったように頬を染め、

「あの...」

「はい？」

「あの.....」

不安げにメーナを見上げ、弱り切ったように口を結んで再びユーノを見つめ、どんどん赤くなりながら、

メーナをまた見上げた。

「メーナ.....ぼく、他のところでいいよ」

「あら、どなたですかしらね。ここじゃなきや嫌だって、だだこねてらしたのは」

メーナが軽いからかい口調になる。

それを聞いたレスファートが一気に髪の毛の生え際まで真っ赤になると、体ごとメーナにぶつけるようにドレスにしがみついた。

「だって、メーナ！　こんな人だなんていわなかったじゃないか、だから、ぼく、悪い人を一人でやっつけたっていうから、もっと大きな男の人だと思って.....」

ちらりと横目でユーノを見て、レスファートは居置まれないように身を振りメーナのドレスに顔を押し付けて呻く。

「こんな『きれいな』人だなんて、いわなかったじゃないか.....」

「え.....？」

呆気にとられたのはユーノだけ、メーナは大きくうなずいて、まばゆそうな目でユーノを見ながら、
「王子さまがそうおっしゃるなら、本当に『美しい』方なんですわね、この方は」

いささか不思議な言い回しで微笑んだ。

「うつく...」

今まで、『きれいな』とか『美しい』などということばを自分に向けて聞いたことなどない。

ユーノは一瞬戸惑い、やがて少しうろたえて、慌てて挨拶を返す。

「あ、の。レスファートさまですね。このような姿で申し訳ありません。私は旅の者で、ユーノ、と申します.....ところで、レスファートさまはどうしてこちらへいらっしやったのですか？ 何か御用でしょうか？」

「え...あ」

レスファートはますます困った顔で口ごもる。

見兼ねたようにメーナがくすぐったそうな顔で口を挟んだ。

「ここはいつも王子さまのお昼寝場所ですよ。特にお気に入りのところで、今日も自分の寝床を断りもなしに使っている者に一言言いたいと」

「メーナ！」

「それは悪かった、もう大丈夫ですから、すぐに場所を」

ユーノは急いで身を振ってベッドを滑りおりようとし、瞬間腕に走った激痛に口を噤んだ。

「っ！」

と、どうしたのだろう、それと同時にレスファートがびくりと体を震わせ、みるみる青くなってユーノを振り返った。転がるように駆け寄ってきて無言でユーノの体を押さえ、そのまま小さく体を震わせて俯いて唇を噛む。何かに必死に耐えているようだ。

「あの...？」

「動.....か.....ないでよ...」

ようよう細い声で答えたレスファートは、はあはあ喘ぎながら額に汗を浮かべてユーノを見上げた。上気した顔に責めるような表情が浮かんでいる。

「レスファートさま」

起こったことを察したらしいメーナが、そっと近づいてレスファートの細い肩に手を置き、静かに言った。

「ゆっくり息をお吸いになって.....そう。それから、この方から離れて下さい。この方はあなたよりずっと強い方ですので、それほど心を寄せておられてはもちませんよ」

レスファートは震えるように長く息を吸い、ゆっくり静かに息を吐いた。メーナの声に従って、大きな呼吸を何度か繰り返す。煌めいていたアクアマリンの瞳の熱っぽさが次第に冷えてくる。

「どう.....されたのですか？」

「王子さまは、人の心象を受け取ることに長けておられるのです」

「受け取る...？」

メーナは微笑した。

「レクスファには時々人の心を読む者が生まれます。王族は血筋的にその能力が高く、力の差こそあれ、相手の心を感じ取ることができます」

レスファートを温かく見下ろして続ける。

「その中でも、王子さまは過敏なほど人の心の情景に通じやすい方です。この方は、相対する方の心のそのままの心情を感じられる.....だから先程、あなたを『きれいな』方として感じ取られたなら、その通りなのでしょう。この方を欺けるものなど、この世界にあるとは思えません」

「あの.....よくわからないんですが、じゃあ、今レスファートさまは」

「.....そうです。王子さまはあなたにとっても魅せられてしまわれたので.....無防備にも心を寄せておられたのですよ」

少ししたなめるような口調でメーナはうなずいた。

「そして、あなたの痛みもそのまま受けとめてしまわれたのですね」

「みせられて、しまわれた、って何？」

少し落ち着いたらしいレスファートがまだ少し息を弾ませながら無邪気に尋ねる。

くすりと笑ったメーナが、

「好きになる、ってことですよ。王子さまはこの方をお好きですね？」

「うん.....あの、さっきはごめんなさい」

ぺこり、とレスファートが頭を下げる。

「ぼく、つい、忘れてしまいました。父さまにいつもいわれてるのに.....近づきすぎるなって.....でも」

「大丈夫ですよ、王子さま」

一所懸命に話すレスファートの可愛らしさが、ふとセアラの小さな時を思い出させた。大人びた口

調でいつもユーノを案じて説教を繰り返す。

微笑みながら、ユーノは続けた。

「ほんの少し、驚いただけ」

「本当？ ぼく、傷に痛くありませんでした？」

小首を傾げ、プラチナブロンドを頬に散らせて、レスファートは真面目な顔で尋ねてくる。

「大丈夫。私が強いのはおわかりになりますよね？」

「うん」

少年がじっとユーノの瞳を覗き込んできても、心を読まれるという不快感は起こらなかった。

「さて、王子さま、お昼寝の時間を過ぎてしまいますよ。ここはユーノさまがお休みですから、他のお部屋に参りましょう」

メーナに促されて、レスファートは1、2歩ベッドの側を離れたが、

「あ、あのっ」

「何ですか？」

「ぼく、ここにいちやいけない？ あの人のじゃましないから、もう少しここにいちやいけない？」

瞳に必死の色を浮かべて、メーナを見上げてねだる。

「あらあら、ひどくお気に入りですこと。でも、お昼寝はしなくちゃいけません。それでなくても、今日は『失敗』したばかりでしょう？」

なだめるメーナに未練ありげにユーノを見て、レスファートは口籠った。

「でも...」

「じゃあ、やっぱり私が他の場所へ移りましょう。レスファートさまはここがお気に入りですし、私の方が後から来たんですからね」

ユーノが苦笑して、傷を庇いながら何とかベッドから抜け出そうとすると、

「だめ！」

一声レスファートが叫んでユーノに飛びついてきた。そのままメーナを振り返り、甘えた声で呼ぶ。

「メーナあ...」

「その方にお聞きになるんですね」

メーナはレスファートの言いたいことを察しているらしく、少し肩を竦めてみせる。くりっと振り向いたレスファートが緊張した顔でユーノを見上げる。

「あの.....ぼく.....一緒にいてちゃいけませんか？ぼく.....ここでお昼寝してちゃ.....だめですか？」

離れたくない、その気持ちを示すように、レスファートは小さな指でぎゅっとユーノを服を掴む。

ユーノはその温もりに微笑みながら顔を上げた。

「メーナさん...」

「はい？」

「もし、よろしければどうぞ、ここで。私は構いませんから」

「では、御用があればおっしゃってくださいまし」

メーナは心得たように微笑み返し、付け加えた。

「でも、王子さま、近づきすぎたはいけませんよ？ その方は旅の方ですし、『誓われる』にはまだお小さいのですから」

「うん！ わかってる！」

侍女の姿が扉の向こうに消えてしまうと、レスファートは喜々として靴を脱ぎ捨て、ユーノの隣へ潜り込んだ。ごそごそと動いて、少し離れたところに顔だけ出して振り返る。

「ふふっ」

如何にも嬉しそうに笑うレスファートに思わず笑い返して、ユーノも再び夜具の中に身を横たえた。

「メーナだけなんだよ、ぼくの自由にさせてくれるの」

「？」

「着替えなさいっていわないの」

「なるほど」

笑ったユーノをじっと見返していたレスファートが生真面目な顔になる。

「どうしましたか？」

「うん.....ユーノって.....男の人、だよな？」

「.....」

どう答えたものか、と一瞬口を噤むと、

「男の人なのに、母さまみたいだ」

「え？」

「母さま.....もう.....いないけど...」

少し淋しそうに瞬いた淡い瞳がさすがのようにユーノを見つめる。

「もっと、そっちに行っていていい？」

「近づいていいの？」

「.....体だけだもん」

答える間を与えず、レスファートはユーノに擦り寄ってきた。

「やっぱり、母さまみたいだ.....」

小さなため息をついて、情景を確かめるようにレスファートが目を閉じる。

「.....そんなに似てますか、レスファートさま」

「レス、って呼んだ、母さまは」

ぱちりと目を開けたレスファートはユーノのことばを待つように見上げている。

「.....レス.....って？」

「レスだけ」

「レス」

「ふふ」

満足そうに笑ったレスファートが目を閉じ、それほど待つまでもなく、すやすやと寝息をたて始める。

「.....あったかい...な...」

そういえば、ずっとずっとずっと昔、夢にうなされたセアラを抱いて寝たことがあった.....。もう、ずっと昔のことだけど.....あの時はまだ、何も知らない子どもだったなあ.....。

ほんやりと思い出しながら、ユーノもまた久しぶりに静かな眠りに誘われていった。

7.アシャ

「『太陽の池』以来じゃな、アシャ」

「はっ」

「セレドに居たと聞いたが、レクスファは通らなかったではないか」

レダト王が鬚をねじり上げながら、からかうように話し掛ける。

アシャは薄笑いを浮かべて静かに頭を下げた。

「方向が逆でしたので」

「方向が逆……それは大儀であつたらう、大陸をほとんど巡る旅じゃ」

生真面目な顔でうなずいたレダト王は次の瞬間破顔一笑、アシャも顔を綻ばせる。

「他人行儀はよそう！ イルファも来るがよい！ 久しぶりの『三人衆』じゃ！」

上機嫌のレダト王に連れられ、アシャは王の私室へ招き入れられた。イルファものしりについてくる。

数々の諸侯に違わず、レダト王もまたアシャに好感を抱いている。

だが、それはいつものようにアシャの巧みなやり取りや優雅な物腰のせいだけではなく、このレクスファにはアシャもまた深い関わりがあつたからだ。

「『太陽の池』作戦……懐かしいな」

見事な銀狼の毛皮を敷き詰めた王の部屋で、アシャはレダト王、イルファ同様ゆったりとクッションにもたれ腰を降ろした。手には、香り高い酒、銀の器に入ったそれを含んで蘇った記憶に微笑む。

「こうしていると、あの頃のようにじゃな」

レダト王が目を細めて見返してくる。

「俺が散々な目にあつた、唯一の戦いだ」

ぼそりとイルファがつぶやいて、アシャは笑い声を嘯み殺した。

レクスファは確かに今でこそ落ち着いているが、少し前には国の辺境に『盗賊王』と名乗る男がいて、レダト王を困らせていた。

頭が切れるなかなかの武人ではあつたが、ひねくれねじけた心の持ち主で、ある一定の期間ごとに街や村を襲い、金品ではなく人の命をひたすら奪うことを楽しんだ。

困り果てたレダト王は数回に渡って討伐隊を送つたが、いずれもあっさり返り討ちとなり、ついに子飼いの部下であるイルファともども出陣して『盗賊王』を討とうと一度は兵を挙げたが、事の前に相手に発覚、備えを強められてしまった。

「あの時はもはやこれまで、そう思うておつた」

しみじみとした声音でレダト王は振り返る。

「そういうお気持ちでなければ、私などのことばは聞いて頂けなかつたでしょうな」

「うむ」

レダト王は『盗賊王』と戦つて果てようと思つていた。イルファも同じ気持ちだと言う。

悲壮な覚悟で白亜城を後にしようとした二人を引き止めたのは、稀に見る『美姫』……。

「だと思つたんだ、俺は！」

吹き出しそうになったアシャに、イルファが赤くなって喚く。

レダト王の計画に力を貸したい、と『娘』は言った。

不可思議な魅力のある、金褐色の髪、心惑わす紫の瞳、白い布と赤いスカーフ、金の鎖で装つた『娘』は、力試しをお見せしましょう、と、王の前で近衛兵十人を瞬く間に倒してみせた。

『娘』は新しい計画を王に授けた。それが『太陽の池』作戦だ。

『太陽の池』とはレクスファにある深い湖で、この湖には岸から一本の道のみが通じている中島があり、そこに『盗賊王』は城を構えていた。

ちょうど国境のわずかに内側、シェーランとレクスファがこの『太陽の池』で接しており、もともと要の砦として築かれたもの、守りに固く攻めるに難しい。

「度胸のいい娘だと思つて、俺は本気で惚れたんだぞ」

イルファは剣の柄を示して見せた。

そのリボンが決戦前夜、イルファが誇りも何も投げ捨て『娘』に頼み込んで、髪をまとめていたものをやっと一筋分け与えてもらったものだ。

「しかし、わしも長く生きておるが、あの時ほど驚いたことはない」

レダト王が口を挟む。

『太陽の池』作戦の最後の詰め、イルファとレダト王の援護のもとに、見張りの目を掠め、『娘』は単身中島へ忍び入った。

遅れてなるまいと必死に追いついたレダト王とイルファが見たのは、湖の岸での死闘ゆえか、水に濡れそぼち、凄まじいほど妖しい美しさを放つ『娘』が『盗賊王』の胴を薙ぎ払うところ、深く輝く紫の瞳は猛々しく煌めき、真一文字に結んだ唇は紅、身を翻すと黄金の髪から水滴が幾つもの星のように飛び散る。

が、それよりもなによりも、レダト王達を、ことさらイルファを打ちのめしたのは、血濡れた剣を下げたまま、倒れた『盗賊王』を冷然と見下ろした『娘』の姿だった。

さすがに攻撃をかわしきれなかったのか、切り裂かれてずり落ちた白布の下の『娘』の体は女体ではなく、つまりはそれが若々しく張り詰めた青年そのものの健やかな肉体だった、ということだ。

『盗賊王』が事切れると、『娘』は茫然と竦む二人に気づき、乱れた髪をかきあげながらにっこり笑い……………その『娘』がアシャだったのだ。

「ところで、これからどこへ行く？ 見たところ、気のむくままの旅、ではなさそうだが」

「御明察です。私はあの」

娘、と言いかけて、咄嗟にアシャは頭を巡らせた。

「少年の付き人としてラズーンへ向かっているところです」

「ラズーンへ？ それはまた難儀なことだ」

訝しい顔になるレダト王に、アシャはすらすらと嘘を並べる。

どうやらレクスファには使者が来ていない様子、無闇に話を広げて注目される必要もあるまいと判断したのだ。

曰く、セレド近くで強盗にあい、世話になった金持ちの息子が気紛れでラズーンを目指すことになった。旅慣れたアシャが恩を引き換え、経験を買われて付き人として同行することになったのだ、と。

興味深そうに耳を傾けていた二人は、各々に深くうなずいた。

「なるほど、この世界の成り立つところを見たいというのはあつぱれな心掛けだ」

「それで、あそこまで気迫があるのか、うなずける」

イルファは珍しく感心した声で続けた。

「あの度胸はたいしたものだったぞ。近衛兵を引き連れていたのに怯む様子もなく、なかなかどうして、子どもながらたいしたふるまい、末はきつと名のある剣士となる。お前が少しは剣を見ているんだろう？」

「交えるというほども交えてないが」

少し肩を竦めてみせる。

「才能は豊かだと思う」

「よいことだ、いずれ守るべき娘と巡り会い、よき主人として世の荒波を相手にしなくてはならん。剣の才に恵まれていることは、その大本になるもの、神に愛されておるのだな」

レダト王が嬉しそうに笑うのに曖昧に笑み返ししながら、アシャは微かに引掛かる。

(剣の才に恵まれていることは、神に愛されていること、か)

確かに少年であったなら、レダト王のことばももっともだろう。また、もっと穏やかな世であれば、女性であってもユーノの剣の才能は別な形で花開いたのかもしれない。

だが、ユーノはただ生き延びるためだけに、その才能と体を酷使してきている。伸ばされるべき能力としてではなく、すぎる唯一の命綱として伸びてきた力は、時にあまりにも鋭く痛々しい。自分の死が、即、大切な身内の死に繋がることをいつも意識の隅におく緊張、いつ襲われるかわからない、殺るか殺られるかの危うい均衡を保つ日々。

なのに傷ついても誰にも知らせず手当てもできず、悲鳴も嘯み殺したままユーノは闇の中に倒れている。

(冗談じゃない)

ぞくり、と寒いとも熱いとも言えぬ悪寒が背筋を上って、アシャは思わずユーノの休む部屋の方向を振り返った。

確かめてはきた、傷は悪化していなかった、熱もおさまりかけていた、別に他に憂慮すべき状態はなかった。休ませて眠らせておけば、華奢な割には体力のある体だ、すぐに回復してくるはずだ。

だが。

「名は何という」

「ユーノ、だ」

「ユーノ」

無意識に答えてしまい、はっとしてレダト王を見ると、相手は含みのある笑みを広げている。

「セレドのはねっかえりと言われる第二皇女が皇子であれば、あのような様子じゃろうな」

しらっと続けられて思わずどきりとする。

「女あ？」

イルファが小馬鹿にしたように手を振った。

「それはない、あんな女が居てたまるか。女などはな、べちゃべちゃして、すぐ泣いて、文句は言うし、何もしないくせに人をこき使うし、自分の傷には髪の毛一筋でも騒ぎ立てるのに、男の痛みなどは唾もひっかけないものだぞ？」

細くてちっちゃくて.....うーむ、確かにあいつはちっさくて細っこいが」

まるでアシャに説教するように言い募ったが、いささか酒が回ってきていたのか、ふむ、と唸ってどこらせ、と体を起こした。

「よし、一度確かめてきて.....なんだ、この手は？」

「あ、いや」

思わずイルファの肩に手を置いてしまった自分にアシャは戸惑う。

「あー、つまり、その、別に今確かめなくとも」

「あのな、俺も多少は人を見る目がある」

イルファがとろんとした目を向け直す。

「あいつが起きているときに、お前は女か、などと言って、大人しく答えるようなやつか？ へたすると、無礼者、手合わせして汚名を注ぐ、とやりかねんぞ？」

「そこまで男だと確信しているのなら、何も確かめなくともいいだろう」

「む？ それもそうか？」

「だが.....気にはなるな？」

レダト王がにやにや笑いながら口を挟み、思わずアシャはぎよつとする。

「もし、あれが女だとしたら、イルファ、お前は何をする？」

「賭けですか、おお、それなら俺はあいつが女なら、春の祭りにドレスを着て舞台上で踊ってやりましようぞ」

「なるほど、それは面白い」

「レダト王！」

何を悪ふざけに乗っておられるんですか、とたしなめながら、アシャは立ち上がりかけたイルファの肩に置いた手に力を込めた。

「お前も妙なことを言い出すなよ、俺が信じられないのか？」

「だがしかし、お前も騙されているとか」

「まさか」

「とすると、お前が嘘をついているのか」

「なぜそうなる」

眉を寄せてうなると、イルファがふふん、と顎を上げた。

「たとえば、あいつが女であってだな、お前が愛しいと思っているとか……おう、それはなおさら確かめておかなくてはならん」

「こ、こらっ」

愛しい。

一瞬枕元でユーノの額に手を当てていたのを見すかされたような気がして、アシャは固まった。再び体を起こして今にもユーノの部屋に向かおうとするようなイルファの肩を強く握る。

(やっぱりこういう話になるんじゃないか)

うんざりしながらため息まじりにイルファを説得にかかる。

「頼むからやめてくれ。せっかく休んでいる主をそんなことで叩き起こしたら、俺が後で叱られる」

「む？ お前が叱られるのか？」

「付き人だと言っただろう？」

「……お前が頼むのか」

「頼む」

「……よかろう。そのうちにわかるだろうしな」

「……」

そのうちに、ってなんだ、それは。何をする気なんだ。

一瞬心の底に動いたひやりとした感情を認識してアシャはまた戸惑った。

(俺は何をきりきりしている……?)

ユーノを男だと偽ったのは、イルファのアシャへのこだわりと、娘一人でラズーンへ赴くなどという無謀な旅から注目を避けるためだった。

だが、レダト王は薄々勘付いているようだし、こうなってはイルファの方も十分疑っているから、ばれたところで別にアシャが困ることはない。二人とも口は固いし、ユーノがセレドの皇女であることを明かしても、この先の旅に支障はないだろう。

だが今はイルファをユーノに近付けたくない。元気で反撃ができる状態ならばまだしも、身動きできなくて眠っているようなユーノに他の男を。

「は…？」

「ん？ どうした？」

「あ…いや……」

(他の、男?)

なんだ、それは。

アシャはのろのろとイルファの肩から手を降ろしてせわしく瞬きしながら口を押さえた。

(何を、考えてる?)

それじゃあ、まるで。

「大切な相手じゃからな」

「っ」

ぼそりとレダト王がつぶやいて一瞬心臓が止まったような気がした。慌てて相手を振り向くと、ゆっくり盃を傾けながら、

「主に忠誠を誓うのは付き人として当然、アシャにも仕えるように思える主ができたということじゃろう」

「……まあ、確かに」

ばりばりとイルファが頭をかきながらため息をつく。

「あの歳であれだけの天賦の才があれば、さすがのアシャの評価も高くなるか」

「ましてや、長く遠い旅をするのじゃから、案じるのも無理なだろうよ」

レダト王がゆっくりと目を巡らせてアシャを見つめ、少し微笑む。

「無事に勤めを果たさせたいと……な？ 違うか」

「……」

知っている。

さすがに聡明なレダト王、そう言えば、レクスファの王族は人の心を多少は読めるのだったなと思
い出し、アシャは苦笑した。

自分にはその力は弱いが、考えて考え抜けばおのずと見えるものもある、そう昔話していた王のこ
とが蘇る。

レダト王はユーノがセレドの皇女であり、なぜか身分を偽ってラズーンへの旅に出たと気づいてい
るのだ。それゆえアシャがその経験を買われて付き人として雇われた、そう思っている。

そして、その旅の厳しさも十分理解してくれているのだ。

「さて、夜も過ぎた。そろそろ休むことにしよう」

「うむ、久しぶりに楽しく呑んだ」

「長旅に豊かな憩いでした、ありがとうございます」

旅人の決まり文句を口にして立ち上がり、アシャはあくびをしながら部屋を出ていくイルファの後
ろ姿を眺めながら、低い声で話し掛けた。

「王」

「心配するな。他言はせぬ」

レダト王もさりげなく声を低めて返してくる。

「何かしら事情があるのだろう。セレドの姫は確かにはねっかえりだが、聡く武に優れていると聞く。
国境でたびたびの諍いにこちらの民を守ってくれたこともあると密かに聞き及んでいる。恩義を果た
せてよかったと思うておる」

「.....感謝いたします」

「.....穏やかな旅であるとよいが」

それは果たせぬのであろうな、と続いたことばにアシャは無言で頭を下げ、部屋を出た。

すぐに寝室へ向かうつもりだったのだが、やはり気になってそっとユーノの部屋に忍び入る。

「レスファート...」

ベッドにはユーノと、その懐に潜り込むような格好でレクスファの王子が眠っている。二人とも安
らかな寝息をたてていて、部屋には温かな空気が満ちている。

ベッドを回って、そうするとユーノの背中から見下ろす形でアシャは静かに小柄な体を凝視した。

細い肩、薄くて狭い背中が僅かに丸まっている。腕に包帯を巻く時に気づいた傷は右腕に無数にあ
った。利き腕にあれほどの傷を負っているのなら、もう片方も同じだろう。それどころか、ひよっと
すると。

「.....」

めくれていた掛け物を引き上げてやろうとして、ベッドの中に引きずり込まれていた剣を見つける。
金属の塊は夜気に冷えてつらいだろうに、体のすぐ側に引き寄せているのがごく自然な体勢、アシャ
が殺気を放てばすぐに飛び起きてくるだろう。

それほどの反応を持ってしても、あれほど傷つくしか、なかった。

きり、と自分が無意識に奥歯を噛みしめたのに気づいてアシャははっとした。軽く頭を振って緊張
を解き、剣を少しだけ遠ざけて、気配を殺しながら掛け物を引き上げてやる。

今夜はユーノはうなされていない、静かな寝息にほっとする。

目を閉じている顔は年相応に幼かった。疲れ切っているのか、ベッドに手を突いてもまだ目覚めな
い。

イルファには起こすなど言った。

なのに、俺は何をしている。

アシャはゆっくり体を屈めた。

ユーノの髪に静かに唇を当てた一瞬、甘い衝撃に息が詰まった。

数日後。

ようやく復調したユーノはレスファートと庭園に居た。

「アシャはねえ」

吹き上がった噴水を間一髪で避けたレスファートが、プラチナブロンドに水滴を輝かせながら笑う。

「父さまの友達なんだって」

走り寄ってきた少年に、庭園に面したテラスに立っていたユーノは、笑い返してレスファートの髪
を拭ってやる。

「友達？」

「うん.....ずっと前、この国が危なかったとき」

少し首を竦めて、甘えるように髪を拭いてもらいながら、レスファートは続けた。

「アシャが助けてくれたんだって」

「ふうん……それで、アシャって、それまで何をしてたの？」

「わかんない」

レスファートはユーノの側に立って体をもたせかけてくる。

「ぼく、知らない。父さまは旅をしていたっていった」

「旅……」

心の底ではずっと気になっている、アシャが何者なのか、と。もしカザドの戦略か何かで味方のふりをして入り込んできた人間だったら、と。

万が一そうだとしたら、ユーノは敵を連れて回って旅をしていることになる。

(そればかりか、敵に、魅かれてる大馬鹿者だ、ざまあない…)

だが、おそらくはそうではない。もしそうならば街中で倒れているなどという手段は選ばなかったはずだ、皇族が助けるとは限らなかったのだから。

(だが、それなら何者だ?)

美貌に隠されて目立たないが、あの剣の冴え、あれは専門のそれも何か特殊な訓練を受けているものだ。時々見せる意味不明の微笑、年齢にしては深すぎ広汎すぎる知識と経験、ふとした瞬間に妙な沈黙を保つ気配も引っ掛かると言えば引っ掛かる。

しかも、その沈黙はラズーンに絡むことのように思えるのだが、気のせいだろうか。

(どこかの……皇族、とか)

それならあの気品や宮廷作法に関する戸惑いのなさや、人あしらいやダンスや宴の場の卒なさもわかる。

だがしかし、ならばどうしてあんなところで倒れていた?

そしてまた、なぜセレドに留まり、あげくにはユーノの付き人などになって、ラズーンへの旅に同行したりしているのだろう。

(それは……わかるな)

小さく苦笑する。

(レアナ、姉さま、だ)

レアナ・セレディス、女神の微笑みを持つ女性に跪かなかった男はいない。

(レアナ姉さまの気持ちを叶えるために、アシャは旅に同行した)

そして、たぶんレアナもアシャに気持ちを向けているのだ、紋章を託すほどだから。

あれはきっと、必ず戻って自分と一緒にセレドを継いでほしいという優しい求愛なのだろう。そして、それをアシャも受け入れた、のではないか。

「ユーノお」

レスファートにしがみつかれて、我に返った。

「ユーノは行かないよねえ」

「え？」

「父さまは、アシャはもう城を出るって……ユーノも行くの？」

見上げてくるアクアマリンの瞳には人恋しさが一杯になっている。

「行かないでしょう? ねえ」

ユーノの左腕にしがみついたまま、レスファートは身を振って尋ねてくる。

「……レス」

「ユーノってばあ…」

何とか『行かない』ということばを言ってほしいのだろう。少年の表情は切ないような、今にも泣き出しそうなものになっている。

「う……うん……」

ユーノは弱った。

行かないというわけにもはいかないし、かといって、レスファートに泣かれてしまうのも困る。

困惑を読んだのだろう、唇を噛みしめて、レスファートはぴったりとユーノに身を寄せた。

「ユーノまで行っちゃうの……？」

（ああ、そうか）

レスファートはユーノに母親を見ている。昔に逝ってしまった母親に甘えられなかった分をユーノにぶつけてきている。その、どこへ行っても受けとめてもらえない寂しさ、仲間は居ても不安をさらけだして憩える場所が見つからない心細さはよくわかる。

そっと笑って、いやいやと首を振っているレスファートの頭に手を載せた。

「行っても……帰ってくるから」

レスファートは俯いたまま応えない。

「セレドに戻る前に、必ずレクスファに寄るから」

「……ほんと？」

半分泣いているような声だった。それはユーノの心の底を感じ取っているからかもしれないが、それでも戻ってくるということばを信じようとする口ぶりに、胸が熱くなって、ユーノは声を励ました。

「ほんと。きっと戻ってくるから」

それは……危うい約束だ。

ユーノが生きて戻ってこれる確率はほとんどない。カザドの刺客をしのぎ、ラズーンへの遙かな旅程をこなし、無事ラズーンに着けたとしても、使者のあの容赦ない物言いはラズーンへの人身御供ともとれる。万が一、ラズーンで事なく過ごし、再びセレドに向けて出発することができたとしても、帰りにはカザドが待ち受けているだろう。

（それでも）

アシャだけは。

（無事に、何とかしてセレドに帰そう）

アシャはどのような気持ちでいるかまだわからないが、旅の間に何とか頼み込んでみよう、セレドに戻ってレアナと結ばれ、国を継いでくれないか、と。

アシャほどの力があればカザドの侵略も防げる、レアナも心落ち着ける。レアナに好意は持っているようだし、障害は国を負う責任だけだが、もし、うまくユーノが戻れることができれば、自分が補佐してもいい。

それに、それこそユーノが戻らなければ、それはそれで…。

（それは、それで）

きっとセレドは、安泰だ。

胸を詰まらせる思いに少し唇を噛む。

「ほんとに約束してくれる？」

ふいにレスファートが顔を上げた。

「うん、するよ」

滲みそうになった涙を隠してユーノは笑う。

「じゃあ、この国の約束のしかたでして？」

「？ どうするの？」

レスファートは、いい、と尋ねてからユーノの剣を苦勞して抜き放った。重さにちょっとよろめき、それをそろそろと両手で横にして捧げ持つ。

「この剣を、ぼくから取ってくればいいの」

にこりと笑って、片足を立ててゆっくりと跪く。王族らしく、幼いながら優雅で確かな動きだった。少し顔を伏せ、頭の上へ剣を差し上げる。

「レスファートの名をオンミにささげます」

「？」

「早く」

「あ、うん」

きよんとしたまま、ユーノは剣の柄を掴んだ。少年の指を傷つけないように、そっと持ち上げ、物騒なものはさっさと片付けるにかぎると鞘に戻す。

「げえっ!!」

いきなり奇妙な叫びが響いて、ユーノは振り返った。

テラスに出て来たイルファが赤くなったり青くなったりしながら、わなわたと震えている。

「やあ、イルファ……？」

「きさっ、きさっ.....貴様...っ」

「べえっ」

「レ、レスファートさまっ！」

「もう遅いよおっ」

べろっと舌を出したレスファートがへへへ、と嬉しそうに笑いながら、イルファの側を走り抜けていく。

「忘れないでね、ユーノ！」

「あ、ああ...」

「貴様っ、今何をしたか、わかっているのかっ!!」

入れ違いにイルファが突進してきて胸を掴み上げんばかりに詰め寄り、ユーノは思わず片足を引いた。

「何...って.....えーと.....約束.....？」

「...っ！」

イルファが見る見る真っ赤になる。

「約束も約束、あれはなあっ!!」

「.....え？」

続いたことばにユーノはぎよっとする。

「えーえーっっっ?!」

事の重大さにようやく気づいた。

「もう遅いわいっ！ しっかり受け取っておさめやがって！ この...馬鹿が...っ！」

「そんな.....」

イルファのしかめっ面に、ユーノは呆然と駆け込んだレスファートの後に目を泳がせた。

8. 『太陽の池』

トクットクットクットクツ。

深閑とした森に三頭の馬の穏やかな蹄の音が響く。

「……と」

「扱いにくそうだな、ユーノ」

先頭のユーノが手綱を何度も引くのに、アシャは笑って声をかけた。

むっとしたようにユーノが振り返り、肩越しに眉を寄せながら応じる。

「そんなことはないよ。ヒストは良い馬だ」

その実、ユーノが額に『白い星（ヒスト）』がある栗毛の馬を扱い倦ねているのは明らかだ。

レノの乗りやすさから言えば格段に差のある、勘の強いヒストはレダト王から贈られたものだ。一緒に度重なる襲撃をくぐり抜けてきたあの白馬を、ユーノは今度の旅には連れてこなかったのだ。

「どうして、レノをセレドに置いてきた？」

アシャの問いにユーノは顔を背けて淡々と答える。

「……レノはボクにとって家族なんだ。こんな危険な旅に連れてくることはない」

「しかし、それは違うだろう」

三頭目、がっしりした体をゆさゆさと馬の足並みに揺らせているイルファが追い掛けてきて割り込み、アシャに轡を並べながら言った。

「家族ほど信頼できる馬なればこそ、生死をかけた旅へも連れていく、というのが普通だろうが」

くす、とユーノは低く微かに笑った。

「生死を『賭けて』いるならね」

皮肉な調子にアシャの胸に不安定な渦が動く。

（生きて戻る気が、ないのか？）

それほど、ユーノの声はそっけなくて寒い。

「レス、怒ってるだろうな」

ふいとユーノは口調を変えた。

「え？」

「……置いてきちゃったから」

「ああ」

アシャは出てくる間際の騒ぎを思い出した。

「な、なにっ！」

庭園でのやりとりをイルファから聞かされたレダト王は、ぎょっとした顔になった。

「レスファートが『誓った』というのか?！」

「はい」

イルファは苦い顔になってアシャに視線を投げてきたが、俺は知らない、と少し肩を竦めて相手の茶色の目を見返す。

ふう、と眉をしかめてイルファが王に目を戻す。

「それも、旅の者に、だと？」

「あの、ユーノ、という若造に。『誓い』を知らないのをいいことに御自分の名を与えられたのです」

「ううむ...どうしてまた」

重いため息をついてレダト王は額に縦皺を寄せ、側でにこにここと無邪気な笑みを浮かべているレスファートを睨んだ。

つまりはこういうことなのだ。

レスファートがユーノに求めた約束の『仕方』というのは、レクスファにおける他ならぬ永世忠誠の誓いだった。

相手が女性なら永遠の愛の誓い、男性ならば、相手の下僕となってでも仕えようという意思表示、それは自分の人生を相手に与えることを意味する。

自分の名を与えることを宣言し、捧げた剣を相手が受け取り鞘におさめることで、誓いは封印され、威力を持つとされていた。破ったものへの天罰は数知れず語られているが、何よりそこには己の信念をかけての誇りがあり、万が一にも反故にすることは生涯卑怯者の烙印を受けることになる。

ユーノは知らずにレスファートから忠誠の誓いを受けてしまったわけだ。

しかし、レスファートは少年、対するユーノはラズーンへの危険な旅の真っ最中、誓いの無謀さは一目瞭然だった。

「.....わかった。王子とはいえ、誓いを破ることはならん」

ぱっと顔を輝かせるレスファートに少しうなずき、アシャに向き直って、

「だが、何分にも幼き者のこと、十分に配慮していただきたい」

ちらりと同時に送られた目配せに気付いたアシャは微笑みながら答えた。

「わかりました。王子さまのお心、我らもじっくりと考えることにいたしましょう」

その夜、レスファートが寝入った後でユーノ達は王から内々の話を聞いた。

いわく、レスファートは幼いころに失った母の面影をことさら追っていること。レダト王とは互いに心を感じるがゆえに微妙な距離を置かざるを得ないこと。がしかし、レクスファにはレスファートの他に世継ぎはなく、王妃亡き後誰も再縁しなかった王としてはレスファートを失うわけにはいかないこと。

「しかし、な」

レダト王は複雑な顔で付け加えた。

「心を読めても、人の思いの複雑さ豊かさは様々な経験を通じて我がものとして実っていくもの、ここにおっては甘やかしてばかりで、次の世を担う経験が積みようはずもないと思ってもおるのだ」

結局一晩話し合い、どうしてもついていくと言い張ったイルファだけを連れて、翌朝早くユーノ達はそっと白亜城を抜け出したのだった。

(ごめんね、レス)

ユーノは心の中で謝り、ほろ苦い顔になった。

レスファートが慕ってくれるのは嬉しかったが、旅の危険は十二分に味わいつつある。5、6歳の、しかも王子さ

ま育ちのレスファートが耐えられるようなものではない。

「体の具合は？」

「かなりいいよ。もうほとんど大丈夫」

つい、と馬身を並べてきたアシャにユーノは明るく言った。

「アシャの薬、すごくよく効いた。何なの、あれ？」

「鉄剤とビタミン剤が主成分」

「てつぎい.....それ、薬の名前？」

聞き覚えのないことばにきょとんとすると、相手は例の不思議な微笑を浮かべた。

「俺の生まれた国では『そういうもの』がよく調べられていて、な」

「アシャは『そういうこと』に関してはなまじの医師より詳しいぞ」

イルファが自分のことでもないのに誇らし気に口を挟んだ。

「『太陽の池』作戦の時だって、王や兵の負傷を素早く手当してくれた」

「ふうん」

相変わらず得体が知れない、と横目でアシャを見遣ると、相手は素知らぬ顔で前方を眺めている。もうそろそろ目的地が見えてくるのかとユーノも顔をあげたとたん、ごそそと背中に積んだ荷物が揺れた。

「？」

何だろうと振り返ろうとした矢先、

「王子！」

「ええっ？」

素頓狂なイルファの声が響いて、アシャと同時に慌ててユーノは振り返る。

その目の前で荷物の一つが蠢いたかと思うとばさりと被いがめくれて、上気した頬を笑み綻ばせてレスファートが顔を出した。

「へへっ...きやつ」

「レス.....っ、う、わっ！」

バランスを崩したのか、レスファートが馬の背から転がり落ちそうになる。とっさに手綱を引き締めってしまったユーノも体勢を崩し、何とかレスファートを引き寄せたものの、二人一緒に絡むように落馬してしまった。

「つうっ！」

必死にレスファートを抱き込み、その代わりにしたたか全身を打ってユーノは顔をしかめた。

「いたあ...」

もぞもぞと腕の中で頭を摩りながら眉を寄せたレスファートを覗き込む。

「大丈夫かい、レ.....わ！」

「ユーノっ！」

とりあえずレスファートに怪我がないらしいと確かめてほっとしたとたん、飛びつかれて再び後ろに転がりそうになった。首に腕を巻き付けられ、ぎゅうっとしがみついてくる小さな体を慌てて抱きとめる。

「来ちゃった、ぼく！」

どすん、といつの間にか背後に居てくれたアシャの脚にぶつかって止まり、ユーノはもう一度深い吐息をついた。

「レス.....一体どうして.....」

「父さまはぼくの誓いを認めてくれない、ふだん、あんなに国のきはんとなれ、っていつてるのに！」

「だから、ぼく、王子として来たの！」

悪戯っぽい笑みに瞳を輝かせるレスファートは、自分が来たことを喜んでくれるとばかり思っていたらしい。

だが、ユーノもアシャも複雑な顔になっているのに気付いて、顔をこわばらせ、そろそろと体を離れた。ちょこんと地面に座って三人を交互に見ながら、

「あの.....ぼく.....来ちゃ...いけなかったの.....？」

「.....王子さま」

「.....ここまで来ては.....一人で帰すことなんてできないしなあ」

「...俺は嫌だぞ」

意味ありげなアシャの横目にぼそりとイルファが唸った。

「王子を連れ帰ったら、そのまま俺を置いて先へ進む気だろう」

「.....」

微妙に引きつった顔でアシャが目を逸らせる。

「でも.....連れていけない」

ユーノはぼふんと言った。はっとしたようにレスファートが見返してくる。澄んだアクアマリンの瞳がみるみる涙に潤むのにちょっと怯んで、ユーノは思わず周囲を見回した。

森はまもなく終わりになる。太陽は次第にその光を陰らせつつあり、当たりには夕闇の気配が忍び寄っている。どこからともなく煙のような靄まで広がり始めていた。

「だが.....帰すこともできない、な」

アシャが諦めたような声でつぶやいた。

「でも」

ユーノは唇を噛む。

「危険なんだ、特別扱いもできない。怪物や人殺しや泥棒に会うかもしれないし、食べ物も満足に食べられないかもしれない」

気持ちを決めて振り返り、レスファートを正面から見据えた。

「怪我したり、病気になったり.....死ぬかもしれないよ？」

「でも！」

見張った瞳からついに涙をこぼしながら、レスファートはユーノを睨み上げた。

「ユーノは行くんでしょう？」

「え？」

「ユーノだって、あぶないんでしょう？ ぼくが『誓い』をささげた人なのに！」

へたりこんでいた体を引き上げるように立ち上がって、こぶしを握りしめ、ユーノを見下ろした。

「ごめんなさい、来ちゃいけなかったんだ、でもっ」

強く激しく首を振る。

「ぼく、いや、いやだ、ユーノがそんなあぶない旅をしてるのに、とおくで一人にいるなんていやっ！」

わああつ、と泣きながら再びユーノに抱きついてくる。しがみつく体の熱さは遠い夜に抱き締めた

セアラを思い出させた。

連れていくわけにはいかない、けれども戻すこともできない。

唇を噛みしめ、周囲をもう一度見回す。だが、それでも判断がつかずに、ユーノは思わずアシャを振り向いた。

「……俺はお前の付き人だからな」

わずかに苦笑したアシャが小さな声で付け加える。

「それに大事な相手の側に居たい、というのは……満更わからない気持ちでもない」

「……」

それはレアナのことなのか、それではやはりアシャは旅についてきたくなかったのか、と胸が詰まった次の瞬間、

「よおし、決めたっ！」

イルファが怒鳴った。

「王子をお連れする！」

「おいおい」

勝手に決定してしまったイルファにアシャがあきれ顔になる。

「ですが、王子さま」

ユーノに抱きついていているレスファートを引き剥がし、イルファは肩を握って覗き込んだ。

「王子さまではなくて、レスって子供として扱います。旅の仕事もしてもらう、食事も寝床も俺達と同じ、雨風の中でも歩きます。そういうことができますか？」

「…うんっ！」

レスファートが大きくうなづく。

「さみしくてもつらくてももう国に戻れないかもしれないですよ、それでいいですね？」

「……ユーノがいるなら」

レスファートはふいに厳しい顔になってユーノを見つめ、深く頭を下げた。

「あなたが、いるなら」

「……レス……」

その薄い色の瞳に過った激しい光に、ふいにユーノも理解した。

たとえ幼くてもレスファートは長としての教育を受けている。その意志をどう使うべきかはレスファートの中に密かに植え付けられている。

もうこれ以上少年の望みを遮ることはできないのだ。たとえ置いていこうとしても、あらゆる手段を使って、この少年は自分の思いを遂げるだろう。

「では……」

立ち上がり、同じように頭を下げたユーノは小さくつぶやいた。

「私は、あなたの命を負う」

「いのちを……おう……ってどういうこと？」

レスファートがきよとんとした顔で見上げてくるのに、一転して笑いかけた。

「一緒に行こう、ってことだよ」

「いいの……？ ……いいんだね？ ……うん、うん、ユーノっ！」

安心したようにしがみついてくるレスファートを抱きとめたユーノの耳に、ぼそりとアシャの声が響く。

「またとんでもない荷物を」

「……不満？」

振り向くと、一瞬奇妙な顔になったアシャが軽く吐息をついて肩を竦めた。

「付き人に反論の余地はあるまい？」

日はほとんど落ちてしまった。

「……これが『盗賊王』の城か」

ユーノがしみじみとした声でつぶやく。アシャもうなづくように静かに城の外壁を見上げた。

「古びたものだな。人が住まない城はすぐに崩れていく」

「アシャ、あの窓だ、『盗賊王』がこちらを見ていたのは！」

イルファが指差す窓をユーノが見上げ、

「一回り見てくる」

「おい」

アシャが止める間もなくヒストを操って先に立つ。

三頭の馬は池の中央近くにある中島へと続く細い道を通っていく。

黒く汚れた灰白色の石積みの門。腐って外れ落ちた木の扉の隙間を抜けると、門と同じような材質の石で積み上げた城が聳え立っている。

太くがっしりした塔、物見台、狭く細長い窓にはぼろぼろになった窓枠と木戸、壁面には赤茶けた蔦が石に食い込み締め砕こうとするように張りついている。壁の外には豊かな水があるというのに、蔦は枯れていて、かさかさになった葉がユーノ達の通る風に揺らされただけではらはらと散った。

荒廃と破滅、濃くただよう死の匂い、それにたじろいだ気配もなく、ユーノはすぐに通路を辿って奥へ姿を消し、それほど待つまでもなく戻ってきた。

「外壁がぐるっと島を取り囲んでるんだね」

振り返りながらうなづく。

「典型的な守りの城だ。地下には武器庫や拷問室もあるんだろう……よくこんな城を落とせたな、アシャ」

「運がよかったんだろう」

「運？」

イルファが不服そうにアシャを見る。

「俺の働きは？」

「ここ……かなしいところだね」

イルファの前に腰を据えているレスファートがぼうっと遠くの景色を見るように瞳を彷徨わせながらつぶやいた。

「たくさんの人が死んで、たくさんの人が泣いてる……」

「感じるの？」

「うん……ちょっと、だけど」

ぶるっとレスファートは体を震わせ、ユーノに引きつった笑みを返した。

「なんで『太陽の池』なんてよぶんだろ……こんなさびしいところなのに」

「ここの池は真実を映すとされているからだ」

夜営地を探して馬を進めながらアシャは答えた。

「真実を映す？」

「城の中に『太陽の池』から水を引いた泉がある。そこに姿を映すと己の真実が見えるんだ」

「本当なの？」

「どうかな……試してみるか？」

ユーノの問いにからかうように振り返って見ると、相手が一瞬顔を強ばらせる。

「……いいよ」

「怖いのか？」

「そんなんじゃない」

「お前、何かやましいことをしてるんだろう」

イルファが笑いながら突っ込んだ。

「してない」

「じゃあ、真実が映っても心配ないはずだ」

「やましいことをしていないから、真実を見る必要なんてないんじゃないか」

「いや、違うぞ、きっと何か良からぬことを考えてだなあ」

「良からぬことって何だよ」

「そりゃあお前、夕飯で人の皿から肉を掠め取ったとか、朝飯で隣のやつの皿と交換したとか」

「イルファの『よからぬこと』ってごほんのことばかりだね」

レスが無邪気に指摘して、いやそうことではなくてだなあ、と言い返すイルファ、あんたの方がやましいんじゃないかと笑うユーノ、その賑やかな声に背を向けて、アシャは再び城を見上げる。

『盗賊王』の幻が今もなお窓の向こうから冷ややかに笑っているような気がする。

アシャが踏み込んだ時、『盗賊王』はちょうど泉水を覗き込んでいた。
城の外でも内でも味方も敵も血煙を上げて倒れていきつつあり、敗色濃厚だから諦めていたのかという、そうではない。

『盗賊王』は水に映った自分の姿に心底見惚れていたのだ。血に塗れ亡霊に付きまとわれ、どろどろとした闇に煙る自分の姿を、破滅へと向かう運命を心の底から喜び楽しみ受け入れていた。

地下の拷問室には数十人の女子供が鬨り殺しにされるために捕らえてあった。男どもは外壁に磔にされていたし、壁面も床も血糊でべたべたになっていた。

そのむせ返るような酷い状態を『盗賊王』は歓迎のために催したと言った。

『お前の中にもある残虐な喜びに敬意と愛情を注いでやろう』

剣を交えながら、どうして刃向かうのかと尋ねられた。

俺にはお前の中にある殺戮への欲望が見える。お前がそれを扱い倦んでいるのもわかる。

それを今解き放てば楽になれるぞ、『ラズーン』のアシャよ。

そう間近で囁かれて、危うく揺れ動いた心の闇をアシャは未だに覚えている。

(ならばこそ、二度と『ラズーン』には戻るまいと)

巨大な力を制する場所に自分の闇を持ち込んではいならないのだと思い知った。

「……このあたりにするか」

乾いた場所を見つけて振り返ると、まだ他愛ない言い争いを続けていたイルファがふいに話を打ち切った。

「そうか、飯だな！」

「やっぱりごはんばかりだ……」

レスの呆れ声に、食事っていうのはこの世の中で一番大切なものだぞ、とイルファが言い聞かせる。苦笑しながらユーノも馬を降りて引いてくるが、ヒストの苛立ちがここの気配のせいもあると考えたのだろう、優しく何かを話しかけてやっている。

その姿を見ていると、ふと『盗賊王』の記憶で波立った気持ちが、ゆっくりとおさまってくるのをアシャは感じた。

(たいした娘だ)

並の娘ならば、ここの気配を感じまい。美しい池と趣きある城に感嘆するだけだろう。鋭いだけの娘ならば、逆に怯えて怖がるだろう。ありもしない暗がりには魔物がいたと叫んでレスを恐怖に陥れたことだろう。

だが、ユーノは静かだ。

ここで何があったかを気付いていないはずはない、壁面の染みも血痕だと気付いているだろうに、それでもそれに無闇に怯えないが、かといって警戒を怠るふうでもない。

(思った以上に胆力がある)

それはユーノが追い詰められていた状況の厳しさを思わせた。あれほど平和な国の皇宮の中で、ユーノがどれほどぎりぎりの状態をしのいでいたかを教えた。

「こっちにおいで」

三頭の馬達を近くの木に繋ぎにいく後ろ姿、華奢な背中が緊張にぴんと伸びているが、手足の動きは滑らかだ。自分の不安が馬達に伝わらないように丁寧に気配りしているのがよくわかる。

ふいにその体を背後から強く抱き締めたいような気分になって、アシャは慌てて目を逸らせた。

「水を汲んでくる」

「おお……ところで、お前、ペクは嫌いだったっけ？」

イルファがからかい口調で声をかけてきて、じろりと相手を睨み付けた。

ペクは香葉の一種で、その香りは注意力を弱める。これから抽出したペクタスという薬には麻痺作用がある。ペクの状態で料理に入れ、旅の疲労回復によく使われるものだ。

「そういう刺激物は体に合わない」

背中を向けながらちよつとむっとした。

「わかってるなら聞くな」

「すまん」

気にした様子もなく荷物を解き、火を起し準備を始めるイルファにくるりと背中を向けて、眉をしかめた。

ここの空気に毒されたのはアシャの方かもしれない、いつになく刺々しい気分になっている。

注意力の低下はアシャにとって命取りだ。旅人の常としてではなく、特に彼の『体』にとっては、起こしてはならない『魔物』を起こすはめになる。

『盗賊王』が指摘したのもそれなら、アシャを故郷から去らせたのもそれだ。そしてアシャが一生誰とも繋がるまいと放浪することを決めたのもそれがあつた故だ。

水を汲もうとして泉を覗き込んだアシャは、その水面に映つた自分の姿をしばらくずっと見つめた。

灯火もないのに、水の面の暗い鏡にアシャの姿はくっきりと浮かび上がっている。よく見るとそれは、体の周囲をゆらゆらと包む、陽炎のような淡い靄のせいだとわかる。

その靄は霞み揺らぎながら、やがてすうっと集まって形を作つた。左右にのびて羽ばたく猛禽類の翼のように、頭の周囲に濃く集まって光り輝く王冠のように、幾重にも体を覆う豪華なマントのように、全身を猛々しく研ぎすまされた剣で飾るように、腰から下に寄り集まって担ぎ上げる台座のように、やがて主人の視線に気付いたように緩やかにほどけて淡く微かに体を包む。

誰を巻き込むわけにもいかない、いつかのユーノの思いは、アシャにもまた近しいもので。

「……っ」

微かに唇を噛み締めてそれら一つ一つを凝視していたアシャは、ふいに背後に動いた気配に足下の石を泉に蹴つた。ぼちゃんと音がして泉の水鏡が乱れると同時に、剣に手をかけ振り返る。

木々の隙間を翻るように消えた黒い影が一瞬見えた気がしたが、すでに気配はない。刺客にしては素早すぎる動きに眉をしかめたが、当たりは静まり返って再び戻ってくる様子もない。

(過敏になりすぎているのか?)

ため息をついて額の汗を拭い、器に水を汲んで夜営地に戻ると、ユーノの膝にもたれてレスファートが寝息をたてていた。

「アシャ」

にこりと笑つて見上げてくるユーノに気持ちが緩む。

「眠つたのか？」

「疲れてたんだね」

「それでも頑張つたんだぞ」

イルファが急いでかばってくるのに苦笑して、わかっている、と腰を降ろした。

自分しか感じていないような気配だ、すぐにどうこうということはあるまい。

「そら」

「うむ」

イルファからスープを受け取り、アシャはゆっくり口へ運んだ。

その夜半、寝苦しい夢から醒めたアシャは、火が消えているのに気付いて飛び起きた。

寝ずの番として起きているはずのユーノの姿がない。イルファは大いびきをかいて眠っているし、その側でレスファートも丸くなっている。

(どこへ行った?)

脳裏を掠めたのは夕刻の妙な気配、火種に手をかざすとまだ温かく、消えてからそれほどたつてはいない。

素早く火を起し直してイルファを揺り起こす。

「ん...あ?どうした？」

「ユーノがいない。探してくる」

「わかつた」

目をしょぼしょぼさせながらもイルファはすぐに目覚めた。剣を手に立ち上がるアシャにうなずき、レスファートの側に座り直す。

うなずき返して、アシャは急ぎ足におかしな気配が動いた場所へ急いだ。

「ユーノ！」

一声呼ばわった声が、ユーノ...と淡く響いて薄れていく。少し待ったが答えはない。ゆっくり気配を探りながら歩いていく。あのユーノのことだ、まさか刺客に倒されてということもあるまいが、と思いつつ、じりじりとしたものが胸の底からせり上がる。

「アシャ」

「！」

ふいにすぐ側の木陰から呼び掛けられてぎくりとした。

白い姿がぼんやりと木の背後に立って覗き見ている。

「ユーノ」

ほっとして声が波立った。

「火の番のくせに、何をそんなところで」

「やっと帰ってきたなアシャ」

ユーノが平板な瞳でずらずらと呟れた声で続けた。

「ユーノ？」

「忘れたとは言わさぬ、この『盗賊王』をな」

抑揚のない声でつぶやいたと同時に、無表情なままユーノは剣を引き抜いた。そのまま一気に飛び込んでくるのを、間一髪でかわしてアシャは戸惑う。

「どうしたんだ、ユーノ」

「ユーノではない、俺は『盗賊王』死の女神（イラクートル）の膝元よりお前を迎えに戻って来た」

ユーノの剣先が的確にアシャの急所を狙って突き出される。あやうくそれを抜き放った剣で受け止めはねのけ、アシャは顔を歪めた。

「夕方の気配は貴様か。死を望んでいたはずのお前が死にきれずに亡霊になるとは愚かだな」

「ほざけ」

ガシッ。

二人の剣が噛み合って火花を散らす。いつもならば力で圧倒できるはずのユーノが、じりじりと驚くほど強い力で押し返してくる。

「ふふふ斬れるのかアシャ。この娘の首をはねられるのか。お前の主人お前が心動かす相手を」

表情のないユーノの唇が淡々とことばを紡ぐ。

「ちっ」

心の闇を利用されたな。

舌打ちしながらアシャは力を細かく加減した。ただ押ししてくるだけではなく、時折ふいに緩めて、その勢いにアシャがユーノに切り込んでしまうのを待つ遣り口、一瞬でも気が逸れてしまえばアシャがユーノを殺しかねない。

ぎゅ、と力で押し出する、その次の一瞬にアシャは急に力を抜いた。思わず突っ込みかけたユーノの切っ先をかわし、体を沈めて内懐に飛び込んで、こぶしを鳩尾に叩き込む。きついとは思ったが長引けば不利、後の手当ては自分がすればいいだけのことと思いついてためらいを切る。

「ぐっ！」

呻いたユーノがぐたりと崩れ落ちてくる。

とたんに声にならぬ『盗賊王』の歯噛みが聞こえて、ふわりと黒い影が堪えかねたようにユーノから離れた。ユーノの体を片手に剣を一閃、黄金の輝きよりもまばゆい不思議な光を放った短剣が影の中心を裂き散らす。

ぐわあああああっっっ！

虚空に声が響き、影はあっという間に霧散した。

『運命（リメイン）』からすれば小者も小者、ただユーノの体を使ったところが巧みだっただけのこと、息一つも弾ませずにアシャは剣を閃かせて鞘におさめる。

（懲らしめるだけでもよかったが）

ユーノの体に入り込んだ、それが無性に腹が立つ。

（落ち着け）

吐息をついて、腕の中のユーノを抱え直し、活を入れた。落とされていた剣も片付ける。

「ん...っ...」

顔をしかめてユーノが唸り、ぼんやりと目を開ける。虚ろだった黒い瞳に柔らかな光が戻ってきて、二度三度瞬きしたかと思うと、

「アシャ...」

掠れた声でつぶやいて、次の瞬間真っ赤になって跳ね起きた、いや、跳ね起きようとした。

「つ、うっ」

「すまん。少し強すぎた」

鳩尾を抱えてへたり込む相手に苦笑しながらアシャは謝る。一発で決めておきたかったから強く出たが、やはりちょっときつすぎたようだ。

「ここ...どこ.....？ 私は.....どうしてここに.....」

「俺が聞きたい.....火の番をしてたんじゃなかったのか？」

「あ.....」

困惑した顔になってユーノが目を逸らせる。

「一体何をしに來ていた？」

「.....その.....泉を見に.....」

「泉？」

そうか、こっそり『真実』を覗きに來ようとしたのか。そのやましさを『盜賊王』に利用された、そういうことだったのか。

心の深く奥まで闇に犯されたのではなかったのかと安堵して、アシャはため息をついた。

同時にふと気付いて、

「で、泉は見たのか？」

「いや、覗こうとしたら、背後から何か妙な気配がやってきたから、振り返って、後は何が何だか...私は何かまずいことをしたのか？」

「ふうん、まだか、じゃあ」

「う、わっ！」

アシャはくすりと笑ってユーノを軽く抱き上げた。

「何だ、大声を上げて」

「だ、だって、何をする気かと」

「泉はまだ見てないんだろう、今連れてってやる」

「い、いい、自分で見.....いたっ」

アシャの腕に掴まっていたユーノがじたばた暴れかけて顔をしかめる。

「本気でやったから、しばらく動けないと思うぞ？」

「じゃ、じゃあ、今見なくていいっ、後で一人で見るっ」

見る見る赤くなったユーノが喚く。

「俺の方だって映るんだし、俺の正体もわかるぞ？」

「しよ、正体？」

「俺が何者だか知りたくないか？」

「う」

ユーノがぎゅっと胸に掴まったまま、思い詰めた顔で見つめてくる。セレドやこの先の旅のためには確かめておきたい、けれど自分の姿を見られたくない、その天秤がゆらゆら揺れているのがわかる。

「.....知りたい」

「じゃあ」

「いや、でも、あ、あ、やだっ！」

すたすたと泉の縁まで近寄ったアシャに小さく悲鳴を上げて、とっさにユーノはアシャの胸に顔を伏せてしがみついた。映った姿を見られまいとしたのか小さく縮こまる仕種、けれどふいに布数枚隔てただけで寄り添った体は予想以上に温かくて。

（ユーノ）

ごく、と無意識に唾を飲み込んだのに、ユーノが小さく震える。

(まだ.....男、を知らない体)

吹き上がりそうになった気持ちを押し込めて、そのまま静かに泉を覗き込んだとたん、激情に冷水を浴びせられた気になった。

(やはり.....)

泉の面にはユーノを抱えたアシャの姿が金色のオーラを纏って光っている。そして、腕の中に潜り込むようなユーノの姿は淡く微かに銀色の靄に包まれている。

(『銀の王族』か)

アシャの胸が痛んだのは、『銀の王族』がラズーンにもつ意味を知っているからだ。それを必要とするこの世界の仕組みを知っているからだ。

そして、『銀の王族』に対してラズーンが行う儀式がどんなものであるかも知っているからだ。

一瞬、このまま全てを捨てて攫いたい、と思った。

ラズーンへ着けば、ユーノは酷い苦痛を味わうことになる。その後はアシャのことさえ忘れてしまふかもしれない。故郷セレドに戻れる可能性も少ない。

これほど必死に家族を思い、国を思い、辛い旅に耐えていくのに、その見返りはユーノには余にも少なかった。その宿命故に、『銀の王族』は他の者より平穏と安楽を約束された人生を送っているはずなのに、ユーノはささやかな喜びさえ奪われて生きている。

それがラズーンの制御が外れてきてることを示し、ならばこそ必要な『銀の王族』として召集されているとは言え、せめてもう少し幸福な笑みをこの娘に保証してやれなかったのか。

きり、と微かに歯を鳴らして、アシャは泉に砂を蹴り落とした。波紋が広がり、絡み合うような金銀の幻に包まれた二人の姿を消していく。

呪縛が解かれた思いでゆっくり向きを変え、泉から離れる。

「ユーノ」

「.....人が悪い」

ぎゅ、と唇を噛んだユーノが半泣きになった顔を上げた。

「最低だ、人が身動きできない時に」

「すまない.....けれど、泉にうまく姿が映らなかった」

「え？」

「風のせいかな、水面が揺れて乱れてな」

笑いかけると、ユーノが露骨にほっとした顔になった。

「なんだ」

「すまん」

「無茶をするから、泉の神様に嫌われたんだ」

「そうかもしれないな」

悪戯っぽく笑うユーノに笑み返す。ふいにびくりとユーノが震えた。

たまたまとは言え、アシャの胸にしがみついたまま甘えている、それによろやく気付いたのだろう、うっすらと赤くなっていきながら、それでも囚われたようにアシャを見ている。戸惑うような黒い瞳が微かに潤む。小さな唇が薄く開いたままだ。

「心の中を...見られるのはごめんだ.....」

「ああ」

掠れた柔らかな声が囁くのに、アシャは少し距離を縮める。満更知らないわけじゃない、眠っているときには奪ったこともある、ただしあのときは髪で、唇、ではない、だが、今なら。

見つめあった数瞬後、すい、と唐突にユーノが目を逸らせてゆっくりと伏せた。顔も同時に伏せられて、焦茶色の髪が視界に広がる。

「.....アシャ」

「ん」

「降ろして。もう歩ける」

「.....」

「イルファやレスが心配してる」

「.....そう、だな」

腕をほどくとするりと流れ落ちるようにユーノが体を離れた。

あっという間に熱が去って、寒い感触だけが残される。それが思ってもいなかったほど痛くて、アシャは茫然と背中を向けたユーノを見た。

「行くよ」

「.....ああ」

そういうこと、なのか、と思った。ユーノはアシャにはそういう気持ちを向けないということなのか、と。

なぜだ、と振り向かせて言い募りたいような気分になった。自惚れかも知れない、けれどなぜだ、なぜ俺では駄目なんだ、と。

けれど、そう尋ねた瞬間、今開いたこの距離がもっと大きく裂けてしまい、二度と笑みさえ見せてくれないのではないか、そんな他愛ない恐怖が襲ってアシャは戸惑いうろたえた。

(俺が.....怖がってる...?)

ユーノに手さえ触れられないことを？

「アシャ？」

「んっ」

数歩離れたユーノが突然振り返る。にこ、と小さく笑って付け加えた。
「探しに来てくれて、ありがとう」

9.シェーランの山賊（コール）

『太陽の池』を発って数日後、一行はシェーランに入った。

とっぴり暮れた日に、ひさしぶりに家屋の宿を探しにかかる。

「ごめん！ 旅の者だが一番の宿を...」

「はいはい.....」

細く扉を開けた相手は目の前の大男にぎよっとしたのか固まり、次の瞬間顔を強ばらせて、ばたん、と手荒く閉めてしまった。

「おい！ 怪しい者ではない！」

どンドン、と戸を叩いてイルファが喚くと、中から悲鳴のような叫びが応じる。

「嘘をつけ！ 早くどっかへ行ってくれ！ 山賊（コール）の手伝いなんか真っ平だ!!」

「山賊（コール）？」

アシャが眉をひそめるのに、イルファの様子を見守っていたユーノは訝しく目を向けた。

「何...コールって？」

「シェーランの辺境貿易商人.....まあ、平たく言えば山賊、だ。ここ数年は大人しかったはずなんだが...」

「それで、なぜ俺を見て戸を閉めねばならん？」

ぼそりと言ったイルファに、思わず笑いを嘯み殺す。

「なんだ、それは」

「ごめん」

「謝ってなお笑ってるとはどういうことだ.....お前までなんだ、アシャ」

「すまん」

「くそっ」

確かにイルファは筋骨たくましい大男、それが唐突にのっそりと戸口に立たれては、どう見たってただの旅の者には見えない。

むっとしてふくれっ面になったイルファに、レスファートが生真面目な顔で言った。

「見えないってふべんだね。イルファ、こんなにやさしいのに」

「そう、そうですとも！」

たちまち相好を崩したイルファは、少年を軽々と抱き上げ、

「王子...レスだけですよ、俺に同情してくれるのは」

すりすり嫌がるレスファートに頬をすり寄せた。

まあ確かにいじけようともいうものだろう、7軒目の宿を断られては。

「しかし、まいったなあ。早く宿を見つけないと」

ユーノはつぶやき、さすがに疲れた顔のレスファートに目をやる。馬に乗り慣れている彼女と違って、レスファートはかろうじて馬に引掛かっている程度、いくらイルファが抱えるように乗せていても、子供の体にはかなりの疲労になる。

（私だって始めは困ったものなあ）

ユーノは苦笑しながら遠い日を思い出した。

ゼランにねだって馬に乗せてもらったのは、確か7歳の誕生日の頃だった。

あぶみに届かぬ足を伸び上げるようにして踏ん張り、国民の前をパレードしたのは良かったが、翌日は腰が痛くて体がばらばらになりそうなほどきしんで泣きそうだった。

それでも強がって馬の練習は止めなかったのは意地もあったが、温かな馬の体に深い安らぎを感じたからだったかもしれない。

（平和だったなあ、あの頃は）

もう10年になる、と思った。

20歳まで3年、それから10年で30歳、それから10年で40歳。

夢物語のような遠い未来。

（20歳まで、か）

その頃まで生きるためにはまだまだ鍛練と幸運が必要だろう。

とにかく、今、この旅を生き抜いて、レスファートを守り抜いて、アシャを守り抜いて.....そして？

そして、の先には何がある？

「.....がたのもうか」

我に返ると、イルファの胸あたりに抱き上げられたレスファートが尋ねていた。

「そうだな。それなら、泊めてもらえそうだ」

アシャがくすくす笑いながら答える。

「俺のどこが悪い」

「お前が悪いんじゃないさ。恨むなら、お前に似ている山賊を恨むんだな」

取りなしになってないアシャの一言に、イルファはいよいよむくれてしまった。

「どうするって？」

ユーノの問いにアシャが苦笑した。

「ああ、レスが頼んでみようってことになったんだ」

「うん、それならいいや」

うなずいて、不服そうなイルファに確認する。

「その間、イルファは隠れてるんだろ？」

「どういう意味だ！」

イルファは真っ赤になって唇を曲げた。

「大体、成熟した男の魅力というものはだなあ、おい、聞いているのか、ユーノ！」

「はいはい、聞いているよ」

くすくす笑ったユーノは下から服を引っ張られて呼ばれた。いつの間にか降ろされていたレスファートに顔を向ける。

「何、レス？」

「ユーノならだいじょうぶだよ。いっしょにいこ」

「レス～」

イルファが情けない顔になってレスファートを見る。

「それはあんまりといえばあんまりな」

「わかった。じゃ、イルファ、隠れててね」

「ユーノっ！」

また顔を赤くして怒鳴るイルファに、しいっ、また次のところも駄目になっちゃうよ、と唇に指を当てる。ううう、と唸ってイルファが背中を向けたのに、レスファートとうなずきあって別の家に向かう。

「少し離れたところの方がいいな」

「さっきのさわぎを聞いてるかもしれないもんね」

城を出てからわずかしかたっていないが、レスファートの顔付きはずいぶんしっかりしてきている。その顔の変化の激しさがレスファートのきつきを教えているようで、ユーノは胸が痛んだ。

「ここは？」

「よさそうだ」

窓の木戸の透き間から温かそうな光が漏れてくる。人の話し声もしている。

生業としての宿屋ではなさそうだが、家もまあまあ大ききで納屋もあるから、最悪ならばそちらで一晩過ごさせてもらえればいい。

そっと近づいて扉を叩き、こんばんは、とユーノは声をかけた。続いてレスファートがこんばんは、ここを開けてください、と高い声で頼む。

ユーノの声に話し声が止み、扉がきしんだ音をたててそろそろと開いた。外に立っているのがユーノとレスファートの二人だと気づくと、男はいぶかしい顔をしながらも扉を大きく開いてくれた。

「どうしたんだね、こんな夜更けに」

「ラズーンの下に。旅の者です。小さな子供がいるので、一晩休ませて頂けないでしょうか？」

「ああ.....こんな子を連れての旅か、それは大変だな」

男の視線がレスファートに落ちる。レスファートがまっすぐに男を見上げて、深くお辞儀した。

「どうか一ばん休ませてください」

「あらあら、そりゃ、無理だよ、こんな子が野宿だなんて」

奥から出てきた男の妻らしい女がレスファートを見て顔を和らげる。

「さあさ、入りなさい、夕飯は食べたの？」

レスファートに尋ねるのに、心得た少年は心配そうに見上げる。

「あの、兄もいるんです」

「え？」

「見かけはごついんですが、優しい兄が二人。呼んで来てもいいでしょうか？」

すかさずユーノが付け加えた。

「あ、ら、そう」

女は一瞬ためらったが、レスファートが不安そうに瞬きするのに、にっこりと笑い返した。

「いいよ、連れておいで」

「ありがとうございます！ じゃあ、ボク、呼んできますね！」

レスファートを残して少し離れた木陰で待っていたアシャとイルファを呼びに戻ると、一瞬二人が複雑な顔でユーノを振り返った。

「.....何かあったの？」

「いや、何でもない、うまくいったか？」

アシャがさらりと流す。

「うん、連れておいでって。ごついけど、優しい兄だって紹介したから」

ユーノはちろりとイルファを見やった。

「大人しくしててね、イルファ。この前の時みたいに、呆れられるほどご飯のお代わりしないですよ？」

「人を食欲の権化みたいに言うな」

「この前、家人の飯まで欲しがったからだろう」

「.....注意しよう」

アシャが苦笑しながら付け加え、イルファはむっつりとまた唇を曲げた。

「怪物？」

遅い夕食の席についていたアシャ達は家の主人の話にスープから顔を上げた。

聞き間違いではなかったのかと眉をひそめるのに応じて主人は話を続けた。

「確かに、私達は山賊（コール）と呼んでいます、本当はあいつらはケトル山の洞穴に住む怪物なんです」

ケトル山は街から少し離れたところにある峻険な山で、別名『鳴く山（コール）』と呼ばれている。山のあちらこちらに口を開ける洞穴に細い風穴が通じているために、一定方向から風が吹くと、山がさまざまな唸り声をたてる、それを「山が鳴いている」と言うらしい。

「あ、ほら！」

主人の促しにレスファートがびくりと震えて食事の手を止めた。

うおおおおお.....うふおおおおお。

地底から沸き上がったように聞こえた声は静まり返った村を走り、地鳴りのように床を揺さぶって駆け抜けていく。

「あんな音.....さっきまで聞こえなかった...よ？」

「そうだね」

怯えた顔でレスファートがユーノを見上げる。

「風向きによるんですよ。これぐらいの時間になると大きく聞こえてきます」

主人のことばを追うように、今度は細く震える娘の悲鳴のような声が家の透き間から忍び入ってきた。

ひいやあああああ。

「ユーノお」

レスファートは完全に食事を止めてしまった。母の背後に隠れる小さな子供のように、椅子の上で隣のユーノに身を寄せる。ひそめた眉の下でアクアマリンの瞳が大きく見開かれ、ユーノ達の見えぬものを追うように虚空を彷徨い、部屋のあちこちを見回した。

「レス？」

「ユーノ.....いや.....あの『音』.....いやだ.....」

やがてレスファートは色を失った唇を震わせて訴え、ユーノにしがみついた。

「どうしたの、レス」

小さく首を振って応えない、その肩ががたがた揺れている。

「！」

レスファートのただならぬ様子に腰を浮かせたアシャは、再び響いた声に耳を澄ませたが、突然はっ

と戸口を振り返った。片手を剣に伸ばし、一本をイルファへ放りざま、もう一本を抜き放つ。

「な、なにを…」

ぎよっとする主人に顎をしゃくって隠れている、と示した。

「あれは山賊（コール）独特の合図だ」

「山賊（コール）?!」

主人が叫び、少し首を傾げて耳をすませた後、慌てて首を竦めた。その耳にもようやく、布を引き裂くような娘の声のような風音に混じって、とぎれとぎれに遠く波打つ笛の音が響くのが聞こえたらしい。

素早く戸口へ動いて待ち構えるイルファがちらっと鋭い一瞥を投げてくる。

アシャはうなずき間合いをはかる。

3……2……1……。

「っ!!」

「ひやああっ！」

声にならない主人の悲鳴、奇妙な叫び声と一緒に赤ん坊の頭ぐらいはある鉄球が木戸を砕いて飛び込み、一瞬後、すぐに鎖に引き戻されていった。

間一髪、身を伏せたアシャの頭の位置をはかったように、再び鉄球が割れた木戸から躍り込む。

「アシャ！」

「大丈夫だ！」

前方に身を投げると同時に転がって、アシャはユーノを振り返った。レスファートを守るようにと合図すると、こくりとうなずいたユーノの目の前、窓からくるくる回りながら飛んできた斧が椅子を砕いて転がった。

レスファートを抱いて伏せながらユーノは剣を抜き放つ。

「アシャ！」

背後の窓から躍り込んできた男にイルファが怒鳴り声を上げた。そのイルファも組みついてきた男を殴りつけ、鉄球を奪って逆襲しようとしたが、顔を歪めて鉄球を落とす。

「なんつー重さだ！」

「ふっ」

背中を急襲されたアシャは小さく息を吐いて、身を沈めて壁際に引いた。男により接近するような動作、間合いを取り損ねた相手が怯んだ一瞬に、脇から背後へ、柄まで通れとばかりに貫いて剣で突き上げる。

「ぐええっ」

呻き声を上げて男がアシャを越えて前に崩れ落ちた、が、息をつく間などない、砕かれた木戸から、蹴り破られた窓から、イルファが重さに耐えかねて落とした鉄球を軽々振り回しながら飛び込んでくる。

首から手・足首まで覆う黒服、毛皮を片肩から腰へ巻きつけた逞しい男達、体の大きさで言えばイルファがかろうじて張り合えるぐらいか。

（こいつら、山賊（コール）じゃないな）

首に突き出された剣を跳ね上げながら、アシャは顔をしかめた。

圧倒的な体格差を、繰り出す剣一つでしのぐのは慣れたことだが、以前戦ったときはこれほど手強くなかった。何より見かけは山賊（コール）なのだが、そのどろんとした目は生気がなく、振るっている暴力とあまりにも対照的に醒めている。

（それに、この怪力）

振り回される鉄球、剣を絡ませたときに押し込んでくる肩を砕くような強圧。

（人間の力『以上』のようだが）

アシャが考えを巡らせている間にも空を走った鉄球がユーノ達を襲う。

手から剣が叩き落とされ、顔を歪めたユーノは視線を近くのテーブルに走らせながら、片手にレスファートを抱えて飛び退る。その足から毛ほども離れていない床が鉄球で砕かれた。

きらりと目を光らせたユーノが鉄球に繋がった鎖を蹴りつけ、相手が引き戻そうとした間を崩した瞬間、身を躍らせてテーブルを倒し、その陰にレスファートを放り出す。

少年が小さな悲鳴を上げながら、テーブルと壁の隙間に転がり込む、そのとたん。

「イルファ、こっちに剣！」

「おう...っ？」

イルファが数人片付けて手薄になったところへ有無を言わず命じた声に、思わずイルファが剣をユーノに投げてからうろたえる。

「えっ、わっ、わっ」

「ありがとっ！」

テーブルの後ろに逃げ込んだレスファートを狙って鉄球を投げようとした山賊（コール）にユーノは襲いかかる。野生の獣を思わせる猛々しきでひきしまった顔、小柄な体が宙を舞い、躍り上がったしなやかな腕にはイルファの重い剣、全体重をのせて山賊（コール）の肩から袈裟がけに剣を浴びせかける。もちろん、その一撃で崩れるような相手ではない、が鮮血を散らせた相手の動きが止まったと見るや、

「！」

足を床に着けるや否や、再び気合いを込めてユーノは跳んだ。一旦切り降ろして開いた傷口を容赦なく切り裂く、さすがに響いた山賊（コール）の絶叫を気にした様子もなく、行き掛けの駄賃とばかりにイルファに走り寄りながら倒れてきた相手にとどめをさし、そのまま血まみれの剣をイルファに放る。

「返すよ、イルファ！」

「う、わっ、わっ！」

獲物を失いおたおたしていたイルファはユーノの凄まじい動きに茫然としていたが、突然投げ返された剣を危うく受け止め、間一髪突っ込んできた敵を防いだ。

「何するんだ、馬鹿野郎っ！」

「ごめんっ」

ユーノがイルファの所へ走り寄ったのは何も相手のことを考えたのではなく、単にその近くに飛ばされた自分の剣があったからだ。

それと気付いて、イルファが一層派手なのしり声を上げる。

「死の女神（イラクトル）に喰われっちまえ！」

「やなこった！」

ユーノの叫びにこのっ、と苛立ったイルファが怒りを山賊（コール）に叩きつける。その合間を舞うユーノは致命傷こそ与えられないものの、手首や足首、喉などを傷つけ確実に相手の動きを奪っていく。

（どうやら、しのげそうだな）

微かに苦笑しながら、アシャは飛びかかってきた山賊（コール）を一人戸口の外へ蹴り出し、もう一人を一緒に引きずり出した。

外にまだ手が残っていてはたまらないと思ったせいだが、形勢不利と見たのか、それとも同時にどこかの家を襲って当初の目的は達成したのか、本来ならば闇に構えているはずの本隊の姿がない。

代わりに。

「っ」

ふいと目の前に立ち塞がった影に目を上げ、アシャは思わず息を呑んだ。

白馬に女性が一人跨がって、こちらを静かに見下ろしている。

波打つ金色の髪、豊かな胸とくびれた腰、それに巻き付く薄水色のドレス。白い指先が上品に手綱をそっと押さえている。

美しい女性だった。

ただし、その面が虚ろな骸骨でさえなければ。

「ミネルバ.....」

『そなた、こんなところにおったのか、アシャ』

闇夜の果ての死の国から聞こえるような、震える昏い響きが嗤った。

アシャは苦い顔で剣をおさめた。

敵ではないが、味方でもない。

いや、この相手に剣でどうこうできるわけもない。
何せかつては『ラズーン』にその存在ありと知らしめた『泉の狩人（オーミノ）』の精鋭なのだ。
「あなたが出てきているとは思わなかった」
相手の背後にある巨大な力を思っとうんざりする。
『私とて同じこと』
ミネルバはまた嗤った。命の営みを、光の世界を嘲るその響きのまま、
『そなたがここにいるとは思わなんだ。……「あちら」へはもう戻らぬつもりか？』
「……そのつもりだったが……ひよんなことから戻ることになりそうだ。それより」
相手の冷酷さに負けないように冷たい目で馬を見上げる。
「あなたの意図はなんだ？ シェーランの山賊どもに組みしているのか」
ミネルバがふわりと髪をなびかせて、俯きがちに顔を揺らした。それまでの冷笑とは違った苦みを含んだ笑いの気配を漂わせる。
手綱を少し引いたせいか、白馬が顔を振り向かせると、顔の中央にたった一つ輝く巨大な金色の目が無表情にアシャを見つめ返してきた。
『私は関わっていない……この私がラズーン支配下（ロダ）に関わるわけがなかろう。私がここに居るのは、支配下（ロダ）にしては珍しい精神波が漏れていたせいだ。そなた……だけではなさそうだな』
ミネルバはアシャの背後を見遣った。
「『運命（リメイン）』を追っているのか？」
『私が追うのはいつもそれだけだ……だが、どうして私はそなたに会う羽目になったのかな』
ミネルバは面白がるように昏い声を響かせた。
だが、突然、背中から殺気が突っ込んできた。とっさに身を翻したアシャは、
「話している場合じゃないがな」
とん、と軽く背を打って、男をミネルバの前に押し出してやった。
『無精をするな、「ラズーン」のアシャともあろう手練が』
ミネルバが呆れたようにつぶやいた。
それでも背中を押されてたたらを踏みながら飛び出てきた男を凝視する気配、そのぼっかり空いた眼窩の奥に何かが揺らめいたように見えた次の瞬間、男がことばにならない絶叫を上げる。
仰け反り痙攣しながら倒れてくる男をアシャは無造作に避ける。
哀れとは思うが、考えている通りなら遅かれ早かれまともな死に様には至らない。
見下ろすと、倒れ込んだ男の目があつた部分が黒く焦げ爛れていた。異臭が漂い、ひくひくと動く男の手足が生き物の動きを越えた不気味さだ。
『ふ、ふ…』
ミネルバが嘲笑を響かせ、顔をしかめるアシャをちろりと見た。
『それほど毛嫌いするな……同じ源に拠るものではないか』
「……」
『それほど己の出自を嫌っておるそなたが、なぜまたラズーンへ戻る気になったか、わかったぞ』
じろりとアシャが見返すのに、相手は楽しそうに背後を見つめる。
『……なるほど「銀の王族」か。ラズーンの招待客だな？』
「付き人、になった」
『ほう……それはそれは……あれは娘、だな？』
「……そうだ」
『娘が耐えられるのか？』
「……あいつなら大丈夫だ、それに」
万が一のことがあってもそこは俺が。

さすがにそれを口に出さずに唇を引き締めてミネルバの視線を追って振り返る。

家の中の騒動は見る見る片付いていく。覆いかぶさってきた山賊（コール）の顎を派手に蹴り上げ、仰け反ったところに切り込むユーノの双眸は燃える黒炎、その激しく美しい光に思わず見惚れて立ち竦む。

『……えらく惚れ込んだものだな』

ぼそりとミネルバがつぶやいてアシャは我に返った。

『もっとも伊達に視察官（オペ）をしているわけではなかろうから、そなたの目を疑いはせぬが……
…それにしてもそなたらしくない。氷のアシャと言われた勇士とは思えぬな、腑抜けた顔をしておって』
無表情に振り返ると、相手は軽く肩をすくめた。

『まあ、よい。そなたの心の熱さは私が知っておる……その美しい仮面の下に滾る激情も、な』

「何が言いたい」

『何も。ただ、それに嘔きかけることができる乙女が今までおらなかつただけのこと、だろうよ。さあ、もう行くがよい。あの者達もそろそろ不審に思うぞ』

ミネルバは手綱から手を離し、足下に転がっている男の屍体に向かって指で招いた。ふわ、と重さのないもののように浮かんたそれを、くすくす笑いながら白馬の背に引き寄せる。

『これはもらっておこう。騒ぎを起こすのは好まぬ。いくら支配下（ロダ）とはいえ、こんな死に方では冗談にもできぬしな』

「……このあたりに『運命（リマイン）』は居たのか、ミネルバ？」

『それを知ってどうする』

ミネルバが間髪入れずに問い返し、アシャは口を噤んだ。

『己の運命に立ち向かう気になったのか、アシャ』

「……」

『気持ちも定まらぬのに、敵の所在を確かめても仕方なからう。それとも…』

微かに微かに柔らかな微笑みの気配が滲む。

『あの娘のために、命を賭ける、か？』

（ユーノの、ために？）

もう一度家の中を振り返る。飛び散る汗に紅潮した頬、鋭い視線は闘志を失っていない。

「……彼女に俺は必要じゃない」

『く……くく』

ミネルバが失笑した。

『必要とされないのがそれほど苦痛か、ラズーンのアシャ？』

「っ」

『それこそ……』

その先をミネルバは続けないまま、そつと馬の背の載せた男の体を指で撫でた。

『私の今宵の花婿はこの者にしておこうよ。……ほう、そなたなしでもしのいだぞ。中々の手練を同道したと見えるな、アシャ。ラズーンへの旅を楽しむがよい』

暗く魔的な笑いをあたりに満たして、白馬がゆっくり歩み去る。

その幻のような姿がみるみる夜闇に溶け込み消えるのに、アシャは深く重いため息をついて身を翻した。

（簡単に言ってくれる）

ユーノを愛しいと思うことも、守りたいと思うことも、それこそ命を賭けることと実は大差がない。アシャの生まれが、世界の流れが、否応なくユーノを、アシャを奔流に巻き込んでいくのだ。

その流れから外れ、世界の滅亡には関わらぬとし、自分達の復讐のために『運命（リマイン）』を狩る輩に、その世界で必死に生き延びようとする命の厳しさがどれほどわかるのか。

だが、そう思った瞬間に、その思いが諸刃の剣であることにも気付いた。

アシャもまた、全うすべき仕事を全うせずにラズーンを離れた者、それが遠く遥かな場所でユーナ・セレディスという一人の少女を生死の境に追い詰めていることも知らずに。

そしてそれは、今こうして、故郷を同じくする者とやりとりしている間に、ユーノがまた修羅場の中に置き去られているのと同じことだ。

（俺に、その資格はある、のか？）

ユーノを腕に抱き締める、資格が。

「ちっ」

そう思った瞬間に胸を過った傷みにいまいましく舌打ちして、アシャは急ぎ家の中に戻ったが、中

ではほとんど始末がついてしまっている。

「アシャ！ どこ行ってたんだ！」

すばやく見咎めたイルファがむくれる。

「一人だけ楽しんでやがったな！」

「外の敵を確かめてたんだろが」

「ほんとか？」

「う」

イルファだけではない、レスファートの微妙な視線に思わず口ごもるアシャの前でぱちん、と音を立てて剣を片付けたユーノがちらっと見遣ってくる、その視線が一番堪えた。

「俺だってな、」

「お願いしますっ！」

思わず弁解しようとした矢先、家の隅で震えていた主人ががばりと両手をつく。

「は？」

「山賊（コール）をやっつけてもらえないでしょうか！」

「え」

「お願いします！ お願いします！ お願いします！」

ぎよっとするアシャ達に主人はひたすら喚き続けた。

翌日。

「どうもおかしな気配だと思ったんだ」

馬に引かせた荷車の上で、体のあちこちをぶつけながらアシャは顔をしかめてぼやいた。

うなずいて神妙な顔をしようとする努力しつつ話を聞こうとしたユーノは、とうとう耐えかねて吹き出してしまふ。

「ご……ごめんっ……なんかつい……こう……おかしくって」

「ちっ」

うっすら赤くなったアシャが不愉快そうに顔を逸らせて舌打ちする。

「覚えてろよ、イルファの奴」

「でも、似合うよ？」

「言うな」

むすっとしたアシャが紅を塗った唇を尖らせる。

口紅だけではない、身につけているのは淡いクリーム色の衣、結い上げた髪には真っ白なラフレスの花と真紅の櫛飾り、手足には色鮮やかな組み紐の装飾品という派手な女装、もともと女顔だけに苛立ってる紫の瞳もきらきらまばゆいし、どう見たって誰もが見惚れる美女なのに、表情だけがまるで小さな男の子のようにぶっきらぼうで幼い。

「せっかく美人なのに」

「おほほ、お褒めに預かり光栄至極……とでも笑えというのか」

じろりと険のある目つきで睨んでくるが、やはりどうにも絶世の美女が何かしら拗ねている、そういう気配の方が強い。

「いや、そこまでは」

くすくす笑いながら、ユーノは夕べの主人の話の思い出した。

「生贄？」

「はい…実はこんなに山賊（コール）を恐れている理由というのは、『生贄』のせいなのです」

荒らされた家を片付け、山賊（コール）達の屍体を荷車や馬で村外れの墓地まで運び、ようやく何とか落ち着いたころ、主人はぼつりぼつりと話し出した。

『鳴く山（コール）』が低い地鳴りに加えて女の悲鳴のような叫びを上げる時、いつの頃からか、山賊が街を襲うようになった。

やり方はそれまでと全く違う。一番に盗んでいくはずの貴金属や食物などには目もくれず、ただただ村を破壊し女を攫っていく。人々が娘や妻を隠し始めると、山賊はより荒れ狂い連日連夜襲撃を続けた。やがて、人々が山賊をコールと呼んで恐怖に恐れ戦くようになったころ、彼等は生贄を命じた。

『鳴く山』が地鳴りだけではなく女の悲鳴で呼び掛けるとき、くじで選ばれた娘は泣く泣く家族に別れを告げ、『鳴く山（コール）』に向かう。そうすれば村はそれ以上襲われず、『生贄』は一人で済む。

もし、『生贄』が準備されていなければ、山賊（コール）は村を襲い、襲った数だけ『生贄』を差し出さなくては再び村が襲われる。その夜、襲われた家は二軒、人々は二人の『生贄』を用意しなくてはならない。

「『生贄』には未婚の若い娘でなくてはならないのです。しかし、もう村には娘など残っておりません……私どもの娘も……この前のコールで……」

主人は膝の上で固くこぶしを握りしめた。

「さきほどのあなた様方の剣の腕前を見ておりました。お礼はいたします、どうかあの山賊どもを退治して頂けないでしょうか」

「しかし」

「アシャ」

言い淀むアシャにユーノは顔を上げた。

「引き受けたいんだけど」

「……ユーノ」

俺達はまだまだうんとかかる旅の途中でだな、と言いかけた相手が、応えないでじっと見つめるユーノを見返し、やがて大きくため息をつく。

「……言い出しそうな気がしていた」

「だって」

ユーノは床の上で返答を待って体を縮めるように座っている夫婦を見た。

「このままじゃこの人達、殺されるのを大人しく待ってろ、って言われてるようなものだよ？」

「こっから出ていくってことは駄目なのか」

イルファが尋ねると、主人が苦しげに顔を上げる。

「……娘の生死が知れません……」

「……」

「ああいう男達に攫われて、無事ではいるはずがない、そう思われるのは承知しております、が」

生きているか死んでいるか、それを確かめもせずここから逃げ出すわけにはいきません、私どもはあの子の親なんですから。本当ならば我が手で救い出してやりたいのです、けれど、それがどれほど無謀なことであるか、自分達の無力は重々わかっております。しかし、寒い夜には凍えていないか、食べ物ちゃんと食べているのかと、生きていることばかり考えているのです。

主人の荒れた頬を伝い落ちる涙に、イルファもことばを失う。

「アシャ」

「……がしかし」

「……無茶を言ってるのはわかってる、けど」

私には、親として心配するこの人達の気持ちが。

それほどまでに案じてもらえてるのだから、全うさせてやりたい、せめて生死を確かめてやりたい。

言いかけて苦しくなって俯くと、はああ、とアシャがため息をついた。

「策はあるのか」

「いいの？」

「止めたら一人で行くんだろうが」

「……うん」

「俺はお前の付き人だ、放置するわけにはいかん」

苦い顔で腕組みをして、しかしどうやって『鳴く山（コール）』に入る、と尋ねてきた。

「『生贄』になってみようかと思うんだ」

「『生贄』に？」

「内側からなら隙もできる、何か突破口が見つかるかもしれない」

「またそんな無謀なことを……出られなくなったらどうする気だ、第一、『生贄』は二人なんだぞ、

一人はお前がするとして、もう一人を一体どこでどうやって調達……」

いらいらして髪を掻き上げたアシャをイルファが見つめる。つられたように主人が見上げ、レスファートもアシャを見た。

「どこで調達するか、だよな」

「そう、だよな」

「この村には若い女の人ってもういないんだよね？」

「ええ、でもひょっとして」

イルファ、ユーノ、レスファートとことばを繋いで、主人が小さくうなずく。

「だろ、だから、もう一人の『生贄』……ちよつと待て」

はっとしたようにアシャが顔を強ばらせた。

「何かおかしいことを考えてないか」

「いけませんかね？」

「いけそうだよな？」

「いける気がする」

「うん」

にっこり笑ったレスファートがとどめを刺す。

「アシャなら女の人でもとおるよ！」

「待てっ！」

「大丈夫だ」

うろたえるアシャに、イルファが重々しく断言した。

「お前なら脱がされても女で通る」

「で、何がおかしい気配だと思ったって？」

「ああ」

アシャが睨んでいた視線を微かに逸らせる。

「……あいつらとは前にやりあったことがある」

「あるの？」

「まあな」

まあな、だって？

ユーノは密かに眉をしかめる。

確かにアシャという男が見かけとは全く違うものだということは次第にわかってきた。優男で女に見えかねない綺麗な顔で、詩歌も口にしダンスもうまい、宮廷慣れもしている、物腰もあたりも柔らかいが、その実敵を倒すときの容赦なさ、年齢にしては異常に豊富な知識と経験、しかも時々見せる冷ややかな微笑には妙に得体の知れないものもあって。

レクスファで『盗賊王』を倒したとも聞いた、なのにここでも『山賊（コール）』とやりあったことがあるという。どう見ても生死を左右する修羅場を事もなくぐり抜けてきているようなのに、ただの旅人がそれほどのことに巻き込まれて平然と生きてこれるのだろうか。

そもそも、アシャはどこ生まれで、本当は何者なのか、それをユーノはおろか、レスファートもイルファも、いやレダト王さえ詳しく知らない。知らないままに、誰もがアシャを身内深く迎え入れる、それが既に十分不思議なことではないのか。

(まさか)

ちら、とユーノは横目でアシャを見遣る。

(それこそ、妖魔とか精霊とか……ラズーンの神さま、だとか)

まさかね、と思いながら唇を囁む。

警戒しなければならない、いざとなったらアシャと剣を交えることさえ覚悟しなくてはならないかもしれない、祖国セレドとレアナのために。

(斬りたく、ない)

もう十分ユーノの手は血に塗れている。今さら無邪気なふりはするつもりなどないが、それでも敵に対してためらいなく剣を振るユーノを見るアシャの視線が、何となく変化しているのは気付いている。

(あたりまえ……だよ)

普通ならば花を飾り、ドレスを着て、平和な日々を愛おしむ年齢の娘だ。アシャが付き人を頼まれたとはいえ、引き受けてくれたのだから、そういう娘の身の回りの世話という思いだったのだろうに、ユーノはアシャは引きずり回し危ない目にばかり合わせている。

(疎ましがられても……当然、か)

この『山賊(コール)』退治を引き受けたときも迷惑そうだった。無理もない、それはわかっている。ユーノはまだうんと長い旅をしなくてはならないのだ。

(でも)

生きてるか死んでいるか、それを確かめもせずにここから逃げ出すわけにはいきません、私どもはあの子の親なんですから。

そう言い放たれて、辛かった。

そうか、そう思うのが親なのか。わが子の安否を心配して、何もできなくとも逃げ出すまいと考えるのが親なのか。

ならばユーノの両親は？ いくつかの夜、我が身を呈して我らを守れ、そう命じた彼らは一体何なのか。

「っ」

ユーノはきつく目を閉じた。

考えたくない。考えたくないから引き受けた。それほど娘を思う気持ちを全うさせたくて名乗り出た。それほど思われている娘を何とか無事に帰してやりたかった。そうすればきっとほっとする。

そうすれば、きっと。

「ユーノ」

「っ！」

ふいに真側に熱を感じて、ユーノはとっさに体を起こした。右手を懐に忍ばせた懐剣に、左手を常なら置いている長剣の場所に伸ばして身構え、ほっとする。

目の前には、戸惑った顔でアシャが半端に手を浮かせている。

「あ…」

握った懐剣から手を放す。

「何もしないよ」

微かに笑ったアシャが両手をそっと上に上げて空っぽなのを示してみせた。

「花がずれてるから、直そうとした、だけだ。すまん、急に手を伸ばしたからびっくりさせたんだな？」

「う……ん」

ユーノは一瞬泣きそうになったのを、かろうじて堪えて笑い返した。

「こっちこそ、ごめん。花、自分で直すから」

「ああ」

側に居たのがアシャだと忘れていたわけでもなければ、アシャを敵だと思っていたわけではない。けれど、苦笑して手を降ろす相手を警戒していたのは明らかで、それをはっきり思い知らせるような形になってしまった。

(違う、のに)

唇を噛みながら慌てて髪の花に触れる。ふわふわと頼りなく柔らかな感触が、指先を何度も潜り抜ける。

(レアナ、姉さま)

ふいとその柔らかさを追うようにレアナの面影が胸に広がった。

いい子ね、ユーノ、優しい子。

昔聞いた甘い慰め。

(違う)

違う。

優しくなんかない。優しい子ならば、人に剣を向けたりしない。敵を屠ったりしない。ましてや、

自分の思う相手が側に居るなら、ときめきこそすれ、こんな風に警戒したり、剣を握って身構えたりしない。

「ん…」

はらりと花びらが一枚落ちた。か弱く脆い花卉がなかなかうまく落ちてくれない。

「やりにくそうだな。全部花びらが落ちてしまうぞ」

「……ん、そ……だね」

アシャの苦笑した声が胸に堪えた。お前にはそんなものは似合わない、そう言われた気がした。

(わかっている)

きつく唇を噛み締めて、丁寧に整えようとするたびに花びらが散り落ちる。

(わかって、るから)

花一つさえ自分で満足に扱えない、それが分不相応な格好をしているからだと言われているようで、体が熱くなってなお焦る。

(何も、こんなときに)

アシャが見ているその前で、こんなみっともない格好を晒さなくてもいいじゃないか。

(綺麗だと思ってもらえなくてもいいから)

せめて、せめて。

「ユーノ」

「……っ」

「ちょっと触るぞ？」

「……」

優しく声をかけられて、思わず視線を上げた。側に寄ってきていたアシャが見下ろしたまま、一瞬固まる。それから、くすりと小さく笑って、

「こういうのは俺の方が慣れてる。何せ女装が趣味、だからな」

「へ、へえ、そう、なの？」

ほっとして、慌てて応じた。

「自分で認めるんだ？」

「冗談だ」

「認めたじゃない」

「冗談だと言ったぞ」

ほら、貸せ。

「ん」

指が触れた。ぎちぎちひきつれた髪をそっと弄って、撫でてくる。繊細で丁寧な動きに苛立った気持ちがおさまってくる。かなり花びらを散らしてしまったから足りなくなったのか、自分の髪から花を外してユーノにつけてくれる。

(気持ちいい)

誰か他人の指先でこれほどくつろげたことはなかったな、とユーノはぼんやりと思った。目を伏せて温かな指が触れてくるのを味わっていると、遠い昔に帰っていくような気がする。

自分は守ってもらえるのだと無条件に信じていた、遠い彼方の昔に。

「……ん、よし。これで落ちないぞ、少々暴れ回っても」

呼び掛けられて目を開けた。

いつの間にか、アシャの腕に抱えられるようにして髪を弄られていたのに気付く、慌てて姿勢を直す。

「ありがとう、助かった」

に、と笑って、どこか面映気な相手に距離をおきながら、

「ところで勝算はあるの？」

無理に話題を変えた。

花を扱い倦ねて困っているのを見兼ねて声をかけたら、思いもしない幼い顔で、しかも今にも泣きそうな顔で見上げられて固まった。

(なんて顔を、する)

怯えて不安がって頼りなさそうな顔。

命をやりとりする最中にもそんな顔は見せないのに、たかが花一つ散るだけで、どうしてそれほど傷ついた顔になってしまうのか。

(いつもそうだな)

自分が傷つくことには平気なのだ。命に関わる傷でさえ、笑ってしのいでしまうのだ。けれど、同じその心は、他の命が傷つくことには痛々しいほど敏感で。

女装が趣味だと気持ちをほぐしてやりながら、髪に触れて整えてやった。

(本当はきっと)

カザド兵も山賊(コール)も、できれば命を奪いたくないとユーノは心の底では思っている。

(だからこそ)

自分を第一に守れば傷つかない場合にもそれ相応の傷を負うのは無意識の差し引き条件なのだろう。相手を傷つける、その代償を自らの傷で支払って。

そういう心を抱えながら、それでも剣を振って生き延びてくるしかなかった自分を、ユーノはどこかで負担にしている。

小さく吐息をついて体を寄せてくるのは、きっと意識していない。自分が甘えるような無防備な顔を晒しているのも気付いていない。

(見せたくないな)

他のやつにユーノのこんな顔を見せたくない。

けれど、好きな男ができれば、そいつにはきっと見せるのだろう。

「……………」

アシャは眉を顰めた。今まで感じたことのない冷ややかな怒りを感じて、ますます顔を歪める。

(まずい)

この執着が何かを知らないほど子どもではない。けれど、その大きさは今まで感じたことがないほどで、見る見る胸を圧倒する。

誰にも、渡したく、ない。

コレハオレノモノダ。

(何を考えてる)

舌打ちしそうになって慌てて首をきつく振り、

「……ん、よし。これで落ちないぞ、少々暴れ回っても」

「ありがとう、助かった」

声をかけると、ユーノがはっとしたように体を起こした。うっすら赤くなっているのは、自分がアシャに抱き込まれるような形になっていると気付いたせいだろう。ユーノが急いで取った距離が不愉快になって、ドレスを乱し、どすりと胡座を組んで座る。

「ところで勝算はあるの？」

アシャの格好に呆れた顔で尋ねてくるユーノに肩を竦めてみせる。

「ともかく相手の状態がわからなけりゃな」

「そんな気持ちで引き受けたの？」

怖いなあ、と苦笑する相手に、どっちがだ、とやり返す。

「無鉄砲もいいところだぞ。万が一、ここで…大怪我をしてラズーンへ辿りつけなくなったらどうする気だ」

「死なないよ」

事もなげにユーノはアシャが避けたことばを使った。

「死なないって……もし、の時だ」

「絶対死なない」

ぎゅ、と唇を真一文字に結んだユーノが一瞬鋭い目でアシャを射抜き、すっと目を逸らせて、近付いてきた『鳴く山(コール)』を見る。

「……死ぬ、もんか」

『鳴く山(コール)』は馬に引かれた荷車に揺られる二人の目の前にその全貌を見せつつあった。

削いだような赤茶けた岩肌には暗い緑の樹木がしがみつくように生えている。それらの点々とした緑の間に、不格好にくり抜いたように見える洞窟が、夜の闇のように口を開けていて、その奥にちらちらと

おき火のような灯が揺れている。

「火をつけている...」

「奇妙だな」

アシャは眉を寄せた。

「この暑さなのに、どうして火がいる.....っ！」

ふいに、何に驚いたのか、馬がいきなり棒立ちになって暴れた。嘶き怯えてはね、荷車ごと倒れ込む。

「あっ」

「ユーノっ」

さすがに予想していなかったらしいユーノの体が軽々跳ね飛ばされそうになるのを、アシャはとっさに引き寄せて胸の中へ抱き込んだ。同時に荷車から転がり出たのはいいが、右手首を捻って体を支えてしまって顔を歪める。

「っ...」

「っ、手首？」

慌てたように胸にしがみついていたユーノが体を起こして覗き込んできた。

「捻ったの？」

「ちょっと、な」

「ご、めん...」

すうっとユーノの頬に赤みが昇った。

「私、を抱えてたからだね」

「ああ、別にそういうわけじゃ」

いつもならするはずのないへまをしたのは、抱き込んだユーノの髪から漂った甘い匂いに一瞬気を取られたせいだ、そう説明することができずに、曖昧に笑った。

「だって...」

「、ユーノ」

うろたえた顔で言い募ろうとした相手の背後の茂みがざわりと揺れて、アシャは目を細めた。

「っ」

振り返ったユーノの体にも緊張が走る。

茂みを掻き分けて出てきたのは、全身を覆う黒い服、片肩から巻きつけた毛皮の男達。浅黒い、どこか生気のない顔、のろのろと愚鈍そうな動き、けれどそれを裏切るようにぎらぎら光る鎖を握っていて、その先に何かわからぬもので黒く汚れた棘だらけの鉄球が揺れている。

「頭、が、お呼び、だ」

男の一人が初めて声を出した。木の皮を摺り合わせるような響きで、

「立て」

男達がぐると二人を取り囲んだ中で命じる。

その背後で一人の男が倒れた馬の首から血に塗れた剣を引き抜いて両肩に担ぎ上げ、別の一人が荷車を斧で砕いて粉々にしていくのが見えた。

凄まじい力にごくり、とユーノが唾を呑む。

「お迎えに、来て下さったのね」

アシャはユーノを促しながら、静かに微笑んで立ち上がった。

「ここから先はお前達二人で行け」

会話を遮って男が唐突に命じた。

「私達二人で？」

「.....」

男達はくると向きを変えてそのままどんどん歩み去る。たいまつ一つも渡してくれなかったから、男達が一つ目の角を曲がっていくあたりで、すぐに周囲が見えなくなっていった。

「これからどう行けと言うんだ」

「.....アシャ.....ほら」

「ん？」

すぐ側からユーノの声がして振り返ると、前方の暗闇に微かに青白く光るものが浮かんでいる。ちょうど岩肌に灯を点したように点々と光るそれに触れて、アシャはうなずいた。

「光石だ」

「ひかり、いし？」

「発光物質を含んでるんだ。そうか、光石はシェーランからも出土したのか」

道理でいろんなルートから入ってくるわけだ、と故郷に居た時のことを思い出していると、くいとユーノが服を引っ張った。

「アシャ.....なんかやばそうだな、ものがある」

「何.....」

光石がうっすらと照らす彼方の闇の中、光石を遮る大きな闇がある。その中央天井近くに燃えるように輝く二つの緑色の光が、ゆっくり変形して横に広がり、ふわりと縦に伸びた。

「っっ！」

次の瞬間、洞窟を満たしていた臭気が一層濃くなって、アシャは突き出された鼻面から剥き出された犬歯からかろうじて逃れた。

「ユーノッ！」

「っ！」

とっさに後ろへ飛び退るユーノを追うように、手前に体を乗り出してきたのは緑色の二つの複眼を光らせた怪物、赤ん坊ぐらいは軽々飲み込めるほどの口に巨大な犬歯が上下4本、後は骨も噛み砕くほどの威力を持った小型の鋭い歯がびっしりと並んでいる。生臭いにおいがあたりに立ちこめ、ごわごわとした毛に覆われた体が大きく伸びる。

キェアアアアアッ！

「レガだ！」

鞭のようにしななって飛んできた尻尾を間髪避けながら、アシャは叫んだ。ぼしりと岩肌を叩きつけて人の頭ほどの岩を抉り取っていく攻撃を食らったら、とてもすぐには起きあがれない。

「レガっ?!」

「太古生物の一種だ！」

「どうして、今こんなところに居るんだっ！」

鋭い気合いと一緒にドレスの一番下に隠していた短剣でレガの片目を急襲するユーノが叫ぶ。何度も振り降ろされる尻尾と激しく噛み鳴らされながら襲ってくる口を巧みに避ける姿は、初めてレガとやりあったとはとても思えない。

「来たぞ！」

今度はこちらに向かってきたレガの牙をかろうじて受け止めたものの、捻った手首のせいで力が入

らなかった。短剣を弾き飛ばされて、舌打ちしながら地面を転がる。痺れた手首に感覚が戻ってこ

ない。

(仕方ない)

こんなところで使いたくないが、と覚悟を決めた瞬間、

「アシャ、向こうへ走って！」

鋭いユーノの声が命じた。

「どうして！」

「いいから！」

何か策がある、と感じて突っ込んできたレガの鼻先から瞬間跳ね起き、示された出口の方へ走り出す。急に動いたアシャに気を取られたのだろう、体から言えば驚くほど小さな前足を地面について、

レガが体を丸めて後ろ足を引き寄せ、追撃にかかろうとして動きを止めた。

「は、ああっ！」

ユーノの叫びに肩越しに振り返ったとたん、側の岩棚を蹴り、天井近くの壁をなお蹴りつけ、気配に振仰いだレガの正面に身を投げるユーノの姿が見えた。大きく開く口に怯んだ様子もない、左腕が

痛むのか、微かに顔を歪めながら、それでも寸分のずれもなく、牙にドレスを引き裂かれながらも残った複眼にアシャの短剣を突き立てて、渾身の力で押し込んでいく。

ギャアアアアーツツ！

洞窟をレガの絶叫が満たした。耳を圧する音量が恨めし気に何度もこだまを呼びながら遠ざかり消

えていく。地響きを立てて倒れるレガから短剣を抜き放つユーノは裂かれたドレスに鮮血を浴び、髪

の花を舞い散らせながらレガを蹴ってその向こうへ飛び下りる。

やがて、どこに引っ掛かっていたのか、か…ん、と寂しい音を立てて櫛が降ってきた。

それを合図にしたように、ひくひくとレガの腹に痙攣が広がり、ぐぼ、と吐き気を催すような音を

たてて開いた口からどろどろした体液を吐く。

「ふ…う」

(仕留めたぞ、おい)

レガは確かに単純で的確な攻撃さえすれば倒せないものではない、それでも太古生物の中ではそれほど

ほど容易く仕留められる相手ではないのだ。

なのに、ユーノはアシャを囷にしたとは言え、一人で倒してしまった。

(とんでもない娘だな)

「ユーノ、お前はたいした……ユーノ？」

興奮して駆け寄りながら、アシャは飛び下りたユーノが膝をついた姿勢のまま身動きしないのに気

がついた。

「怪我をしたのか？！」

慌ててレガを飛び越え、側に寄り、そうではないことを知る。

ユーノは大きく目を見開いてまっすぐ前を見つめていた。レガに襲われても平然としていた顔が今は白く色を失っている。

「ユーノ……？」

「……娘…達」

「え？」

ユーノの視線の先を追って、アシャは舌打ちした。レガだと気付いたのなら当然娘達の運命にも思い至ってよかったのだ。前に回り込み、視界を遮って茫然としているユーノの体を抱きかかえる。

「……なぜ……？」

「……」

「……娘達……食べられて…ない……」

「ちっ」

(そんなところまで見てしまったのか)

「ユーノ」

「や、待って、待って、アシャっ」

抱え上げて、その場から連れ出そうとするアシャに抵抗し、小さな悲鳴を上げてユーノが見上げてくる。

「なぜ…？」

「ユーノ」

「娘達、生きてない、とは、思ってたんだ、だけど、でも、あれは」

黒い瞳が怒りを込めて潤んでいる。

「食べて、ない、アシャ」

「……ああ」

「どうして？ 食べるために娘達を攫ったんじゃないの？」

「……ユーノ」

「なぜ、あんな、ばらばらで、放ったままで、いっぱいあって、まるで遊んだみたいに……っ」

びくりとユーノが震える。

「遊んだ……？」

「……ユーノ」

嫌がる相手を引き起こし、抱き込みながら瞳を覗き込む。

「レガは喰わないんだ」

「……え？」

「レガは人間を食べない……ただ、おもちゃには、する」

「っっ」

「腐ってばらばらになったら終わり、次のおもちゃを探しに行く、そういうことだ」

「……だ…って」

ユーノが眉を寄せた。

「そんな…こと……言えない……言えないよ…っ」

しがみついてくるユーノが身悶える。

「あの人達に、そんなこと言えないっっ！」

「……わかってる」

「私……私…っ」

余計なこと、したの？

「違う」

辛そうで苦しそうで、その傷みを一瞬でも減らしてやりたくて、アシャは思わずユーノを抱き寄せた。ふわりと常ならぬ頼りなさで、そのまま腕におさまってくれる、そう見えた。だが。

次の一瞬、くん、とユーノは腕を突っ張った。

「？」

「……ごめん……ありがとう……でも、アシャ」

動きを止めたアシャに掠れた声でユーノがつぶやき、ゆっくりと顔を上げてくる。泣きじゃくっていたように見えたけれど、その頬には涙の跡はない。

「『女の人』はそういう仕草はしないんだ」

「おい」

「そのまま旅をしたら？ イルファが喜ぶよ」

「こら」

(何だ、今の今までこの腕におさまっていたんじゃないやなかったのか)

急に冷えた胸にアシャは戸惑い苛立った。

(俺を求めたんじゃないやなかったのか)

しぶしぶ腕を降ろしていくアシャにくすりと小さな笑い声まであげて、ユーノはくるりと背中を向けた。

「帰ろう……もう用はない」

洞窟を出ると我慢仕切れなかったらしいイルファとレスファートが迎えに来ていた。

「山賊（コール）達、おかしくなってたね」

ユーノが洞窟を振り返りながらつぶやく。

レガが倒れた後、再び男達と一戦交えることになるかと警戒したのだが、山賊（コール）達は腑抜けのように洞窟のあちこちで虚ろな目を見開いて転がるように倒れており、生きてはいたが何の反応も見せなかった。

「レガの声にはある種の催眠効果がある。レガの意志と共通している部分を持ったものを従えることができるからな……だが、本体が死ねば、操り糸の切れた人形と同じだ」

「しかし、レガとはなあ」

イルファが呆れ返る。

「一体世界はどうなっちまったんだ。そんなやつらはとっくの昔に滅びたんじゃないやなかったのか」

「……たいこ生物はお話の中にしかないって、父様はいつたよ」

「何か……起こってるのかな」

レスファートのことばに振り切るように洞窟に背中を向けるユーノが、物問いたげにアシャを見る。

「……そうだな」

アシャは曖昧にうなずいて視線を逸らせる。そのまま遥か高みを、星が煌めき出した空を見上げた。

「世界は広い、からな」

アシャは知っている。

なぜレガがこんなところに巢食っているのか。

本当はレガだけではない、太古生物と呼ばれた怪物や化け物達が次々蘇り始めているのを、アシャは知っている。知っていながら、その根本原因を制御することなく逃げている。

(そう、だ)

逃げている、のだ。

「主人には……俺が説明しよう」

「え？」

「お前は何も言わなくていい」

ユーノにそっと告げる。

「でも」

「……俺向きの、仕事だろ？」

ひょいと振り向いて、にやりと笑ってみせる。

「ああ、口先だけでごまかすってやつな！」

「う」

イルファが大きくうなずいた。

「くちさきさんずんのでっちあげってこと？」

「そうですよ～、レスはよく御存じですね～」

「人を詐欺師みたいに言うな」

「違うのか」

イルファが無然としながらアシャを指差した。

「？」

「その格好が既に詐欺だ」

「は？」

「女にしか見えん」

「……ほっといてくれ」

うんうん、そうだね、とユーノがようやく少し笑って、その瞳が微かに潤んでいるのを見ながら、アシャは今夜はイルファに勝ちを譲るか、と思った。